

国立大学法人お茶の水女子大学  
ジェンダー研究所

IGS

2021年度  
事業報告書

Institute  
for  
Gender Studies  
Ochanomizu  
University



# ジェンダー研究所

## 2021 年度事業報告書によせて

グローバル女性リーダー育成研究機構長／理事・副学長 石井クンツ 昌子

2021 年度はお茶の水女子大学の第 3 期中期目標・計画の最終年度であり、2015 年度以降続いてきたグローバル女性リーダー育成研究機構のジェンダー研究所 (IGS) とグローバルリーダーシップ研究所 (IGL) の事業体制も最終年度を迎えました。そのため、2021 年度は両研究所共催のシンポジウムの開催や最終評価委員会の実施など、二つの研究所がコラボする機会に恵まれた 1 年であったと思います。

コロナの終わりが見えない 2021 年度でしたが、両研究所では所長、専任教員、特任教員、スタッフが力を合わせてシンポジウムやセミナー等をオンラインで開催するなど大変積極的に取り組みました。特にジェンダー研究所では前向きに研究活動や国際交流が継続されました。『ジェンダー研究』の特集号のテーマは「パンデミックとジェンダー：社会・政治経済の再構築に向けて」という時宜を得たトピックで、注目を浴びました。

他にもノルウェー科学技術大学 (NTNU) のジェンダー研究センターとの共同研究である「ジェンダー平等/ダイバーシティ：ノルウェー・日本共同研究」は『Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway: Same but Different?』の出版で実を結びました。また、IGS と NTNU ジェンダー研究センターの研究教育交流をさらに発展させるため、ジェンダーおよびダイバーシティ研究教育の質を高める新しい教育戦略を構築する教育交流プロジェクトを立ち上げ、Norwegian Agency for International Cooperation and Quality Enhancement in Higher Education (DIKU) の UTFORSK プログラム助成金に採択され、2021 年度から開始しました。

2022 年 3 月にはグローバル女性リーダー育成研究機構の第 3 期中期目標期間最終評価が実施され、ジェンダー研究所では、政治・思想・生殖・身体などの観点からユニークな研究が進んだこと、複数の科学研究費事業が展開されていること、多くの優れた研究が行われていることなどが評価され、研究所の活動は全国的に見ても独創性の高い、日本を代表する研究機関として高い評価をいただきました。

2022 年度は第 4 期中期目標・計画の初年度ですが、新生グローバル女性リーダー育成研究機構ではジェンダード・イノベーション研究所が新設され、3 研究所体制でジェンダーに関連する研究や教育を開始しました。ジェンダー研究所は日本におけるジェンダー研究のハブ組織としてこれからも関連する事業や教育を積極的に進めてまいります。引き続き、ご指導のほどをどうぞよろしくお願いいたします。



# ジェンダー研究所2021年度の活動を振り返って

ジェンダー研究所長 戸谷 陽子

2021年度、新型コロナウイルス感染症パンデミック下での、ジェンダー研究所の活動も2年目となり、引き続き感染症対策に留意しつつ、所長以下、専任教員、研究員、研究系および事務系のスタッフが協力して研究活動および研究交流を進めました。日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、高水準の研究プロジェクトの実施、国際シンポジウム・IGS セミナー等の開催、学術雑誌の刊行、教育プログラムの実施、国際的学術ネットワークの構築、研究成果の発信と社会還元といった事業において、今年度もいっそうの成果を上げることができましたことをここに報告申し上げます。

2021年度も、オンラインを中心とした国際研究交流と、国際共同研究プロジェクトを推進しました。その成果は、IGS セミナー11件、国際シンポジウム3件、シンポジウム1件、国際フォーラム1件、研究協力員報告会1件、『ジェンダー研究』（特集：パンデミックとジェンダー）の発行という形で、結果として例年よりも数多くのプロジェクト成果に結実しました。事業内容はいづれも、政治・思想、生殖・身体、政策・労働、芸術・文化表象といった広く学際的な視点からジェンダー研究に接近するものであり、本報告書でぜひとも多岐にわたる内容・テーマで充実した本研究所の活動成果をご覧いただきたいと存じます。

2015年の本学グローバル女性リーダー育成研究機構開設時に、ジェンダー研究所はそれまでのジェンダー研究センターから発展的に改組し、あらためて機構の下での活動を開始しました。以来6年が経過し、2021年度は本学第3期中期目標・計画の最終年度の節目を迎えました。年度末には機構の活動を総括して報告し、それに対して実施された最終評価委員会では、当研究所のわが国有数のジェンダー研究拠点としての活動に対して高い評価をいただきました。本学はトランスジェンダー学生の受入制度を整備するなど、大学を挙げて男女共同参画社会の実現に取り組んでおります。こうした本学の取り組みや姿勢は着実に認知されており、ジェンダー研究所もその活動や取り組みを内外から期待されていることを実感しております。

当研究所の目的は「ジェンダーに関する総合的、国際的な研究および調査を行うとともに、ジェンダー研究者の育成に資する。」と規則に定めており、ジェンダー研究発展のための使命と責任を実感する次第です。これを基本理念として、今後も、確固とした学術的研究成果に支えられた、研究・教育その他の実践活動を推し進め、よりよき社会への還元と啓発を続けてゆきたいと考えます。日頃ジェンダー研究所の活動をご理解くださり、ご支援・ご協力をいただいておりますみなさまに心より御礼を申し上げますとともに、今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

## 【目次】

1. ジェンダー研究所 2021（令和3）年度事業概要.....	7
ジェンダー研究所概要	
2021 年度事業概要	
2. 研究プロジェクト.....	13
2021 年度研究プロジェクト成果報告	
（Ⅰ）政治・思想とジェンダー	
（Ⅱ）生殖・身体とジェンダー	
（Ⅲ）経済・移動とジェンダー	
海外の助成金による研究プロジェクト	
学会等活動一覧	
3. 国際シンポジウム・セミナー.....	25
2021 年度 国際シンポジウム・セミナー概要	
主催シンポジウム詳細	
ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在	
主催国際シンポジウム詳細	
#MeToo の政治学：#MeToo が残したフェミニズムの課題を考える	
グローバル女性リーダー育成研究機構主催国際シンポジウム詳細	
リーダーシップの地平：ジェンダー平等推進のための理論と実践	
グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言	
主催 IGS セミナー詳細	
商業的精子バンクに関する問題：倫理・ジェンダー・社会的側面から／日本文学における父娘関係： 欲望・暴力・支配・抵抗／生理の貧困／ジェンダー、エスニシティ、技能実習制度／出自を知ることが なぜ重要なのか：提供精子で生まれた人たちの経験と思い／戦争と美少女：エンターテインメントと しての戦いの表象／移住労働者の子どもたち／不妊と男性のセクシュアリティ／教育とジェンダー、 世界と日本：2030 年にむけて今日の課題／国際協力とジェンダー・トランスフォーマティブ・アプ ローチ／宝塚というランドスケープとジェンダー：ファンダムの文化的・地理的越境とその可能性／ 『ルッキズム』：女性美をめぐる理論と表象から	
主催研究会詳細	
IGS 研究協力員研究報告会	
後援イベント	
日本フェミニスト経済学会 2021 年度大会：コロナ災害があらわにした女性のいのちとくらしの課題	
4. 特別招聘教授プロジェクト.....	69
2021 年度特別招聘教授プロジェクト概要	

5. 国際研究ネットワーク.....	73
1) 海外研究交流	
2) 国際共同研究プロジェクト	
3) AIT ワークショップ	
4) INTPART プロジェクト	
5) JAWS	
6) 国内外招聘研究者一覧	
6. 若手研究者の育成.....	101
1) 専任・特任教員担当講義	
2) 2021 年度修士論文要旨	
7. 学術成果の発信.....	105
1) 学術雑誌『ジェンダー研究』	
2) プロジェクト報告書 IGS Project Series	
8. 文献収集と公開・史料電子化・ウェブ発信.....	111
1) 文献・資料の収集と公開	
2) IGS 史料電子化プロジェクト	
3) ウェブサイトでの情報発信	
9. 社会貢献.....	117
【資料】	
①構成メンバー.....	122
②研究プロジェクト一覧.....	132
③協力研究者一覧.....	133
④国際シンポジウム・セミナー・研究会一覧.....	137
⑤寄贈図書一覧.....	142
⑥電子化イベント一覧.....	143
⑦国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則.....	148
⑧国立大学法人お茶の水女子大学特別招聘教授に関する規則.....	150
⑨『ジェンダー研究』編集方針・投稿規程.....	151
⑩ジェンダー研究所ウェブサイト プライバシー・ポリシー.....	153



1.

# ジェンダー研究所 2021(令和3)年度 事業概要

ジェンダー研究所概要

2021 年度事業概要

## ▶ジェンダー研究所概要

# グローバルなジェンダー研究の拠点としての活動を伸展

お茶の水女子大学ジェンダー研究所は、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、国際的な学術ネットワークの構築を主要目的とし、高水準の国際的研究プロジェクトの実施、国際シンポジウム等の開催、国際的教育プログラムの実施、学術雑誌の刊行、研究教育成果のグローバルな発信と社会還元を推進している。

ジェンダー研究所の創立は1975（昭和50）年の女性文化資料館設立に遡る。以降、女性文化研究センター（1986（昭和61）年）、ジェンダー研究センター（1996（平成8）年）と改組を重ね、日本のジェンダー研究の発展に貢献してきた。そして、お茶の水女子大学が創立140周年を迎えた2015（平成27）年、「ジェンダー研究所」と名称を改め、「グローバルリーダーシップ研究所」と共に、「グローバル女性リーダー育成研究機構」構成研究所となった。ジェンダー研究所は、これまでに培ってきたジェンダー研究・教育および国際的な学術ネットワーク構築の実績を資源に、グローバル女性リーダー育成研究機構における中核的な研究機関として、学際的かつ先駆的な研究をより推進し、グローバルな研究成果発信と学術ネットワーク構築に務める。

[参照:本報告書148～149頁 資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」]

## ジェンダー研究所（Institute for Gender Studies (IGS)）の沿革と本学ジェンダー研究教育の動き

1875	東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）開校
1949	お茶の水女子大学設立
<b>1975</b>	<b>女性文化資料館設立</b>
<b>1986</b>	<b>女性文化研究センター設立</b>
1993	大学院人間文化研究科博士後期課程人間発達学専攻「女性学講座」を創設
<b>1996</b>	<b>ジェンダー研究センター（IGS）設立（国内大学初の「ジェンダー研究」を目的とする研究施設）</b>
1997	大学院人間文化研究科博士前期課程発達社会科学専攻「開発・ジェンダー論コース」設置
1998	大学院人間文化研究科博士後期課程「女性学講座」を人間発達科学専攻「ジェンダー論講座」に改組
<b>2003</b>	<b>21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア（F-GENS）」採択</b>
2004	国立大学法人 お茶の水女子大学設立
2005	大学院人間文化研究科博士後期課程「ジェンダー学際研究専攻」設置
2006	大学院人間文化研究科博士前期課程「ジェンダー社会科学専攻」設置
2007	大学院人間文化研究科を人間文化創成科学研究科に改組
<b>2015</b>	<b>グローバル女性リーダー育成研究機構 ジェンダー研究所設立</b>

## ▶ジェンダー研究所 2021 年度事業概要

2021 年度も世界的なパンデミック下で海外でのフィールドワーク調査や院生派遣プログラムが実施できない状況が続いているが、セミナーやシンポジウムのオンライン開催をはじめ、インターネットを通じての国際的な研究交流が続けられ、国際的な研究プロジェクトの新規助成金採択という成果も得た。また7月に刊行された『ジェンダー研究』第24号は「パンデミックとジェンダー」を特集テーマとし、現在進行形の社会課題に正面から取り組んだ。

### 構成メンバー

前年度末に特任講師1名が退職したことからスタッフ体制に変動があった。特任リサーチフェロー2名が特任講師に昇任し、ウェブサイト管理やポスター作成など技術・デザイン系の業務を担当するアカデミック・アシスタント1名の新規採用があった。事務系業務担当の特任リサーチフェローは、10月からリサーチ・アドミニストレーターとなった。前年度末で任期満了となっていた戸谷所長と研究員3名（棚橋、小玉、斎藤）は再任。新たに石丸径一郎准教授が研究員に任命された。足立真理子名誉教授が客員研究員、板井広明専修大学准教授と佐野潤子慶應義塾大学特任講師の2名が、研究協力員として研究所事業に参加した。

[参照:本報告書148～149頁 資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」  
122～131頁 資料①「構成メンバー」]

### 研究プロジェクト

2021年度は、IGS研究プロジェクトとして所属研究者それぞれが進めている共同研究・個人研究が5件、研究代表者または分担者として科研費を獲得しての研究プロジェクトが9件（うち2件は新規採択）、そして海外の助成金によるプロジェクト4件（うち3件は新規採択）の、計18件のプロジェクトが進行している。IGSの研究プロジェクトは元より国際的なものが多いが、新規採択の科研費プロジェクトのひとつは国際共同研究加速基金、海外助成金のプロジェクト3件も国際連携であり、国際共同プロジェクトへの助成金の獲得が増えた。研究会やセミナー、国際シンポジウムを開催したほか、学会発表や論文投稿、書籍刊行、学術誌『ジェンダー研究』の編集刊行により成果発信にも努めた。

[参照:本報告書13～24頁「研究プロジェクト」、105～110頁「学術成果の発信」]

### 国際シンポジウム等の開催

前年度に続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、イベントはオンラインでの開催となった。シンポジウム1件、国際シンポジウム1件、IGSセミナー12件、研究会1件を主催したほか、グローバルリーダーシップ研究所（IGL）と共同で国際シンポジウム2件を開催した。

IGS主催のシンポジウムやセミナーは、ジェンダー研究所所属研究者が、自身の研究成果と国際的な人脈を生かして企画しており、研究所の研究・教育事業と有機的に連携している。今年度は、『ジェンダー研究』第25号（2022年7月末刊行予定）の特集に連携する企画として、シンポジウム「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」を開催した。また国際シンポジウム「#MeTooの政治学」では、#MeTooにより露になったフェミニズムの諸課題について、日韓の研究者らが議論を深めた。当シンポジウムでは議論の端緒とするために、#MeTooの諸相を描いた韓国の最新ドキュメンタリー映画に当研究所が日本語字幕をつけて上映し大きな反響を呼んだ。

[参照:本報告書25～68頁「国際シンポジウム・セミナー」]

## 国際研究ネットワーク

IGS 研究者の海外渡航や海外の連携機関研究者の来日はできない状況が続いているなか、2021 年度も、ノルウェー、デンマーク、中国、台湾、韓国、インドネシア、タイ、ニュージーランドなどの教育研究機関の研究者らと研究交流および共同研究を行った。

これまでに構築してきた研究ネットワークから、新たに国際共同研究の助成金によるプロジェクトの立ち上げもあり、中国華東師範大学との共同研究は国際共同研究加速基金を、デンマークと日本の研究者による精子バンクに関する研究グループはデンマーク教育庁の助成金を、ノルウェー科学技術大学（NTNU）との共同プロジェクトはノルウェーの高等教育国際連携推進機関の助成金を獲得するという展開があった。また、NTNU との INTPART プロジェクトでは、国際比較研究の成果が Routledge 社から書籍刊行された。

タイのアジア工科大学院大学（AIT）との若手研究者国際交流プログラム「AIT ワークショップ」は、2021 年度も院生の交換派遣は実施できなかったが、関連授業「国際社会ジェンダー論」において、国際交流と「ジェンダーと開発」に関する企画として IGS セミナーを 2 件開催した。また当ワークショップが 20 周年を迎えたことから、『お茶大-AIT 国際交流ワークショップ 20 周年記念報告書』を編集刊行した。

[参照: 本報告書 73～100 頁「国際研究ネットワーク」]

## 若手研究者の育成

パンデミック下での教育活動も 2 年目となり、前年度の経験から培われた創意工夫を活かしたオンライン授業や、オンラインと対面を組み合わせたハイブリッド方式の授業が、大学が感染状況に応じて指定する感染対策レベルに沿って実施された。ジェンダー研究所所属専任教員による学部講義科目は、「21 世紀型文理融合リベラルアーツ ジェンダー8 政治・政策とジェンダー」、「アジア社会とジェンダー」など。大学院講義科目は、「比較政治論」「ジェンダー政治経済学」「フェミニズム理論の争点」「ジェンダー立法過程論」「ジェンダー基礎論」「ジェンダー社会経済学演習」など。また、特任講師が担当する大学院科目「国際社会ジェンダー論」には IGS の国際教育交流プログラム「AIT ワークショップ」が組み込まれているが、タイでのフィールドワークに代わる教育が実施された。

また所属教員指導のもと、6 人の院生が博士前期課程ジェンダー社会科学専攻「開発・ジェンダー論コース」を修了した。

[参照: 本報告書 101～104 頁「若手研究者の育成」]

## 学術雑誌『ジェンダー研究』刊行と学術成果発信

国際的学術雑誌『ジェンダー研究』第 24 号（2021 年 7 月刊行）は「パンデミックとジェンダー」を特集し、パンデミックという非常事態下でのジェンダー課題を多角的に検討した。現在進行形の社会課題についての最新の論考による研究論文、研究ノート、現場・事例報告が掲載されている。

報告書シリーズの IGS Project Series としては、特別招聘教授プロジェクトの成果をまとめた報告書を 2 冊、生殖領域シリーズの IGS セミナーの記録集を 4 冊、刊行した。

[参照: 本報告書 105～110 頁「学術成果の発信」]

## 文献収集・史料電子化、社会還元

文献収集・資料整理分野では、寄贈図書・資料の受入のほか、所属研究者らの著書や、主催シンポジウムやセミナーの関連書籍の購入を進めた。また、女性文化資料館創立以来今日にいたるまでのジェン

ダー研究所の事業記録を電子化し、デジタルアーカイブとして後世に残す史料電子化プロジェクトも引き続き実施されている。過去の実施事業のデジタル化が進んできたことから、2021 年度は将来的なデータ活用を視野に入れたメタデータ構築に着手した。

ウェブサイトによる情報発信は、例年と同じくイベント案内や開催報告の発信に取り組むほか、ウェブサイト掲載情報を精査し、研究所事業全般についての情報公開が日本語および英語でわかりやすくなされるよう、情報整理作業を進めている。

社会貢献の面では、一般公開のセミナー・シンポジウム等開催による事業成果社会還元のほか、所属研究者は、報道機関の取材に応じるなど、ジェンダー課題に関する知見の頒布にも努めている。

[参照:本報告書 111～116 頁「文献収集公開・史料電子化・web 発信」、117～120 頁「社会貢献」]

## 特別招聘教授プロジェクト

海外から著名な研究者を招聘する特別招聘教授プロジェクトは、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により、今年度も招聘の実現はなかったが、2019 年度までに任についた特別招聘教授 8 名の報告書の刊行作業が進められた。

[参照:本報告書 150 頁 資料⑧「国立大学法人お茶の水女子大学特別招聘教授に関する規則」  
および 69～71 頁「特別招聘教授プロジェクト」]



# 2.

## 研究プロジェクト

2021 年度研究プロジェクト成果報告

(I) 政治・思想とジェンダー

(II) 生殖・身体とジェンダー

(III) 経済・移動とジェンダー

海外の助成金による研究プロジェクト

学会等活動一覧

## ▶ 2021 年度研究プロジェクト成果報告

# 学際的、先駆的ジェンダー研究を目指して

ジェンダー研究所は2015年から2021年度までの7年間のプロジェクトで、グローバル女性リーダー育成研究機構の中核的な研究機関として先端的ジェンダー研究に取り組んできた。ジェンダー研究所の前身であるジェンダー研究センター時代は、21世紀COEプログラム『ジェンダー研究のフロンティア』（2003～2007年度）の成果をはじめとして、優れた業績をあげた。ジェンダー研究所はこの研究成果を継承・発展させるとともに、伝統的な学問分野に縛られない学際的で先駆的なジェンダー研究を志している。ジェンダー研究所は、アジアにおけるジェンダー研究の拠点を目指し、国際的な共同研究と、その成果発信を積極的に進めており、蓄積された研究成果は広く社会へ還元していく。

### 3分野の先端研究領域の発展と国内・国際共同研究をリード

ジェンダー研究所は、(I) 政治・思想とジェンダー、(II) 生殖・身体とジェンダー、(III) 経済・移動とジェンダーの3つの分野において先端研究を進めている。この3分野は、独自性を維持しながら有機的につながったプロジェクトであり、総合的な研究成果を達成することを目的に推進されており、学内研究員、客員研究員、研究協力員の協力を得ながら、研究成果をあげている。各研究分野ごとに研究会や公開セミナーを実施したほか、国際シンポジウムの実施、成果出版物の刊行、国際共同研究や国際ネットワークの構築に取り組んだ。今年も新型コロナウイルス感染症の影響により、アジア工科大学院大学における院生交流（本報告書89～90頁参照）など、国際的なネットワーク構築は規模を縮小せざるを得なかったが、オンラインでの取り組みによって最大限の成果をあげることができた。また、研究所メンバーらは論文執筆のほか、学会発表、外部講演などを活発に行った。個々のプロジェクトの研究概要については、本報告書16～23頁を参照していただきたい。

### 国際シンポジウム、IGSセミナー、研究会の開催と学術雑誌『ジェンダー研究』の刊行

各研究分野におけるシンポジウムやセミナーの開催と、『ジェンダー研究』の刊行により、成果発信に力を入れた。

今年も昨年につき新型コロナウイルス感染症拡大により、国際シンポジウムやセミナーはすべてオンラインで実施した。オンラインイベントには、研究者や大学院生、学部生、行政担当者、一般市民など、非常に幅広い層から参加者を得ることができた。時宜にあったテーマを取り上げたことで、聴衆との議論も活発に行われた。研究活動の厳しい状況の中で研究成果を社会的に還元することができたといえる。

本研究所刊行の学術誌『ジェンダー研究』は「パンデミックとジェンダー——社会・政治経済の再構築に向けて——」のテーマの下で第24号を刊行した。研究論文2本と研究ノート3本、そして現場報告／事例報告3本を特集として掲載したほか、投稿論文5本、書評11本という構成において、2021年7月に発行された（本報告書106～109頁参照）。2020年3月からの新型コロナウイルス感染症は世界規模のパンデミックとなり、2021年度末においても終わりが見えない。この2年間「ステイホーム」、休校、休園などを頻繁に強いられ、行動制限を余儀なくされた。『ジェンダー研究』はその影響をいち早く分析するために広く論考を募集する形で特集を企画した。後年、2020年の状況を理解する一助となる歴史的な資料としても意義があると考えられる。

## 2021 年度研究プロジェクト 分野別一覧

(I) 政治・思想とジェンダー
IGS 研究プロジェクト 「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究
IGS 研究プロジェクト 「東アジアの越境的女性運動」研究
科学研究費基盤研究 B (課題番号: 18H00817) 女性の政治参画の障壁: 国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査
科学研究費基盤研究 C (課題番号: 19K12604) ジェンダークオータの政治学: 制度化と抵抗
(II) 生殖・身体とジェンダー
IGS 研究プロジェクト 生殖医療とジェンダー
科学研究費基盤研究 C (課題番号: 18K00034) 諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究
(III) 経済・移動とジェンダー
IGS 研究プロジェクト 資本と身体ジェンダー分析: 資本機能の変化と『放逐』される人々
IGS 研究プロジェクト 国際労働力移動のジェンダー分析
科学研究費基盤研究 A (課題番号: 19H00607) 移民受入れ国-送出国の政策相互連関: 国際社会学からの比較研究
科学研究費基盤研究 B (課題番号: 20H01468) 新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー
科学研究費基盤研究 B (課題番号: 19H01578) 再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯
科学研究費基盤研究 C (課題番号: 19K12603) 香港における移住女性の再生産労働力配置: 「グローバル・シティ」のジェンダー分析
科学研究費基盤研究 C (課題番号: 21K12395) インドネシア人帰還移民の再統合における労働経験の意味: 移住先での労働者層別分析
科研費国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 B) (課題番号: 21KK0033) 人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー
海外の助成金によるプロジェクト
ノルウェーリサーチカウンシル (287699) INTPART 「ジェンダー平等/ダイバーシティ: ノルウェー・日本共同研究」
ノルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku (UTF-2020/10135) UTFORSK 「ノルウェーと日本におけるジェンダー平等およびダイバーシティ教育」
デンマーク教育研究庁 (Uddannelses- og Forskningsstyrelsen) の助成プロジェクト Reconceiving Donor Conception in Denmark and Japan
Konrad Adenauer Foundation (Konrad Adenauer Stiftung) の支援によるアジア 10 カ国共同研究 Substantive Representation of Women Parliamentarians and Gender Equality in Asia: A Comparative Study

(I) 政治・思想とジェンダー

**IGS 研究プロジェクト**

**「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究**

【研究担当】 申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究者】 三浦まり (上智大学教授)、ステイール若希 (元名古屋大学特任准教授)、  
濱田真理 (Stand by Women 代表)、Soo-hyun Kwon (Sogang University) ほか

【概要】

東アジア地域はその経済発展の成果により国際的に注目されているが、政治の民主化の道筋は一様ではない。本研究プロジェクトでは、日本と韓国、台湾の議員を対象としたアンケート調査による国際比較分析を行ない、東アジア地域において、女性の政治代表性を向上または妨げる要素は何か、政治制度におけるジェンダー多様性を実現させるにはどのようにしたらよいかを検討する。

**IGS 研究プロジェクト**

**東アジアの越境的女性運動**

【研究担当】 大橋史恵 (IGS 准教授)

【概要】

今日の女性運動は、路上や広場、公共交通機関、大学キャンパス、議場、ジャーナリズム、サイバー空間など、さまざまな場で実践され、課題解決に向けた国際的連帯とアクションを生み出している。本研究は東アジアにおけるそのような越境的女性運動の展開について考察するものである。具体的には (1) ILO「家事労働者のためのディーセント・ワークに関する条約」(第 189 号条約) に関連する労働運動、(2) 反軍事化をめぐる女性たちの運動、(3) 中国の女権主義者たちのトランスローカル/トランスナショナルな運動に目を向ける。

**科学研究費基盤研究 B (課題番号: 18H00817)**

**女性の政治参画の障壁: 国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査**

【研究担当】 申琪榮 (IGS 教授) [研究分担者]

【研究代表者】 三浦まり (上智大学教授)

【期間】 2018~2022 年度 (延長)

【概要】

本研究は「女性の政治参画に対する障壁」を国会議員および主要政党の都道府県支部への調査を通じて明らかにする。女性議員が少ない原因に関してはすでに国内外で研究の蓄積があり、複合的な要素によって女性候補者の数が抑制されていることが分かっている。中でも大きな障壁となっているのが、「政党の候補者リクルートメントと公認決定過程」である。本研究はそこに焦点をあて、郵送調査とインタビュー調査を組み合わせることで、なぜ女性候補が擁立されることが少ないのか、どこに障壁があるのかを特定する。これまで海外の研究で指摘されているジェンダー・ステレオタイプ、男性のホモ・ソーシャル・ネットワーク、成功体験の過大評価、潜在候補者への説得方法の男女差などについて、それらはどの程度の影響力を日本では持っているのか、政党差、地方差はどのように見られるのかを明らかにする。

科学研究費基盤研究 C (課題番号: 19K12604)

## ジェンダークォータの政治学: 制度化と抵抗

【研究代表者】 申琪榮 (IGS 教授)

【期間】 2019~2022 年度 (延長)

### 【概要】

議会のジェンダー公平な代表性を確保するために導入されたジェンダー・クォータ (女性候補者割当制) の効果とその制度が女性の政治的的代表性に及ぼす影響を分析する。事例として取り上げる韓国は、2000 年代前半から政党の候補者の一定割合を女性に当てるクォータ制度を導入した。しかし、クォータが実施されて 15 年が経た現在も女性議員は 20% に至らず、現行クォータ制度に疑問が呈されている。先行研究では、クォータ制度が効果を出せない理由の一つに、議会の男性優位性が脅かされることへの抵抗、すなわち、クォータ・バックラッシュが指摘されている。本研究は、過去 15 年間の政党別選挙データ及び政党関係者や女性議員への聞き取り調査を通じて、クォータ制度の実施状況、クォータで当選した女性議員の政治的キャリアパス及び政党の公認過程を分析し、クォータ導入後に現れたクォータ・バッシングの諸相を明らかにすることで、韓国でクォータ制度が十分な効果を発揮できない原因を解明するとともに国際比較のための理論構築を目指す。

(II) 生殖・身体とジェンダー

**IGS 研究プロジェクト**

**生殖医療とジェンダー**

【研究担当】 仙波由加里 (IGS 特任講師)

【概要】

生殖医療の進歩はめざましく、第三者の精子や卵子、代理出産を利用した生殖医療技術の是非について、社会や専門家集団の間で検討が不十分なまま、一般社会での利用が広がっている。こうした状況は、産む性である女性たちに、より大きな影響を及ぼしている。本研究では、国内外を問わず、生殖医療の普及が女性たちに及ぼしている影響を明らかにする。

**科学研究費基盤研究 C (課題番号：18K00034)**

**諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究**

【研究担当】 仙波由加里 (IGS 特任講師)

【期間】 2018～2021 年度

【概要】

日本の精子提供はこれまで匿名で実施されてきた。近年、卵子提供にも注目が集まる中、ドナーの匿名性の是非について議論される機会が増えると予測される。本研究は国内での議論に向けて、出生者の出自を知る権利を法で保障する国について、法制定までにどのような議論があったか、および法施行後の状況明らかにするものである。

### (Ⅲ) 経済・移動とジェンダー

#### IGS 研究プロジェクト

##### 資本と身体ジェンダー分析

【研究担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【共同研究者】足立真理子（IGS 客員研究員）、板井広明（IGS 研究協力員/専修大学准教授）

##### 【概要】

本プロジェクト「資本と身体ジェンダー分析：資本機能の変化と『放逐』される人々」は、グローバル金融危機以降の資本の中核機能の変化を分析する。サスキア・サッセンの「放逐 expulsions」概念に着目して、従来の身体断片化や排除/包摂の概念では把握不能な「放逐」の「常態化」をジェンダー分析の視点から行う。

#### IGS 研究プロジェクト

##### 国際労働力移動のジェンダー分析

【研究担当】平野恵子（IGS 特任講師）

##### 【概要】

国際労働力移動は、グローバルな政治経済状況や受入国における移民政策のみならず、送出し国の政治、経済、文化といった種々の要因にも規定される。今年度は、ベトナム、インドネシア、フィリピンからの移住労働者、特に技能実習生や移住労働者の子どもたちが直面した問題を議論する。

#### 科学研究費基盤研究 A（課題番号：19H00607）

##### 移民受入れ国—送出し国の政策相互連関：国際社会学からの比較研究

【研究担当】平野恵子（IGS 特任講師）[研究分担者]

【研究代表者】小井土彰宏（一橋大学教授）

【期間】2019～2021 年度

##### 【概要】

本研究は、移民をめぐる諸問題を、受入れ国および送出し国における諸政策の動的連関が及ぼす影響から考察する。分担者は、インドネシアの海外雇用政策分析を担当している。

#### 科学研究費基盤研究 B（課題番号：20H01468）

##### 新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー

【研究担当】大橋史恵（IGS 准教授）[研究分担者]、足立真理子（IGS 客員研究員）[研究分担者]

【研究代表者】堀芳枝（早稲田大学教授）

【期間】2020～2022 年度

##### 【概要】

本共同研究は、IT-BPO の実証研究と国際比較によって、アジアについての新しい国際政治経済学を構築するものである。具体的には IT-BPO 産業の新国際分業の成立にともなう女性の労働力の再配置と、成長の果実としての中間層の成長と消費、都市化の進展、さらにはこうした経済社会の変容が、各国の民主主義に与える影響を国際比較から検討する。

**科学研究費基盤研究 B (課題番号：19H01578)**

**再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯**

【研究担当】大橋史恵 (IGS 准教授) [研究分担者]、平野恵子 (IGS 特任講師) [研究分担者]

【研究代表者】定松文 (恵泉女学園大学教授)

【期間】2019～2021 年度

【概要】

本研究は、再生産労働の国際分業が進展する日本において、次の二点に焦点を当て実証的に検討する。第一に歴史的視点からの雇用主—派遣企業—労働者の非対称的な関係、第二に家事・ケア労働者が有する限定的社会関係資本から選択する行為や集合行為によって、労働者を取り巻く制度の変容。

**科学研究費基盤研究 C (課題番号：19K12603)**

**香港における移住女性の再生産労働力配置：「グローバル・シティ」のジェンダー分析**

【研究代表者】大橋史恵 (IGS 准教授)

【期間】2019～2021 年度

【概要】

本研究は、香港社会において異なる移住女性による再生産労働力がどのように配置されてきたかを、中国人事業労働者と外国籍家事労働者およびその雇用主を対象としたオーラル・ヒストリーの聞き取りから明らかにするものである。香港が輸出志向工業化路線から東アジアの金融・貿易サービスの中枢を成す「グローバル・シティ」へと転換した時期は、外国籍の家事労働者の受け入れが拡大していくとともに、主に広東省に出自をもつ中国人女性の労働力配置に変化が生じた時期と重なる。1980 年代末から今日までの香港の社会経済構造の変動において、トランスナショナルにあるいはトランスローカルに移動して家事労働者になった女性たちはどのように受け入れられたのか。異なるケアの担い手たち（移住女性）と受け手たち（雇用主）の「ケアの記憶」を通じて香港の再生産領域の変化をとらえたい。

**科学研究費基盤研究 C (課題番号：21K12395)**

**インドネシア人帰還移民の再統合における労働経験の意味：移住先での労働者層別分析**

【研究担当】平野恵子 (IGS 特任講師) [研究分担者]

【研究代表者】中谷潤子 (大阪産業大学教授)

【期間】2021～2023 年度

【概要】

本研究は、インドネシアにおける帰還移民を対象に、異なる労働者層における移動の実相を比較し、再統合の在り方を明らかにする。具体的には、家事労働に代表される非熟練労働、日本での技能実習、看護・介護等のケア労働に従事する移住労働者を対象とし、帰還後の新たなライフステージ構築に向けての彼らの自立支援の在り方や労働経験の活かし方を、現地調査を基に考察する。

科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 B）（課題番号：21KK0033）

## 人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー

【研究担当】大橋史恵（IGS 准教授）[研究分担者]

【研究代表者】堀口正（大阪公立大学教授）

【期間】2021～2024 年度

### 【概要】

本研究は科研費・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））を受け、2021 年 12 月から 2025 年 3 月にかけて実施される国際共同研究のプロジェクトである。人民公社期（1950 年代～70 年代）の中国農村における生活秩序の変化とジェンダーについて、資源配分のあり方に着目して、実証的に検討することを目的とする（本報告書 88 頁参照）。

中国農村では、1949 年の「暫定憲法」や 50 年の「婚姻法」「土地改革法」の公布、また人民公社制度の展開により、封建的な慣習の廃絶が進められるとともに男女平等の制度的基盤が構築されていった。ところが、生産労働への参加の程度の男女差（労働点数に対する女性差別の存在も）、耕地や水利施設などの共有資源へのアクセスに女性と男性とでどの程度違いがあったのかなど、不明な点が多い。さらに公共食堂や託児所の現実的な利用状況、家事やケアなど再生産労働の性別分業についても、研究の空白部分になっている。

以上のことから、①各地農村における人民公社期の資源配分のあり方を解明すること、②世帯内外における生産・再生産労働の労働力配置の実態を考察し、「村」や「家」の権力関係や規範にどのような揺らぎがあったのかを解明すること、③さらに①②と関係する問題として、国家レベルの指針や計画生育が基層社会における生活秩序に与えた影響を解明する。

海外の助成金によるプロジェクト

ノルウェーリサーチカウンスル (287699)

INTPART 「ジェンダー平等／ダイバーシティ：ノルウェー・日本共同研究」

【研究担当】

石井クンツ昌子 (本学理事・副学長)

小玉亮子 (IGS 研究員)

戸谷陽子 (IGS 所長)

仙波由加里 (IGS 特任講師)

吉原公美 (リサーチ・アドミニストレーター)

佐野潤子 (慶應義塾大学特任講師、IGS 研究協力員)

松田デレク (国際教育センター講師)

ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター研究者

【期間】 2019～2022 年度

【概要】

ジェンダー平等とダイバーシティに関する、NTNU ジェンダー研究センターとの共同プロジェクト。ノルウェーと日本のジェンダー平等およびダイバーシティの現状状況について理解を深め、社会・文化・歴史・政治的背景を含めて分析・考察する国際比較研究し、類似と相違についての理解を深めることを通じて、新たな知見を得ることを目指す。担当研究者が、それぞれの専門領域に沿ってノルウェーの研究者と組んで研究を進める (本報告書 86 頁参照)。

ノルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku (UTF-2020/10135)

UTFORSK 「ノルウェーと日本におけるジェンダー平等およびダイバーシティ教育」

【研究担当】

小林誠 (グローバルリーダーシップ研究所長) [本学側代表]

戸谷陽子 (IGS 所長) [本学側プロジェクト・コーディネーター]

石井クンツ昌子 (理事・副学長)

松田デレク (国際教育センター講師)

岡村利恵 (グローバルリーダーシップ研究所特任講師)

吉原公美 (リサーチ・アドミニストレーター)

ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター研究者

【期間】 2021～2025 年度

【概要】

ジェンダーおよびダイバーシティ研究教育の質を高めるための新しい教育戦略を構築するプロジェクト。学生、若手研究者、教員が、パートナー大学での共同セミナーや共同指導を経験するなど、質が高く活力に満ちた、国際的な学びの環境を提供する。研究発表や産学連携への参与など若手研究者への機会提供や、論文の共同執筆など研究者同士の将来的なパートナーシップ発展につながる活動も行う。また、SDGs のジェンダー・ダイバーシティ関連の目標達成に資する成果を目指す (本報告書 87 頁参照)。

## 海外の助成金によるプロジェクト

### Konrad Adenauer Foundation (Konrad Adenauer Stiftung)の支援によるアジア 10 ヶ国共同研究 Substantive Representation of Women Parliamentarians and Gender Equality in Asia: A Comparative Study

#### 【研究担当】

Ki-young Shin (Ochanomizu University Professor, Japan)

Ruwanthi Jayasekara (Institute of National Security Studies Associate Researcher, Sri Lanka)

Aashiyana Adhikari (Center for South Asian Studies Research Associate, Nepal)

Syeda Lasna Kabir (University of Dhaka Professor, Bangladesh)

Ummu Atiyah binti Ahmad Zakuan (Universiti Utara Malaysia Senior Lecturer, Malaysia)

Ella Syafputri Prihatini (Universitas Bina Nusantara Lecturer, Indonesia)

Sara Niner (Monash University Lecturer, Australia)

Therese Thi Phuong Tam Nguyen (Universidade Nacional Timor Lorosa'e Head of Community Development Department, Republika Demokratika Timor Lorosa'e)

Jean S. Encinas Franco (University of Philippines Associate Professor, Philippines)

Chang-ling Huang (National Taiwan University Professor, Taiwan)

Mikiko Eto (Hosei University Professor, Japan)

Devin K. Joshi (Singapore Management University Associate Professor, Singapore)

【期間】 2021 年 2 月～2022 年 7 月

#### 【概要】

アジア 10 ヶ国（日本、韓国、台湾、フィリピン、ネパール、スリランカ、東ティモール、バングラデシュ、インドネシア、マレーシア）における女性の実質的な政治代表性について、各国の男女国会議員に対してインタビュー調査を実施した。女性議員が多い国会の委員会、ある程度いる委員会、そして女性議員がほとんどいない委員会に分けて、ジェンダー平等や女性の利害関心がどの程度、どのようにして委員会の議題として議論されているのか、などについて比較研究した。研究成果は書籍 *Substantive Representation of Women in Asian Parliaments* として Routledge 社から 2022 年 8 月に刊行される（本報告書 84 頁参照）。

### デンマーク教育研究庁 (Uddannelses- og Forskningsstyrelsen) の助成プロジェクト Reconceiving Donor Conception in Denmark and Japan

【研究担当】 仙波由加里 (IGS 特任講師)

【研究代表者】 Stine Willum Adrian

【期間】 2022 年 3 月～2023 年 12 月

#### 【概要】

日本では精子ドナーの不足が問題となっており、デンマークには世界的にも規模の大きい精子バンクが複数存在する。デンマークの精子バンクは日本の不妊カップルにも注目されており、これを利用する者も少なくない。そこで、本プロジェクトでは、デンマークの研究者 3 名と日本の研究者 5 名で、両国のドナーの確保を含む精子バンクの状況を調査し、それらの調査を通して、安全性を確保するためのドナーのスクリーニングの在り方やドナーへの報酬の是非、ドナーの匿名性の問題等について検討し、その結果を政府や社会に向けて発信していく（本報告書 87 頁参照）。

## 2021 年度 学会等活動一覧

### 戸谷陽子（所長）

日本英文学会（編集委員）、日本アメリカ文学会（東京支部評議員・編集委員）、日本アメリカ演劇学会（評議員）、日本アメリカ学会、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構（学位審査会専門委員）

### 申琪榮（教授）

International Political Science Association、American Political Science Association、European Conference on Gender and Politics、International Association for Feminist Economics、日本政治学会（分野別研究会「ジェンダーと政治研究会」）、日本比較政治学会、日本フェミニスト経済学会、日本社会政策学会、「女性・戦争・人権」学会、『ジェンダー研究』編集長、ソウル大学日本研究所『日本批評』海外編集委員、釜山大学女性学研究所『女性学研究』編集委員

### 大橋史恵（准教授）

International Association for Feminist Economics、日本社会学会、関東社会学会、日本フェミニスト経済学会（幹事会役員、『経済社会とジェンダー』編集長）、ジェンダー史学会、現代中国学会、中国女性史研究会、経済理論学会分野別ジェンダー分科会

### 仙波由加里（特任講師）

日本医学哲学・倫理学会（国際誌編集委員、広報委員会委員）、日本生命倫理学会（評議員）、日本生殖看護学会、European Society of Human Reproduction and Embryology (ESHRE)、Society for Social Studies of Science (4S)

### 平野恵子（特任講師）

International Association for Feminist Economics、日本社会学会、国際ジェンダー学会（理事・評議員）、日本フェミニスト経済学会（幹事）、移民政策学会（査読）、アジア政経学会、東南アジア学会、インドネシア女性・ジェンダー・子供学会誌 Salasika 査読委員

# 3.

## 国際シンポジウム・ セミナー

2021 年度 国際シンポジウム・  
セミナー概要

主催シンポジウム詳細

主催 IGS セミナー詳細

主催 IGS 研究会詳細


▶ 2021 年度 国際シンポジウム・セミナー概要

## 専門性の高い学際的なイベントをオンラインで開催

前年度に続き 2021 年度もイベントはオンラインでの開催となった。IGS 国際シンポジウムは 1 件、「#MeToo の政治学」を開催した。韓国フェミニズムの最前線で活躍する研究者を招聘した本シンポジウムは、関連ドキュメンタリー映画に当研究所が日本語字幕をつけて上映し、シンポジウムの動画とともに YouTube 配信するという、画期的な学術イベントとなった。#MeToo が巻き起こした社会の変化とその背景にあるフェミニズムの諸課題について、日韓の研究者が一般参加の聴衆とともに議論を交わした本シンポジウムは、申込者数約 630 人、当日のリアルタイム参加者 329 人を記録した。学術的な議論を深めるとともに、広く一般の聴衆にもジェンダーの研究成果を還元することができたといえるだろう。

このほか、美術史をジェンダー視点で読み解くシンポジウムと、グローバルリーダーシップ研究所との合同シンポジウム 2 件を開催した。また、学際的で多彩、意欲的なテーマのセミナー・研究会を 13 件開催した。



### IGS 主催シンポジウム

	イベント名	参照
	IGS シンポジウム ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在	29 頁

### IGS 主催国際シンポジウム

	イベント名	参照
	IGS 国際シンポジウム #MeToo の政治学：#MeToo が残したフェミニズムの課題を考える	32 頁

### グローバル女性リーダー育成研究機構主催 国際シンポジウム

	イベント名	参照
	国際シンポジウム（ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同） シリーズ：アジアにおける女性リーダーシップを考える リーダーシップの地平：ジェンダー平等推進のための理論と実践	35 頁
	国際シンポジウム（ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同） シリーズ：アジアにおける女性リーダーシップを考える グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言	38 頁

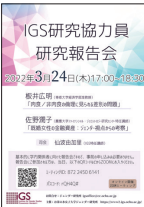
IGS 主催 IGS セミナー

	イベント名	参照
	IGS セミナー（生殖領域シリーズ） 商業的精子バンクに関する問題 倫理・ジェンダー・社会的側面から	41 頁
	IGS セミナー 日本文学における父娘関係 欲望・暴力・支配・抵抗	43 頁
	IGS セミナー（生殖領域シリーズ） 生理の貧困	45 頁
	IGS セミナー ジェンダー、エスニシティ、技能実習制度	47 頁
	IGS 国際フォーラム（生殖領域シリーズ） 出自を知ることがなぜ重要なのか 提供精子で生まれた人たちの経験と思い	49 頁
	IGS セミナー 戦争と美少女 エンターテインメントとしての戦いの表象	52 頁
	IGS セミナー 移住労働者の子どもたち	54 頁
	IGS セミナー（生殖領域シリーズ） 不妊と男性のセクシュアリティ	56 頁


IGS 主催 IGS セミナー

	イベント名	参照
	IGS セミナー（学内限定） 教育とジェンダー、世界と日本 2030 年にむけて今日の課題	58 頁
	IGS セミナー 国際協力とジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ	60 頁
	IGS セミナー 宝塚というランドスケープとジェンダー ファンダムの文化的・地理的越境とその可能性	62 頁
	IGS セミナー 『ルッキズム』 女性美をめぐる理論と表象から	64 頁

IGS 主催 IGS 研究会

	イベント名	参照
	IGS 研究会 IGS 研究協力員研究報告会	66 頁

IGS 後援イベント

	イベント名	参照
	日本フェミニスト経済学会 2021 年度大会 コロナ災害があらわにした女性のいのちとくらしの課題	68 頁

## ▶ 2021 年度 主催シンポジウム詳細

### IGS シンポジウム

## ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在

【日時】2021 年 12 月 18 日（土）13:30~17:30

【会場】オンライン開催（Zoom ウェビナー）

#### 【パネリスト】

吉良智子（日本女子大学学術研究員）

「近現代日本における『海女』の表象」

中嶋泉（大阪大学准教授）

「『エロス』の政治学：1960-1970 年代の日本の美術」

天野知香（お茶の水女子大学教授）

「モダニズムと『女性』芸術家：ロメイ・ブルックスのサフィック・モダニティ」

北原恵（大阪大学名誉教授）

「戦時下を生きた 3 人の女性画家とジェンダー：長谷川春子・谷口富美枝・新井光子」

【ディスカッサント】香川檀（武蔵大学教授）

【司会】天野知香（お茶の水女子大学教授）

【主催】ジェンダー研究所

【協力】イメージ&ジェンダー研究会 <https://imgandgen.org>

【言語】日本語

【参加者数】208 名

#### 【趣旨】

美術史学におけるジェンダーの視点に基づく研究は、1970 年代初頭、同時代におけるフェミニズム運動の高まりやフェミニズム・アートの登場、そして構造主義やポスト構造主義に代表される知のパラダイムシフトを背景に始まり、今日に至るまで、既存の美術や美術史の構造や語りのあり方を含めた捉え直しと差異化の試みを続けている。本シンポジウムでは、日本においても 1990 年代以降推し進められてきたジェンダーの視点に基づく美術史学研究的現在地の一端を、発表者各自の問題を通して捉える機会としたい。

#### 【開催報告】

2021 年 12 月 18 日（土）、シンポジウム「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」がオンライン開催され、4 名の研究者が研究成果を発表した。冒頭で司会の天野知香氏は、美術史におけるジェンダーの視点による研究史を概観し、企画の趣旨を説明した。1970 年代以降に導入されたジェンダーの視点は、様式を中心に語られてきた従来の美術史を支える非対称の権力構造を明らかにし、「美術」を社会的な意



味作用の体系である「表象」として社会的な文脈の中に読み解く必要性を喚起した。さらに、1980-1990年代にかけて階級、「人種」、民族、セクシュアリティ等々の相互関係も視野に入れながら、大文字の「美術史」に代わる複数で多様な美術史の模索へと展開してきている。ジェンダーの視点は日本の美術史領域にも1990年代以降導入されたものの周縁化されてきた傾向が否めないが、近年美術実践の場においてジェンダーへの関心は高まりつつあり、そうした状況の中今回のシンポジウムが開催された。

研究発表では、まず吉良智子氏が、「近現代日本における『海女』の表象」という題目で、日本の視覚文化（絵画、写真、映画）において多数作られてきた「海女」のイメージを、美術史および関連諸領域における先行研究の詳細な分析をもとに紐解きながら、その延長上に現代の「海女」の表象を位置づけた。江戸時代以降「海女」のイメージは、儒教・仏教社会において男性に尽くす「模範的」女性像や、地方風俗をめぐる性的ファンタジーを体現する「他者」、すなわち「公認されるヌード」として構築されてきた。そこに通底するのは、「海女として労働する姿を描くこと」を口実に女性裸体を描くという、眼差しをめぐるジェンダーの非対称性であり、2014年に三重県志摩市の公認キャラクターに認定され大きな批判を呼んだ「碧志摩メグ」もまたこの系譜に位置付けられる。性的なものとして想像される「海女」は、現代社会においてもなお欲望の対象として作り出され続けているのである。

次に、中嶋泉氏は、「『エロス』の政治学：1960-1970年代の日本の美術」において、国際的に活動した日本の女性及び男性芸術家による戦後の様々な「性」の表現を、文化領域において戦後トランスナショナルに展開した「エロス」を介した「自己解体」の文脈に位置づけ、ジェンダーやナショナルなアイデンティティが時に交錯しながら模索された様を明らかにした。例えば、共に女性の性器をクローズアップした作品のうち、オノ・ヨーコの《フライ》（1970）が、抑圧を暗示するものでありながら女性自らによる性の解放や救済を見出し得る作品であるのに対し、《変態周期と過渡現象》（1962）をはじめとする吉岡康弘の作品は、女性の主体的なエロスを拒絶することで、既存の男性的価値観を維持した。また、《アイロン台》（1963）や《無限の鏡の間》（1965）等男性器を想起させる突起物から成る自作の作品と戯れることで、草間彌生が己の性をコントロールする存在として自己を演出したのに対し、工藤哲巳による《インポ分布図とその飽和部分に於ける保護ドームの発生》（1961-1962）やハプニング作例は、西欧のヒューマニズムを象徴するものとしてのエロスを否定し、日本人男性としての彼のアイデンティティを再構築した。エロスをめぐるこれらの作品は、国際的な文脈において日本の芸術家たちがジェンダー化されたアイデンティティを表現する場となったのである。

続いて天野氏が、「モダニズムと『女性』芸術家：ロメイン・ブルックスのサフィック・モダニティ」という題目のもと、両大戦間期のフランスで活動し、同時代にも評価を得た女性芸術家、ロメイン・ブルックスを具体例としながら、美術史において「女性」芸術家を研究する視点のあり方を論じた。西洋美術史のカノンにおいて、様式革新を軸に「独創性」を語る従来のモダニズムの語りはエディプス的で非対称なジェンダー構造を持っており、女性の芸術家の主体性や欲望はそこから排除され、抹消されてきた。レズビアンでもあったブルックスが自ら設え、描いたモノトーンの室内は、一種の芸術行為として室内を飾った世紀末の唯美主義者たちの実践を踏襲しつつも、家父長制のもと自宅をアトリエとする女性の芸術家の室内とは異なり、独立した女性としての自分自身を解放する場であった。「モダニティ」を捉えながら、そこで既存のジェンダー規範を問い直していった彼女の《自画像》（1923）は、マニッシュな外出着を纏い、見る主体としてこちらに眼差しを向けつつも、体躯や顔の表現においては男性性とは相容れない様子で画家を表している。これは、19世紀以降の男性芸術家のイメージとしての「ダンディ」や「フラヌール」を想起させるとともに、同時代のギャルソンヌのファッションを取り入れた「新しい女性」でもあり、自身

のセクシュアリティの表明でもあった。既存のジェンダー表象を捉え直すことで自身のアイデンティティを可視化し、ブルックスは家父長制のもと抹消されてきた女性芸術家の欲望や創造行為を肯定し、フォルマリズムが捉えてこなかったモダニズムの姿を浮かび上がらせるのである。

最後に、北原恵氏が、「戦時下を生きた3人の女性画家とジェンダー：長谷川春子・谷口富美枝・新井光子」という題目で、20世紀半ばに活動した3名の女性芸術家の軌跡を辿った。画家の長谷川春子は、「大日本陸軍従軍画家協会」の発起人のひとりでもあり、1930年代初頭から従軍画家として戦地に赴き、植民地主義の眼差しと女性への共感を共存させるイメージを残した。谷口富美枝は、川端龍子の教えを受けた日本画家で、家庭から出て生き生きと活動する近代の女性を多数描いた。1938年に青龍社を離れ、戦時中は女流美術家奉公隊でも活動したが、戦後はアメリカに移住した。画家の新井光子は、プロレタリア美術運動やピオニール運動に積極的に参加したが、警察からの弾圧を受け1939年にアメリカへ逃れた。彼女の《胴あげ》(1930)は、英雄的行為や暴力の瞬間、規律のある団体行動を描くことの多い同時代のプロレタリア美術とは異なり、躍動感にあふれユーモアに満ちている。戦時下の彼女たちは、「銃後」と「前戦」をはじめとする既存のジェンダーの枠組みを揺るがす存在であったが、「作戦記録画」の制作や組織形成等ジェンダー化された制度からは排除されることもあった。戦後は、資料の不十分さ、さらに従軍した長谷川の場合は既存のジェンダー秩序を乱す存在であったが故に忘却されていたが、一国主義の美術史観を見直すためにも、今後作品やテキストの再読が待たれる。

研究発表の後、ディスカッサントの香川檀氏によって詳細なコメントが示された。抜粋して以下にその一部を紹介すると、まず吉良氏の発表に関しては、昭和30年代に撮影され近年発表された水中写真家による「海女」イメージにおいて、労働やコミュニティではなく依然その身体に注目が集まり、彼女たちが時として「人魚」にさえ擬えられていることから、発表で提起された性的な「他者」としての「海女」表象は、現在進行形の問題として重要であると指摘された。中嶋氏の発表に対しては、「反芸術」の時代として知られる1960年代初頭を扱った既存の日本美術史の言説に性表現に関するトピックがほぼ見られないことを踏まえ研究の重要性が評価されたとともに、男性芸術家の中で工藤には日本趣味と女装趣味があったことから、彼が性的活力を誇示する男性性に対する反発を持っていたこと、そして、西欧の男性性に対し日本人男性が屈折した思いを抱いていた可能性が指摘された。天野氏の発表に関しては、両大戦間期にレズビアンであることは「モダン」で家父長制からの解放をも意味するものでもあり、そうしたアイデンティティが視覚芸術においてどのように表現されたかを検討することは、「モダニティ」とは何かを検討し直す意味でも重要であると評された。同性のパートナーと暮らした時期があるハンナ・ヘーヒによるフォトモンタージュの自画像を紹介しつつ、ホモフォビアの傾向が否めないモダニズムの文脈において、「サフィック・モダニティ」が「別のモダニズム」を切り開いてゆく可能性が指摘された。そして北原氏の研究は、男性の領域とみなされてきた戦争画に参入した女性芸術家は議論すべきものとして扱われることさえなかった状況があるなか、そこに一石を投じる研究であると評された。さらに、戦争画という「公共の使命」に女性芸術家がどのように応えたのか、また、銃後を描いた多様な作品に、公のナラティブとの距離感や新規性のある画題への反応をどのように読み解くか、今後の更なる研究が待たれると指摘された。

質疑応答では登壇者から香川氏のコメントへのさらなる応答があり、その後、参加者からの質問に対しても研究発表の内容をさらに深める議論が展開した。本シンポジウムの内容は、2022年度刊行『ジェンダー研究』25号に特集企画として掲載される予定である。

記録担当：内山尚子（広島大学・助教）

## IGS 国際シンポジウム

### #MeToo の政治学

#### #MeToo が残したフェミニズムの課題を考える

【日時】2022年1月21日(金) 15:00~18:00

【会場】オンライン (Zoom ウェビナー)

第一部：ドキュメンタリー映画『アフターMeToo』監督とのトーク

【パネリスト】

カンユ・カラム (監督)

濱田真里 (ジェンダー総合研究所共同代表)

金李イスル (翻訳家)

第二部：国際シンポジウム『#MeToo の政治学』

【パネリスト】

権金炫伶 (クォン・キム・ヒョンヨン) (女性現実研究所代表)

ルイン (トランスジェンダー・クィア研究所専任研究員)

菊地夏野 (名古屋市立大学准教授)

【司会】申琪榮 (IGS 教授)

【主催】

ジェンダー研究所

日本学術振興会基盤研究 (C) 『ジェンダークォータの政治学：制度化と抵抗』

【言語】日韓 (同時通訳有)

【参加者数】329名

【趣旨】

本シンポジウムは「#MeToo の政治学」の日本語訳出版 (『#MeToo の政治学——コリア・フェミニズムの最前線』大月書店,2021) をきっかけに本書の著者でもある、韓国フェミニズムの最前線で活躍している研究者2名をお招きして、#MeToo がもたらした社会の変化やその背景にある性暴力・ジェンダー問題に取り組んでいる韓国フェミニズムについて考察するとともに、#MeToo によって明らかになったフェミニズム運動や理論的課題について議論する。

シンポジウムは2部構成で、第一部では#MeToo の様々な声を取り上げた韓国の最新ドキュメンタリー映画「アフターMeToo」について、#MeToo の声を聞くこと、そしてまだ聞こえていない声は誰の声なのかについて、監督とパネリストにより議論を深める。

第二部では第一部の議論も含めて#MeToo の歴史が突きつけたフェミニズムへの諸課題について韓国、日本からのパネリストが日韓の状況を共有しながら議論する。

【開催報告】

2022年1月21日(金)、国際シンポジウム「#MeToo の政治学：#MeToo が残したフェミニズムの



課題を考える」がオンライン開催された。冒頭、総合司会の申瑛榮氏から、2017 年末、性暴力告発の #MeToo 運動が世界に広がったこと、またその中でも韓国は #MeToo 運動をはじめとしたフェミニズム社会運動が今もなお活発に行われていることが紹介された。

第一部では、韓国のドキュメンタリー映画『アフターMeToo』（2021）の監督であるカンユ・カラム氏と二人のパネリスト、濱田真里氏と金李イスル氏による議論が行われた。映画では、1990 年代後半韓国で活発に活動したフェミニストたちを追った、カラム監督のドキュメンタリー『私たちは毎日』（2019）で取り上げることができなかった #MeToo 運動のその後に焦点が当てられる。映画には複数の監督による 4 つのエピソード—(1)「女子校の怪談」（スクール #MeToo）、(2)「私の心と体は健康になった」（中年女性の被害の経験）、(3)「それから」（被害者を支える支援者）、(4)「グレーセックス」（親しい関係での暴力）が、オムニバス形式に収録されている。どのエピソードも多くの人が思い浮かべる代表的な #MeToo の話ではなく、身近で可視化されにくく、公の場で語ることが難しいトピックである。

(1)「女子校の怪談」では、学校における教師による性暴力に対して生徒たちが付箋を使い、連帯する姿（校舎の窓に多数の付箋を貼りつけて #WithYou の文字列を形作る）が描かれている。2018 年当時、メディアで報道される #MeToo の流れを受け、身近な #MeToo に気付き、告発する原動力になっていったと分析する。(2)「私の心と体は健康になった」では、一人の女性が故郷に戻り、その地で幼少期に受けた性暴力告発のスピーチをするために、何度も練習する場面が登場する。当初は本名を隠して「幸せ先生」というハンドルネーム（アカウントネーム）を名乗っていた女性は、撮影を通じて監督との信頼関係を築き、遂には本名を明かすに至る。エンドロールには、「幸せ先生」と女性の本名の二つの名前がクレジットされている。(4)「グレーセックス」では、女性たちのマッチングアプリで出会った男性に対する違和感が描かれている。アプリ内では、男性が好む女性像がパッケージングされていること、またアプリ上はそれを容認するような空間であること、さらに韓国社会においてアプリを通じた親密な関係について語ることが難しい現状が挙げられた。

カラム氏が監督を担当した(3)「それから」では、文化芸術界における性暴力が描かれている。狭いコミュニティ内で被害を受け、それを告発することはその分野でのネットワークを失い、将来的な進路さえも閉ざされてしまうが、誰かが声をあげなければ次の被害者が生まれてしまうというジレンマを抱える。被害者を守るためにも、内部から変革できる支援者の必要性が訴えられた。

金李氏からは、被害者像には当てはまらない、日常をなんとか生きる一人の女性の側面をみることの重要性について、さらに在日朝鮮人女性が #MeToo をする難しさや被害者の声に耳を傾ける支援者の必要性について語られた。濱田氏からは、女性議員に対するオンラインハラスメントの事例を踏まえながら、日常において性被害を被害と気づくことの難しさと、性暴力を個人の問題ではなく社会の問題として、みんなで声をあげていくことの重要性が再確認された。

第二部では、#MeToo 以後のフェミニズムの諸課題について日韓の状況を共有しながら議論が行われた。まず『#MeToo の政治学』の著者・権金炫怜氏は、出版の大きなきっかけとして韓国で起きたアン・フィジョン事件（元忠清南道知事アン・フィジョン氏による秘書・キムジウン氏への性的暴行事件）を挙げ、この事件を本書の大きなテーマとして扱い、男性中心的な権力社会の中で性暴力の問題提起がどのようになされてきたのかを明らかにすることが目的だと語った。すでに韓国では、刑法に「威力」による強姦を禁ずる法律が制定されていたが、業務上の明確な関係性を示す必要性があったため告発が難しく、事実上判例がない状態であった。しかし、アン・フィジョン事件では直接的な雇用関係が認められたことで有罪判決となり、性暴力事件の司法判断において大きな転機となった。ただ、法的には勝利

したもの、政治文化的文脈では多くの論争やバッシング、特に大手マスメディアを中心とした加害者を保護する世論作りと#MeToo 運動へのバックラッシュによって、被害者への二次加害は続いていると指摘された。

同じく著者のルイン氏からは、従来のジェンダー暴力が性別二元論的な男性から女性に対する暴力と考えられているため、トランスジェンダー・クィアの立場からジェンダー暴力を再構成するという本書の目的が語られた。トランスジェンダー・クィアへの暴力と非トランスジェンダーへの暴力が似た構造であることに着目し、家父長制社会においては女性への差別があって当然だと考えられる現状から、被害者は女性であるのが当然だとする社会一般の認識枠組みについて、ジェンダー暴力を非トランスジェンダーの立場から一方的に規定しているのではないかと問いかける。また、一部のフェミニストから語られるトランスジェンダー嫌悪についても提示しながら、フェミニズムとトランスジェンダー・クィア政治間の連帯の方法について模索するためにもジェンダー暴力の再考は有効だと述べた。

菊地夏野氏はまず、本書のなかでフェミニズム研究と運動（理論と実践）が結びついて論理的に分析されていることを評価した。また、日韓ともに性暴力告発への壁は存在するが、日本の現状は被害者の姿ばかりが報道され、その壁がどこにあるのかが見えてこないという指摘がされた。

韓国の#MeToo 運動に関して権金氏は、スウェーデンで匿名で行われた#MeToo 運動、アメリカで行われた有名人の#MeToo 運動と違い、韓国の#MeToo 運動は、当初 SNS 上での暴露という形で行われ、その後法廷闘争に持ち込まれるケースが多くみられることを指摘する。韓国の#MeToo 運動は、性暴力が何であるのかを世の中に広めることができた一方、被害者個人が負担を強いられ過ぎている、また告発できる人とできない人の差も存在する。ルイン氏は韓国の#MeToo 運動の成果は、暴力・差別を取り巻く社会や制度がどのように構成されているのかが幅広く理解できたことや、クィア運動やコミュニティの中での差別や抑圧に対する告発にも波及したことでありと語った。菊地氏からは、日本の#MeToo やフェミニズムの広がりが多くの人に周知され、医学部入試における女子差別問題の取り上げなど個別の功績がある一方、#MeToo 運動が集団的な動きとしては成り立っていないという指摘も行われた。そしてその根本的な要因として、日本という国家と国民が、慰安婦問題に正面から向き合っていない点を挙げた。国家的な性暴力がなかったことのようにされている中では、#MeToo 運動もあたかも存在していないかのように、メディアや社会から黙殺される。これが日本において#MeToo 運動が社会運動としての盛り上がりや理由を欠く理由ではないか、と述べた。

ポスト#MeToo の変化について権金氏は、韓国は深刻なバックラッシュからもポスト#MeToo と言える段階ではないが、#MeToo の成果として地方で立法化に結びついたことや組織の中で問題解決をする多様な経験を得たことを挙げた。同じ女性でも違う経験を告発する#MeToo から社会の中で連帯し合う #WithYou へどのように変化していくかが求められている。ルイン氏からは、韓国でのトランス女性を取り巻く状況が語られ、女子大におけるトランス女性受け入れに対する反応は日本でも同じような状況であったことが触れられた。一連の話題がトランスジェンダーと女性、フェミニズムとトランスジェンダー・クィアといった分断として理解され、#MeToo 以降トランス女性が加害者と位置付けられてしまったことにも警告を鳴らした。

最後の質疑応答とまとめでは、インターセクショナリティについての視座を共有したうえでの連帯や性的同意などの議論にも発展して、本シンポジウムは終了した。

記録担当：花岡奈央（お茶の水女子大学大学院博士前期課程）

## ▶ 2021 年度 IGS・IGL 合同国際シンポジウム詳細

### 国際シンポジウム（ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同）

## リーダーシップの地平

## ジェンダー平等推進のための理論と実践

【日時】 2021 年 11 月 15 日（月）18:00～20:00

【会場】 オンライン開催（Zoom ウェビナー）

### 【基調講演】

ロージー・キャンベル（キングス・カレッジ・ロンドン教授・女性リーダーシップグローバル研究所長）

「女性の政治参加：英国のケーススタディから」

### 【ディスカッサント】

キャロル マイルズ（お茶の水女子大学助教・グローバルリーダーシップ研究所研究員）

大木直子（椋山女学園大学講師、グローバルリーダーシップ研究所客員研究員）

申琪榮（お茶の水女子大学ジェンダー研究所教授）

### 【パネルディスカッションモデレーター】

小林誠（お茶の水女子大学教授・グローバルリーダーシップ研究所長）

【総合司会】 戸谷陽子（お茶の水女子大学教授・ジェンダー研究所長）

### 【挨拶・趣旨説明】

石井クンツ昌子（お茶の水女子大学理事・副学長／グローバル女性リーダー育成研究機構長）

【主催】 グローバル女性リーダー育成研究機構 グローバルリーダーシップ研究所 ジェンダー研究所

【言語】 日英（同時通訳）

【参加者数】 167 名

### 【趣旨】

本シンポジウムは、2018 年 6 月ジェンダー研究所とグローバルリーダーシップ研究所が共同開催し、女性政治リーダー育成の実践について議論した国際シンポジウム「女性リーダーはいかにして「育つか？」」に続く企画であり、今回は女性の政治参加の調査研究に焦点をあてる。英国キングス・カレッジ・ロンドンの女性リーダーシップグローバル研究所の所長であり政治学教授であるロージー・キャンベル氏を基調講演者として招聘。英国における政治参加のジェンダーギャップについての研究報告を起点に、政治分野の女性のリーダーシップについてグローバルな視点から議論する。日本では女性が参政権を得てから 70 年以上経つが、2021 年 10 月の総選挙後の衆議院の女性議員比率は 9.7%。女性の国会議員はなぜ増えないのか。その背景には、単なる人数の問題ではないジェンダーギャップが存在する。女性の政治参加の障壁となっているのは何なのか？女性がより政治に関心を持ち参画するには何が必要なのだろうか？



## 【開催報告】

2021年11月15日（月）、お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構主催によるオンライン国際シンポジウム「リーダーシップの地平：ジェンダー平等推進のための理論と実践」が開催された。英国のキングス・カレッジ・ロンドンの政治学教授であり女性リーダーシップグローバル研究所の所長も務めている、ロージー・キャンベル氏を基調講演者として招聘し、パネルディスカッションには、IGSの申琪榮教授、IGL客員研究員の大木直子椋山女学園大学講師、IGL研究員のキャロルマイルズお茶の水女子大学グローバル文化学環助教が参加。10月の総選挙の結果も参考にした、日本の政治におけるジェンダーギャップについての議論に、160名を超える参加者が耳を傾けた。

キャンベル氏の基調講演「女性の政治参加：英国のケーススタディから」では、英国における政治参加のジェンダーギャップについての研究成果が報告された。2019年の総選挙の結果、英国下院の女性議員比率は34%となっている。女性議員増加の契機となったのは1997年の総選挙であった。労働党が独自に女性だけの候補者リストを作成したり退職者の枠に女性候補を立てるなどの方策をとり、積極的に女性議員を当選させ、政権を取った。以来、これに倣って、右派を代表する保守党も含めた他の政党も、女性議員の登用に積極的に取り組んでおり、その成果が上がっている。

投票する側に目を転じると、男女の投票率には差はみられない。しかし、投票行動、つまりどういう基準で票を入れる政党を選ぶか、という点ではジェンダーギャップが存在する。2000年に発表された、ロナルド・イングルハートとピッパ・ノリスの共著論文「ジェンダーギャップのグローバル理論」では、歴史的に女性は男性よりも右派を支持する傾向が強かったが、女性の教育レベルが上がり社会進出が進むと左派支持に転ずるという理論が示された。しかし、英国はこの理論と一致していなかった。英国において女性の左派支持傾向優位が初めて確認されたのは2017年の総選挙で、2019年の総選挙でもこの傾向が継続した。なぜこうした変化が起きたのかを分析したのが、キャンベル氏がロザリンド・ショロックス氏との共著で2021年に発表した論文「ようやく時流に乗ったのか？2019年英国総選挙におけるジェンダーと投票」である。

この論文では、2017年と2019年の総選挙、そして2019年の欧州議会選挙の際の投票行動について、性別と年齢層、価値観、EU離脱支持、経済／財政観それぞれとの相関関係が分析された。その結果みえてきたことのひとつは、以前は属する社会階級が要因となっていた投票行動パターンが、くずれてきたということであった。例えば、中流階級の女性は保守党支持傾向だったが、労働党支持傾向が強くなってきている。ブレクジットが争点となった時には、特に男性の労働党支持層のうちEU離脱賛成派が保守党に投票するという動きもあった。

1997年以降の英国の二大政党制の特徴として、保守党と労働党の政策が似通っていたことがある。しかし、2017年の総選挙の際には、ジェレミー・コービンという非常に左翼的な政治家が労働党の党首であり、保守党との違いが鮮明になった。この選挙の争点は保守党政権による緊縮財政政策であった。公的支出の削減の生活への長期的な影響を心配した40代以下の女性たちの票が労働党に流れ、女性の左派支持傾向優位という変化が生じたのだ。また、2019年の欧州議会選挙では、若い世代の女性の緑の党支持率が高いという傾向もみられるなど、環境問題への関心などの価値観も投票行動に反映された。

ここから導き出された結論は、投票行動におけるジェンダーギャップは、男女の別だけでなく、年齢層や政党間の競争の性質、その時に特に争点となっている課題は何かといった複合的な要素によって左右されるということである。

パネルディスカッションは、キャロル氏のコメントで開始された。2021年10月の総選挙後の衆議院の女性議員比率は9.7%。2018年に施行された「政治分野における男女共同参画の推進に関する法律」

に、各政党が女性候補者を増やす対策をとることが規定されてはいるが、その成果は上がっていない。特に政権与党である自民党は女性の登用に消極的である。キャロル氏はその要因として、日本の社会文化的、そして経済的背景が大きいと述べた。日本において、政治は男性の仕事とみなす考え方は根強く残っている。そうした中で、家庭内の無償労働の主な担い手である女性が、当選するために必要とされる「ジバン（地盤）、カンバン（看板＝肩書）、カバン（鞆＝資金）」の三要素を手に入れることは難しい。日本においては、未だに根強く残る伝統的なジェンダー規範が、女性議員増加の障害になっているという指摘である。

大木氏からは、日本の地方議会のジェンダーバランスについての説明があった。地方議会全体での女性議員比率は約15%。都道府県レベルと市町村レベル、また都市部と地方での違いはあるものの、総じて女性議員の数は非常に少ない。中でも自民党の女性議員は特に少ないが、わずかずつではあるものの、着実に数を増加させている傾向がありその動きに注視しているという。

申氏からは、日本の現状を政治代表性の危機ととらえる視点から、国会議員のジェンダーや年齢の偏りが極めて大きいことの問題点が解説された。2021年10月の総選挙の結果をみると、20代、30代の議員が少なく、その女性議員比率も低い。このため、世代交代が進んでも女性の政治代表性は向上しない可能性が高いと指摘した。また、若い議員の当選者には維新の党の男性議員と自民党の世襲議員が多いため、多様な若者の声を政治に反映させるのは難しいと考えられる。結果として、若者の政治離れと政治不信が進むことが危惧されると述べた。

これに続くディスカッションでは、政党間の競争の重要性や、女性議員が増えることによって起きる変化などが議論された。一般に、政党が女性議員を増やそうとする背景には、女性票の獲得という目標がある。しかし、日本の自民党政権はそれをせずとも体制維持ができているため、党内からの変革の動きが起こらない。政党間の競争が激しすぎるのも問題だが、少なすぎると政治の停滞を生じさせる。女性の代表性の低さと社会の変化が政治に反映されないことの原因は、政党間競争が少ない点にあるのではないかと、というのが、キャンベル氏の指摘である。

申氏からは、議員数のジェンダーギャップを解消するのに有効なクォータ制（議席の一定割合を女性に割り当てる制度）は、日本での導入はまだ厳しいが、今ある選挙制度の運用を変えるだけでも、女性議員割合を2割近くまで増やすことはできる、との指摘があった。引退する議員の選挙区には女性候補者を優先的に擁立する、比例代表候補者名簿の上位に必ず女性候補者を入れる（各選挙区ブロックごとに候補者名簿の第1位～3位の3人のうち少なくとも2人は女性候補者にする、など）といった女性候補者を増やす運用を各政党が実施すれば、確実に女性議員は増加する。また、女性議員が増えると男性議員もジェンダー課題に関心を持つようになり、結果として議会での議論の質的な変化が起きるといふ研究結果も紹介された。

大木氏は、女性議員が増えるということには、男性の多い環境でこれまで何となく当たり前とされてきたことに疑問が投げかけられる側面があり、議員に必要な能力は何かといったことを明確化するような議員養成の実践が必要だと示唆した。議員養成の方針や過程を明確化することもまた、政治の質の向上、そして政治の信頼回復につながる道であろう。

以上のように、女性の政治参画について幅広く充実した議論が持たれた。こうした研究成果を広く情報発信し、女性議員の増加を目指す実践や、女性政治リーダーの育成、ひいては政治の質の向上に資するものにすることが、IGLおよびIGSの活動においても重要であろう。当日の議論をまとめた報告書を後日刊行し、ウェブサイト上で公開する予定である。

記録担当：吉原公美（お茶の水女子大学リサーチ・アドミニストレーター）

# 国際シンポジウム（ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所共同）

## グローバル女性リーダーシップ

### アジアからの提言

【日時】2022年2月18日（金）13:30～19:00（予定）

【会場】オンライン開催（Zoom ウェビナー）

#### 《第1部 実践編：決断し、行動する》

[本学および附属学校園卒の女性リーダーたちによる講演会]

##### 【講演】

本田桂子（コロンビア大学 Adjunct Professor、元世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官 CEO）[お茶の水女子大学卒業生]

「人生三毛作のすすめ」

##### 【ビデオメッセージ】

山崎直子（宇宙飛行士）[お茶の水女子大学附属高等学校卒業生]

【第1部司会】宝月理恵（IGL 特任講師）

#### 《第2部 成果編：探究し、発信する》

[2015年度からのグローバル女性リーダー育成研究機構（IGL・IGS）の成果報告]

##### 【第2部趣旨説明】

石井クンツ昌子（グローバル女性リーダー育成研究機構長）

##### 【報告：IGL】

小林誠（IGL 所長）「私たちは収斂しない：グローバル女性リーダーシップの冒険」

岡村利恵（IGL 特任講師）「『女性リーダー』を取り巻く状況：2つの調査データから見えてくること」

内藤章江（IGL 特任講師）「リーダーシップ育成プログラムの開発・実践と教育効果検証指標の開発・活用」

##### 【報告：IGS】

戸谷陽子（IGS 所長）「ジェンダー研究所：歴史・教育・研究・ネットワーク」

申琪榮（IGS 教授）「『ジェンダー研究』の学術的成果」

仙波由加里（IGS 特任講師）「国際共同プロジェクト：INTPART プロジェクト」

平野恵子（IGS 特任講師）「IGS-AIT 交流事業：AIT ワークショップの7年間の軌跡と成果」

【第2部進行役】本林響子（IGL 副所長）

#### 《第3部 研究編：見極め、捉え直す》

[IGL・IGS の特別招聘教授・連携研究者を交えての討論]

##### 【基調講演】

趙成南（韓国・梨花女子大学校名誉教授）[2020～2021年度 IGL 特別招聘教授]

「ポストパンデミック時代の新しいパラダイムとしてのアジアにおける女性リーダーシップモデル」

日下部京子（タイ・アジア工科大学院大学教授）[IGS 連携研究者]

「女性リーダーの育成：お茶の水女子大学とアジア工科大学院大学の交流プログラムが示す可能性」

国際シンポジウム  
シリーズ：アジアにおける女性リーダーシップを考える4

## グローバル女性リーダーシップ —アジアからの提言—

2022年2月18日（金）13:30～19:00 Zoom ウェビナー  
【対象】学生・教職員・一般（参加費無料・要事前申込み）

13:30～14:50  
**第1部 実践編：決断し、行動する**  
お茶の水女子大学および附属学校園卒の女性リーダーたちによる講演会

【講師】  
本田桂子（お茶の水女子大学卒業生）  
コロンビア大学 Adjunct Professor  
元世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官 CEO

山崎直子（お茶の水女子大学附属高等学校卒業生）  
宇宙飛行士

14:50～17:00  
**第2部 成果編：探究し、発信する**  
2015年度からのグローバル女性リーダー育成研究機構の成果報告

17:00～19:00  
**第3部 研究編：見極め、捉え直す**  
グローバルリーダーシップ研究所・ジェンダー研究所の特別招聘教授・連携研究者を交えての討論

【基調講演】  
趙成南（韓国・梨花女子大学校名誉教授）  
2020～2021年度 IGL 特別招聘教授

【ディスカッション】  
コロンビア大学（インドネシア）  
インドネシア大学（インドネシア）  
2021年度グローバルリーダーシップ研究所特別招聘教授  
グロ・タリスタン  
ジェンダー研究推進教授

日下部京子  
アジア工科大学院大学（タイ）  
ジェンダー研究推進教授

カレン・シキア  
オーストラリア・モクセン大学（ドイツ）  
2016～2019年度グローバルリーダーシップ研究所特別招聘教授

ジャン・パウル  
オーストラリア・オーストラリア大学（オーストラリア）  
2016～2019年度ジェンダー研究所特別招聘教授

【お問い合わせ】 グローバルリーダーシップ研究所：info-leader@cc.nyu.ac.jp ジェンダー研究所：igpoffice@cc.nyu.ac.jp  
【事前申込】 両研究所のウェブサイトまたは以下のQRコードから

お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構

グローバルリーダーシップ研究所  
http://www.dl.nyu.ac.jp/ig/

ジェンダー研究所  
http://www.dl.nyu.ac.jp/igp/

お茶の水女子大学  
Ochanomizu University  
グローバル女性リーダー育成研究機構

【ディスカッサント】

コリーナ・リアントプトラ（インドネシア大学准教授）[2021 年度 IGL 特別招聘教授]

グロ・クリステンセン（ノルウェー科学技術大学教授）[IGS 連携研究者]

カレン・シャイア（独・デュースブルグ・エッセン大学教授）[2016～2018 年度 IGL 特別招聘教授]

ジャン・バズレイ（米・ノースカロライナ大学チャペルヒル校名誉教授）[2018～2019 年度 IGS 特別招聘教授]

【第 3 部司会】石井クンツ昌子

【開会挨拶】佐々木泰子（お茶の水女子大学長）

【閉会挨拶】戸谷陽子

【主催】グローバル女性リーダー育成研究機構 グローバルリーダーシップ研究所 ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳）

【参加者数】137 名

【趣旨】

2015 年 4 月のグローバル女性リーダー育成研究機構の開設以来 7 年間の活動の集大成のシンポジウム。機構を構成するグローバルリーダーシップ研究所（IGL）とジェンダー研究所（IGS）における、女性リーダーシップおよびジェンダーに関する教育や研究の成果を発表し、その内容を基に、アジアにおける女性リーダーについてグローバルかつ多様な視点から議論した。また、世界を舞台に活躍する本学および附属学校園出身の女性リーダーに講演を依頼し、現代のグローバルな現場でのリーダーシップについて学んだ。

【開催報告】

2022 年 2 月 18 日（金）、お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構主催によるオンライン国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言」が開催された。《第 1 部 実践編：決断し、行動する》、《第 2 部 成果編：探求し、発信する》《第 3 部 研究編：見極め、捉え直す》というプログラム構成であり、第 2 部では、グローバルリーダーシップ研究所（IGL）とジェンダー研究所（IGS）の 2015 年以降の事業内容とその成果の報告がなされた。

2015 年度からの IGS の事業活動は、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、高水準の研究プロジェクトの実施と、国際的な研究ネットワークの構築を推進することが主眼とされている。第 2 部における IGS の報告では、IGS における国際的研究拠点としての事業活動の基礎には、その前身組織が創立された 1975 年以降の拠点形成活動と研究ネットワーク構築があることが示された。特に戸谷陽子 IGS 所長による報告「ジェンダー研究所：歴史・教育・研究・ネットワーク」では、シンポジウム等のイベント開催、海外からの研究者招聘、教育プロジェクト、学術発信、文献収集といった事業活動全体が、所属研究者による研究活動を基盤に連動・連結していることが説明された。

申琪榮 IGS 教授による発表「『ジェンダー研究』」では、申教授が編集長を務める『ジェンダー研究』が、紀要から学術誌に形態および編集方針が変更され、世界中の研究者が質の高い先端研究の成果を投稿する雑誌になることを目指していることが報告された。仙波由加里 IGS 特任講師による報告「国際共同プロジェクト：INTPART プロジェクト」では、ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センターとの共同プロジェクトの内容と、仙波氏が同プロジェクト内で実施した生殖医療に関する国際比較研究成果が報告された。平野恵子 IGS 特任講師「IGS-AIT 交流事業：AIT ワークショップ」では、2001

年度に開始されたアジア工科大学院大学（AIT）との大学院生の交換研修プロジェクトが、以来 20 年かけて培ってきた成果が報告された。

IGL が 2015 年度から展開してきたリーダーシップ研究とその成果発信、本学におけるリーダーシップ教育、そして女性リーダーシップ研究の国際的なネットワーク構築の活動は、「女性」「アジア」「グローバル」という視点からのリーダーシップ研究の進展を図るものである。リーダーシップ研究の分野では、現代のリーダーシップについての分析研究がなされているが、それはまだ、世界的に必要とされている女性リーダーの増加には必ずしも結びついていない。また、リーダーシップ研究の多くは欧米発であることから、アジア文化圏においても同じ理論があてはるとは限らず、よりグローバルな研究の展開そしてその成果の発信が必要とされている。

第 2 部における IGL の報告「私たちは収斂しない：グローバルリーダーシップの冒険」（小林誠 IGL 所長）、「女性リーダー」を取り巻く状況：2 つの調査データから見えてくること」（岡村利恵 IGL 特任講師）、「リーダーシップ育成プログラムの開発・実践と教育効果検証指標の開発・活用」では、前述のリーダーシップ研究や国際的研究ワーク構築の成果報告と合わせて、大学におけるリーダーシップ教育の重要性が指摘された。

第 3 部では、IGL と IGS の特別招聘教授と連携研究者を基調講演者およびパネリストとして招き、現代のグローバル社会における女性のリーダーシップについてジェンダー研究の視点から議論した。リーダーシップという文脈におけるジェンダーは、世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数が示す、国会議員や企業の役員の男女比率だけではない。第 2 部の岡村氏の報告でも指摘されたように、リーダーシップに性別はないはずであるが、旧来型の権力による支配や管理に重きを置くリーダーシップは時に男性型や男性中心的と呼ばれ、女性リーダーに新しく特別なものを求める考え方も存在する。

趙成南 IGL 特別招聘教授の基調講演「ポストパンデミック時代の新しいパラダイムとしてのアジアにおける女性リーダーシップモデル」、日下部京子 AIT 教授の基調講演「女性リーダーの育成：お茶の水女子大学とアジア工科大学院大学の交流プログラムが示す可能性」では、これからの時代に必要とされるリーダーシップの形の提案もなされた。また、ディスカッサントのコリーナ・リアントプトラ IGS 特別招聘教授、グロ・クリステンセン NTNU 教授、カレン・シャイア デュースブルグ・エッセン大学教授、ジャン・バーズレイ ノースカロライナ大学チャペルヒル校名誉教授からは、ジェンダー規範を含む文化、政治、経済といった社会的要素に広く目を向けたコメントが出された。リーダーシップとジェンダーについては、さらなる議論の多角化と深化が期待される。

第 1 部の本田桂子 元世界銀行グループ機関長官の講演「人生三毛作のすすめ」および山崎直子 宇宙飛行士のビデオメッセージも含め、当日の講演および議論の詳細については、刊行予定の本シンポジウム報告書でお読みいただきたい。

記録担当：吉原公美（お茶の水女子大学リサーチ・アドミニストレーター）

## ▶ 2021 年度主催 IGS セミナー詳細

### IGS セミナー（生殖領域シリーズ）

## 商業的精子バンクに関する問題

### 倫理・ジェンダー・社会的側面から

【日時】2021 年 7 月 2 日（金）17:00～18:30

【会場】オンライン開催（Zoom ウェビナー）

【講演】

スティン・W・エイドリアン（オールボー大学准教授）

Subversive practices of donor sperm: Ethics on the border

（精子提供のしたたかな実践：倫理の国境）

【司会】仙波由加里（IGS 特任講師）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語（日本語逐次通訳）

【参加者数】138 名

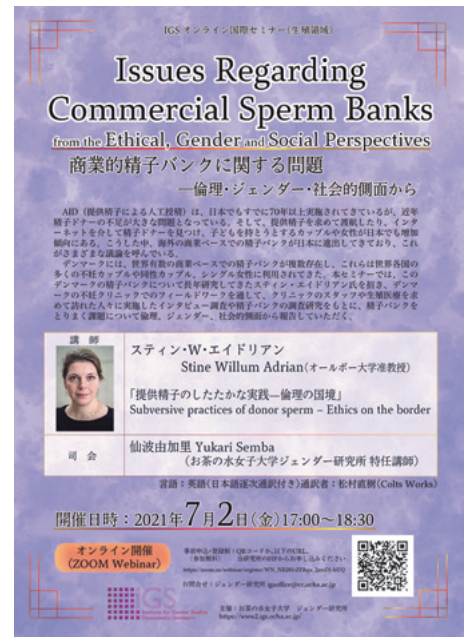
【趣旨】

AID（提供精子による人工授精）は、日本でもすでに 70 年以上実施されてきているが、近年、精子ドナーの不足が大きな問題となっている。デンマークには、世界有数の商業ベースでの精子バンクが複数存在し、近年それらが日本のマーケットにも参入しようとしている。本セミナーでは、スティン・エイドリアン氏が、デンマークの精子バンクと不妊治療クリニックで 10 年の間隔をあけて行った 2 つの民族学的フィールドワークの結果を示しながら、デンマーク国境を越えての精子の販売やマーケティングが実践される中で、文化や法律の違う地域で精子の商業化を進める上での規範的な交渉がどのように行われているのかについて報告した。

【開催報告】

精子提供は古くからある生殖技術だが、この技術は、家族、セクシュアリティ、人種、正常性、血縁関係、姻族関係についての先入観を覆すものであり、世界中で政治的、倫理的、規制上の論争の引き金にもなってきた。そして誰に精子提供すべきか、精子ドナーをどのように分類しどうやって選ぶべきか、血縁や姻族といった関係をどのように体系化すべきか、健康リスクのない提供はどのようにしたら実施可能かといった議論も生み出してきた。デンマークに民間精子バンクが出現してきたことで、こうした議論が、国境を越えた精子の販売や生殖医療を求める人々のツーリズムの問題とも絡み合うようになってきている。

デンマークの精子バンクは世界的にも有名であり、近年、精子提供者の不足から AID（提供精子による人工授精）の実施が立ち行かなくなっている日本にも進出してきている。本報告では、エイドリアン氏自身がデンマークの精子バンクと不妊治療クリニックで 10 年の間隔をあけて行った 2 つの民族学的





フィールドワークの結果を示しながら、デンマーク国境を越えての精子の販売やその利用をめぐるどのようなことが展開されているかを紹介し、デンマークの精子バンクの精子提供が信頼を得てきた過程や、国によって異なる文化や法律、認識がある中でどのように規範的な交渉が行われ、現在の実践へとつながってきているのかを報告した。そして提供精子や生殖ツーリストたちが国境を越えることで起こっている論争によって、どんな規範の変化が起きるのかということについてもふれた。

エイドリアン氏はまずデンマークの精子バンクの歴史を紹介した。デンマークでは1976年にCentral Sperm Bank Foundationが設立され、これがデンマーク全土への精子の分配を行っていたという。1970年代、デンマークでは不妊治療は公的な生殖医療機関でしか行われておらず、患者もヘテロセクシャルのカップルが中心であったため、精子提供もドナーは匿名を基本とし、子どもや周囲へ提供精子の利用を秘密にしておくことが推奨されていた。しかし、1982年にデンマークで初の体外受精児が生まれたことをきっかけに、民間のクリニックでも不妊治療が行われるようになり、それまでの中央精子バンクに加え、民間の不妊治療を行うクリニックの働きかけもあって商業的な精子バンクが誕生することになった。そうした民間クリニックが同性カップルやシングル女性にも提供精子による治療を実施するようになって、商業的な精子バンクのニーズがより高まったと言える。そして、これまで精子ドナーは匿名提供が当たり前だった状況から、非匿名のドナーの精子提供のニーズも生まれるようになった。

さらに精子の凍結技術や輸送技術の発達に伴って、こうした商業的な精子バンクがデンマークのみならず、諸外国へも進出することになった。国境を越えた精子の商業的取引では、精子バンクはデンマークのみならず、ヨーロッパ連合（EU）、および進出する国の法律や規制を順守し、その国ならではの倫理的な側面に配慮することが求められる。そしてさまざまな規範が再構築されることになった。エイドリアン氏は、同性カップルやシングル女性への精子提供をめぐる議論や、ヨーロッパで起こった自己授精（do it yourself sperm）についての政治的な論争の事例なども紹介しながら、生殖技術には差別的な可能性も含まれてはいるが、生殖技術を通して世界を考えることは、どうしたら未来をより明るく差別の少ない世界に変えていくことができるのか、そのヒントを与えてくれることにもなると、自身の考えを述べた。

レクチャーの後には、今、日本でも関心の高い問題であるため、参加者から30件を超える質問やコメントが寄せられ、15分ほど延長して、エイドリアン氏が応えた。

記録担当：仙波由加里（IGS 特任講師）

## IGS セミナー

# 日本文学における父娘関係

## 欲望・暴力・支配・抵抗

【日時】2021年7月8日(木) 18:00~19:30

【会場】オンライン開催 (Zoom ウェビナー)

### 【講演】

レティツィア・グアリーニ (国際基督教大学助教)

「日本のアンティゴネーたち：角田光代「父のボール」を手がかりに」  
菊地優美 (お茶の水女子大学基幹研究院リサーチフェロー、日本  
大学他非常勤講師)

「野溝七生子文学にみる父と娘：父に抗う〈書く〉娘の物語」

【司会・討論】戸谷陽子 (IGS 所長／お茶の水女子大学教授)

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】64名

### 【趣旨】

文学において親子関係は、古来、洋の東西を問わず万国共通のテーマである。しかし、日本文学において、父と娘の関係を描いた近現代文学は、作品数も研究も比較的少ない傾向にある。日本の近代家父長制社会の中で沈黙させられてきた娘の存在は、家長である父との関係において、あるいは高度成長期以降の現代社会の父の不在という文脈において考察されるべき問題である。本セミナーでは、近現代日本文学が描く父と娘の関係について、欲望・暴力・支配・抵抗といった問題系を視野に議論する。

### 【開催報告】

2021年7月8日(木) IGS セミナー「日本文学における父娘関係：欲望・暴力・支配・抵抗」がオンライン開催された。日本文学において、父と娘の関係を描いた近現代文学は、作品もその研究も、数少ない傾向にある。報告者のレティツィア・グアリーニ氏(国際基督教大学ジェンダー研究センター助教)、菊地優美氏(お茶の水女子大学基幹研究院リサーチフェロー)はいずれも、本学の大学院博士後期課程において、娘の視点から父娘関係を描いた日本の近現代文学作品の研究を進めた若手研究者である。

グアリーニ氏の報告「日本のアンティゴネーたち：角田光代「父のボール」を手がかりに」では、まず、なぜ日本の近現代文学では父娘関係に焦点があてられずにきたのかが解説された。戦後の日本の家庭においては、企業戦士としての長時間労働などが父親の不在をもたらし、母親による子の支配が目立つようになった。日本文学研究においてもそれがひとつのパラダイムとなったといえる。また、フロイトによる、男子が父を憎み母親を性的に思慕するというオイディプス・コンプレックス論が、20世紀を通じて精神分析のみならず、さまざまな分野に大きな影響を与えてきたゆえに、父娘関係はあまり関心を寄せられないテーマであったことが指摘された。

しかしこうした精神分析論においても、父娘関係の研究に取り組んだ研究者はいる。中でも、グアリーニ氏が注目したのは、Lynda E. Boose である。Boose は、ソフォクレスによる古代ギリシャ悲劇の登場



人物のアンティゴネーに焦点を当てた。アンティゴネーは、盲目になった父オイディプスの放浪の旅に付き添い、父の利益のために犠牲になる。Boose は、この父娘関係を統制する機制を「アンティゴネー型」と命名した。アンティゴネー型では、娘との関係において父が息子の役割を演じる故に、母親役を強いられている娘は自己犠牲を払ってまで父の希望に応じなければならなくなる。

アンティゴネーのような娘の姿を描く現代の作品として、グアリーニ氏は、角田光代の短編小説「父のボール」を取り上げた。その主人公も、末期がんで入院している父に寄り添う娘である。しかし、その心中は、尽くす娘のイメージとは異なり、矛盾と複雑性に満ちている。

主人公は父を好きであったことがないと語る。家庭内での父親は、威圧的で、家族を心理的に虐待した。子ども達が成長するにつれて、父は家庭内で権力者として扱われなくなり、弱い存在となっていく。大学に進学し家を出てからは、父の拘束から逃れられたと思っていた。しかし、父と完全に縁を切った兄と異なり、主人公は年に一度連絡を取っており、父との関係を断つことができない。徹底的な嫌悪を抱きながらも、どこかに父親への執着心がある。父を看取る行為は、死を確認することで父の支配から解放され、「ばんざい」を叫ぶためだった。しかし、その時が来ると、お悔やみの声を次々とかけられ、孝行娘の役を演じてしまう。父の支配から逃れようとする中で自覚されるのは、父が家族に信じさせた「不幸のボール玉」の存在と、それが転がってくることへの恐怖心が、いつまでも心のどこかに残っていることである。グアリーニ氏は、その恐怖心こそが、父の支配を徹底的なものにし、「父の娘」を作り上げたのだと示唆した。

菊地氏の研究報告「野溝七生子文学にみる父と娘：父に抗う〈書く〉娘の物語」は、『梔子』と『黄昏の花：Sancta Susanna』という、大正末から昭和初頭に発表された2作品を取り上げ、作家による家父長制批判の分析が示された。野溝文学でくり返し描かれるのは、暴力を伴う父の抑圧とそれに抗おうとする娘の姿であり、そこには野溝自身の父の姿が投影されているという。

『梔子』で娘は、父からの抑圧と暴力を受けながら育った身ではありながら、父に子どもたちへの愛を見出そうとしている。しかし父の側は、父と子の関係はあくまでも「家」制度が規定するものであり戸主としての権利があると主張する。ある意味、父も家父長制に縛られた存在ではあるが、未婚の娘もまた、その「家」に依存せざるを得ない立場である。家制度に疑問を感じつつも、それに抗う術を持たないという葛藤がある。『梔子』で示された娘の葛藤は、短編小説『黄昏の花』では、書くという行為による抗いの力を得る。

『黄昏の花』は、主人公から妹への手紙として書かれている。手紙には、寄寓する尼僧院で目撃した、年長の尼僧たちによる少女への暴力の描写がある。尼僧たちの表情から、暴力を与える側が感じる性的快感が示唆され、そこに、父から受けた鞭打ちの記憶が重ねられる。それはまた、父による娘の性的欲望の抑圧の記憶でもある。そのような暴力の告発と合わせて手紙の中で説かれるのは、女性の性的欲望の肯定と、抑圧する父への抗いである。手紙の結びに記された、修道女の性的欲望を描いたドイツの歌劇『聖女スザンナ』(Sancta Susanna)からの引用がその暗示であると、菊地氏は読み解いた。菊地氏はまた、この作品は、掲載紙である『女人芸術』を読む、「書く」力を持つ女性知識人に宛てられた手紙でもあり、女性への暴力と性的欲望への抑圧に対する抵抗を呼び掛けていると述べた。

質疑応答では、現在も依然として存在する家父長制を背景にした力関係への言及もあったが、グアリーニ氏が強調したのは、それとは異なる新たな父娘関係を描いた文学作品の存在である。また、父の視点から娘との関係を描いた作品もあるとのこと。父娘関係を描いた作品研究の今後の展開が期待される。

記録担当：吉原公美 (IGS 特任リサーチフェロー)

## IGS セミナー（生殖領域シリーズ）

### 生理の貧困

【日時】2021年7月16日（金）17:00～19:00

【会場】オンライン開催（Zoom ウェビナー）

#### 【講演】

カースティン・マックロード（エディンバラ・ネピア大学）

*Bleeding Free: A Documentary Film About Period Poverty*

（生理の貧困をテーマにしたドキュメンタリーフィルム“Bleeding Free”から）

長島美紀（プラン・インターナショナル・ジャパン）

Gender Issues in Japan as Seen through Menstruation:

The Challenges Posed by Lost Opportunities and Stigma

（生理からみる日本のジェンダー課題：機会損失・スティグマをめぐる私たちの問題）

【司会】仙波由加里（IGS 特任講師）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語（日本語逐次通訳）

【参加者数】154名

#### 【趣旨】

豊かに見える現代社会の中で、経済的な理由から、生理用品を手に入れることに苦労したり、月経の影響を受けて、大事なチャンスを逃した経験を持つ女性は少なくない。本セミナーでは、最近マスメディアなどでもよく取り上げられる「生理の貧困」という問題をテーマに、イギリスのエディンバラ・ネピア大学の研究者であり、映像制作のスペシャリストであるカースティン・マックロード氏と、プラン・インターナショナル・ジャパンの研究者であり活動家でもある長島美紀氏を招いて討論した。まずマックロード氏がドキュメンタリー映画 *Bleeding Free* の作成を通して見えてきた、月経の影響でさまざまな苦労に直面する英国やウガンダの女性たちの状況について報告し、次に長島氏がプラン・インターナショナル・ジャパンで実施した「日本のユース女性の生理をめぐる意識調査」の結果をもとに、日本の女性が月経の影響で抱える問題について報告した。そして参加者からの質問やコメントに答える形で、ジェンダーの視点からこれらの問題を議論した。

#### 【開催報告】

昨年11月に開催したIGSセミナー（生殖領域）「月経教育と女性の生涯の健康」でも、月経と女性の健康の問題を取り上げ、参加者から様々なフィードバックをいただいた。そして、ほとんどの女性が一生のうちに一定期間、経験する身近な生理学的現象でありながら、あまり議論する機会がなかった月経の問題を改めて認識させられた。加えて新型コロナの感染が拡大する中、最近では職場やアルバイト先を失ったり、家庭の経済的な理由から、生理用品を手に入れることに苦労している女性たちがいるという問題について、メディアでもしばしばとりあげられている。そこで、本セミナーでは「生理の貧困」

IGS オンライン国際セミナー（生殖領域）  
**Period Poverty**  
生理の貧困

最近マスメディアなどでも取り上げられること多い「生理の貧困」という問題。本セミナーでは、これをテーマに、イギリスの都立大学および映像制作のスペシャリストであるカースティン・マックロード氏と、日本の研究者であり活動家でもある長島美紀氏を招いて、月経に関連してさまざまな問題をかかえる女性たちに目を向け、ジェンダーの視点から議論したいと思います。

	<b>カースティン・マックロード</b> （エディンバラ・ネピア大学） Kirsten MacLeod, Ph.D. (Associate Professor at Edinburgh Napier University) 生理の貧困をテーマにしたドキュメンタリーフィルム“Bleeding Free”から <i>Bleeding Free: A Documentary Film About Period Poverty</i>
	<b>長島美紀</b> （プラン・インターナショナル・ジャパン） Miki Nagashima Ph.D. (Plan International Japan) 生理からみる日本のジェンダー課題：機会損失・スティグマをめぐる私たちの問題 Gender Issues in Japan as Seen through Menstruation: The Challenges Posed by Lost Opportunities and Stigma
司会	<b>仙波由加里</b> （お茶の水女子大学ジェンダー研究所） Yukari Sembu Ph.D. (IGS, Ochanomizu University)

言語：英語（日本語逐次通訳付き） 通訳者：松村静香(Cotts Works)

2021年7月16日(金) 17:00～19:00(JST)  
9:00～11:00(GMT)

オンライン開催 (Zoom Webinar)  
事前申込・登録料（参加無料）  
右のQRコードが当研究所のHPからお申し込みください  
お問合せ：ジェンダー研究所 igsoffice@ococha.ac.jp

IGS  
Institute for Gender Studies  
Osaka University

お茶の水女子大学ジェンダー研究所  
https://www2.igocha.ac.jp/



(Period Poverty) をテーマに、イギリスのエディンバラ・ネピア大学の研究者および映像制作のスペシャリストであるカースティン・マックロード氏と、プラン・インターナショナル・ジャパンの研究者であり活動家でもある長島美紀氏を招いて、貧困と月経の問題をジェンダーの視点から討論した。

マックロード氏は、エディンバラ・ネピア大学の学生や同僚とともに 2018 年から生理の貧困をテーマにしたドキュメンタリー映画の制作を開始し、本セミナーの 1 か月前に映画『Bleeding Free』を完成させ、スコットランドで初上映した。本セミナーではその映画の一部を紹介しながら、生理の貧困が若い女性や少女たちの教育や人生のチャンスにどのような影響を与えているかを提示した。スコットランドでは 2020 年 11 月に The Period Products (Free Provision) (Scotland) Act 2021 が制定され、2021 年 1 月より施行されている。これは生理用品を必要とするスコットランドのすべての女性と少女が、とくに教育機関や公共の場において生理用品を無償で利用できるようにするという法律である。映画は、この法律の制定をきっかけに大学に設置する生理用品ディスペンサーを設計した 3 人のスコットランド人学生の活動を軸に描いている。政府の政策レベルから、学生や女子学生による教育機関内での活動まで、生理の貧困に対する意識を高めるためのさまざまなアプローチがあり、これを紹介した。また同映画の中では、ウガンダでの活動も取り上げ、女子に再利用可能な生理用ナプキンの作り方を教える学校内でのプロジェクトや、コミュニティファシリテーターや高齢者も参加して、女性が生理用パッドを製造し販売する事業を立ち上げる活動や、月経に関する健康教育へのサポート等さまざまなアプローチを紹介している。そしてこうした活動に男性も巻き込み、広いコミュニティの賛同を得て、永続的な成功と影響力を持つ必要があるとマックロード氏は述べた。

次に中島美紀氏は、プラン・インターナショナル・ジャパンで、2021 年 3 月に実施した調査結果に基づいて、日本における生理をめぐる現状と課題について述べた。中島氏は、まず生理が日本文化の中でタブー（禁忌）として長くとらえられてきた歴史的経緯を説明し、続いて「日本のユース女性の生理をめぐる意識調査」の結果の中で特に注目すべき点を紹介した。日本の 15～24 歳の女性約 2000 人を対象に実施した生理と日常生活についての調査の結果から、「収入が少ない」「生理用品が高額」「親が買ってくれない」などの理由で、生理用品を入手できなかったり、購入をためらった経験を持つ人が 10 人に 3 人もおり、また生理用品や生理に関連する低用量ピルや痛み止めなどの薬の購入は、交際費や交通費、美容代などに比べると優先順位が低いことが紹介された。また、2 人に 1 人が生理痛に苦しみ、10 人に 3 人が生理で学校・部活・職場での遅刻・欠席・早退、機会損失を経験していたことなどにも触れた。こうした調査の結果を踏まえて、生理の影響を受けて大事な機会を損失している若い女性が多いことについて言及し、月経に対するスティグマをあらため、隠すのではなく、公に語り、問題を可視化させることが重要であり、学校での性教育の必要性を主張した。

本セミナーは、男女を問わず、数多くの参加者からたくさんのフィードバックや質問をいただいた。またドキュメンタリー映画『Bleeding Free』には、IGS が日本語字幕をつける計画が進行中である（本報告書 79 頁参照）。  
記録担当：仙波由加里（IGS 特任講師）

## IGS セミナー

# ジェンダー、エスニシティ、技能実習制度

【日時】2021年7月23日（金・祝）14:30～17:30

【会場】オンライン開催（Zoom ウェビナー）

### 【報告】

ワオデ・ハニファー・イスティコマー（一橋大学大学院博士後期課程）  
『『理想の技能実習生』の育成：インドネシア技能実習生プログラムを事例として』

巢内尚子（ラバル大学大学院博士後期課程／東京学芸大学特任講師）  
「パンデミックとジェンダー/エスニシティ：在日ベトナム人女性の困難と連帯の可能性」

### 【ディスカッサント】

アヴィヤンティ・アジス（インドネシア大学講師）

【司会】平野恵子（IGS 特任講師）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳有）

【参加者数】117名

### 【開催報告】

本セミナーは、コロナ禍で困難に直面する移住労働者、特に近年増加する女性技能実習生について、ジェンダーやエスニシティの側面からとらえるものである。技能実習生が送出国と来日後の日本でのような経験をするのか、問題点とその解決という面から議論を行った。技能実習制度は、1993年に途上国への「技能移転」による国際貢献を名目に始まり、今日では日本の少子高齢化による労働人口減少を補う労働力受入制度となっている。2019年外国人労働者の23.3%を占め、本セミナーで取り上げるベトナムとインドネシアは、技能実習計画認定数（実習実施企業が提出した実習計画を厚生労働大臣が認定した数）の1位と3位に位置している。

ワオデ・ハニファー・イスティコマー氏は、インドネシア技能実習プログラムを事例とし、いかに理想の技能実習生が育成されるのか「身体の規律化」の側面を現地調査に基づいて報告した。日本への技能実習生の送り出しは、初期の段階では日本とインドネシア政府間の合意に基づき、製造業や建設業に従事する男性が中心であった。1980年代になると、民間送り出し機関の参入により市場規模が拡大し、女性の募集が増加し、食品製造、漁業、農業などの職種が加わった。また日本での技能実習経験者が、送り出し機関の日本語教師や職業訓練所の講師として、育成プログラムに参加するようになった。ワオデ氏は、技能実習生育成プログラムは、Disciplinary Institution (Foucault1975)：規律をもとに規格化を進める制度としての機能を果たしていることを、インタビュー対象者の聞き取りから以下のように解説した。事前研修参加者には、工場や建設現場での肉体労働を想定した身体検査、体力テストが一律に実施され、運命共同体として寮生活を送りながら厳しい研修を受ける。受入会社の好評価を得る髪型や服装にすることを要求され、寮生活では先輩・後輩関係のヒエラルキーと男女役割分担が存在し、軍隊式の

IGS セミナー  
ジェンダー  
エスニシティ  
技能実習制度  
Gender, Ethnicity, Technical Intern Training Program

【報告者】  
巢内尚子 Naoko Naoe  
ラバル大学大学院博士後期課程 / 東京学芸大学特任講師  
Ph.D. candidate, Universite Lancelotti Project Lecturer, Tokyo College University  
『理想の技能実習生』の育成：インドネシア技能実習生プログラムを事例として

【報告者】  
Waode Hanifah Istiqomah  
一橋大学大学院博士後期課程  
Ph.D. candidate, Hitotsubashi University  
『理想の技能実習生』の育成：インドネシア技能実習生プログラムを事例として  
The Making of "Ideal Trainees": Case study on Technical Intern Training Program between Indonesia-Japan

【ディスカッサント】  
アヴィヤンティ・アジス Avyanthi Azis  
インドネシア大学講師  
Universitas Indonesia

【司会】  
平野恵子 Keiko Hirano  
お茶の水女子大学ジェンダー研究特任講師  
Project Lecturer, G.S., Chuo University

言語：日本語、英語（日本語通訳あり）  
Language: Japanese, English (Simultaneous Interpretation)

事前申込・登録制（参加無料）  
Prior registration required  
右のQRコードから当研究所のHPからお申し込みください

お問合せ：ジェンダー研究所 igsoffice@cc.ocha.ac.jp

オンライン開催  
ZOOM Webinar

2021年7月23日（金・祝）14:30～17:30  
23 July 2021, 14:30-17:30 (JST) / 12:30-15:30(WIB)

IGS  
Gender Studies Institute  
Research by Gender Studies  
Chuo University

主催：お茶の水女子大学ジェンダー研究所 <https://www.z.igs.ocha.ac.jp/>  
共催：共同研究・基盤研究「若年労働者の国際性育成」における  
11-4696-007-0001 若年労働者の国際性育成と連帯 (118801578)

規律、マスキュリニティが強調されることで「従順な身体」として育成される。加えて、日本語教育や日本の倫理やマナーの習得が求められるとともに、家族や国の名誉を背負うことも繰り返し指導される。実習生の中にはこのような厳しい研修を評価する者もいた。「理想の技能実習生」を育成するこれら事前準備は、不適格者を見つけるフィルターであり、与えられる仕事をこなす「従順な身体」を構築するメカニズムでもあった。しかし、ワオデ氏は研修内容と職種や受入企業の要求が合致するのには疑問が残るとした。

巢内尚子氏は、COVID-19 パンデミック下のベトナム人女性技能実習生の困難と、連帯の可能性について、技能実習生、元技能実習生、支援者へのインタビューとアンケートをもとに論じた。パンデミックにより帰国できず日本に残されたベトナム人は、それ以前から以下の6つの社会的剥奪にさらされてきた。1) 収入や教育機会が少ない農村出身で、家父長制社会のもと期待される子どもの役割として、あるいはシングルマザーとして、経済的必要性から移住を決断する経済的・文化的剥奪、2) 両国間の移住労働を促進する移住インフラが、一般的に債務を負う移動であることによる経済的剥奪、3) 技能実習制度は、原則的に企業変更が不可で、許される転籍にも時間がかかり、家族帯同は許されず、滞在期間に期限があるという、制度的な権利・自由の剥奪、4) 賃金は最低賃金に従い、税・社会保険料、家賃控除後の収入は、日本の貧困線以下という経済的剥奪、5) 職場での仲間が少なく、社会関係資本を構築しにくいという社会関係の剥奪、6) 技能実習機構の母語相談窓口、民間支援団体へのアクセスが困難であるという支援体制や支援者とのつながりの剥奪。これらが、パンデミック以降の課題と絡み合っただけでなく、技能実習生の困難は深刻化したことが明らかになった。そのひとつが、女性技能実習生の妊娠をめぐる問題である。

パンデミック以前、妊娠した女性は、就労を諦め帰国していた。労働法で守られるべき妊娠・出産が、契約書や送り出し機関の脅しにより、実習生には禁止されていると思込まされていたためである。パンデミック以降、彼女たちが帰国支援を求めることによって、妊娠・出産に対するこれまでの権利侵害が顕在化した。この問題に取り組み、ベトナム人支援をしているのがカトリック教会である。カトリック・コミュニティのベトナム人が連帯の基盤となり、教会やSNSを通し、シスターと日本に一定期間住む信者によって、実習生等への支援が行われた。しかしその活動は、聞き取りや相談通訳を通しての専門家への「お願い」がメインである。たとえば、夜間中学独立運動は、行政への働きかけにより在日朝鮮人女性の地位を構築したが、ベトナム人カトリック・コミュニティの活動は、当事者を支援者、専門家につなぐ活動であるため、重要であるのに可視化されにくいと言える。

ディスカッションのオーディエンティ・アジス氏は、日本の入管政策と移住労働者受け入れの歴史、東南アジアの移住労働者がもたらす送金の規模と国家開発の関係、インドネシアにおける労働法改定を解説した。

質疑応答では、インドネシアと日本における構造的な問題や、支援の連帯の可能性についてなど、国境を越える喫緊な課題についてセミナー参加者もまじえての議論が展開された。

記録担当：新倉久乃（フェリス女学院大学大学院博士後期課程）



## IGS 国際フォーラム（生殖領域シリーズ）

# 出自を知ることがなぜ重要なのか

## 提供精子で生まれた人たちの経験と思い

【日時】2021年8月29日（日）15:00～17:30

【会場】オンライン開催（Zoom ウェビナー）

【講師】

ダミアン・アダムス（オーストラリアでのAID出生者）

「法改正のために私が歩んできた道」

リーン・バスチアンセン（ベルギーでのAID出生者）

「ベルギーでAIDで生まれるということ」

加藤英明（日本でのAID出生者）

「日本での精子等提供医療の歴史と倫理的な問題」

石塚幸子（日本でのAID出生者）

「日本で出自を知る権利を実現するためには」

【ディスカッサント】

ケン・ダニエルズ（カンタベリー大学・ソーシャルワーカー）

【司会】仙波由加里（IGS 特任講師）

【主催】ジェンダー研究所

【共催】科研費・基盤C「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究」（課題番号：18K00034）

【言語】日英（同時通訳有）

【参加者数】187名

【趣旨】

本オンライン国際フォーラムでは、オーストラリア、ベルギー、日本で、提供精子を使った人工授精（AID）で出生した人4名が登壇し、AID出生者としての自身の経験やドナー情報を求める活動等の紹介を交え、ドナーの匿名性に対する考えやドナー情報や出自を知る権利を求める理由等について語った。そして約40年、AIDや提供卵子で形成された家族や「出自を知る権利」の問題について研究してきたケン・ダニエルズ氏がディスカッサントとして、多くの国での調査結果を踏まえて、良好な親子関係や出生者のアイデンティティの構築のためにも出自を知ることが重要であると述べた。そしてフォーラムの後半では、AID出生者の4人とダニエルズ氏がドナー情報や出自を知ることがなぜ重要なのかについて討論した。

【開催報告】

1980年代から提供精子や提供卵子での出生者がドナー情報を得ることを法律で保障する国が現れ、それ以降、法律で提供型生殖医療での出生者の出自を知る権利を保障する国も増えてきた。しかし日本をはじめ、未だに配偶子は匿名提供を基本とする国も少なくない。そこで本フォーラムでは、提供型生殖



医療での出生者の出自を知る権利を法で保障することになった西オーストラリア州の AID 出生者と、まだ精子や卵子の匿名提供を基本とする提供型生殖医療を実施しているベルギーと日本の AID 出生者の計 4 人を迎え、さらに約 40 年、提供精子で形成された家族や「AID 出生者の出自を知る権利」の問題について研究を続けて来たケン・ダニエルズ氏をディスカッサントに加え、ドナー情報や出自を知ることがなぜ重要なのかについて討論した。

最初の登壇者、南オーストラリアの AID 出生者ダミアン・アダムス氏は、同州で提供精子や卵子での出生者の出自を知る権利が保障されるよう、法改正を求めて、10 年以上もロビーイングを含む活動を続けてきた。彼は自身の出生者としての経験や、法改正を求める活動の中で感じた痛みや苦しみについて語り、法改正にはグループでの活動が有効であったことや、活動をすすめる際に法律や倫理、科学といった専門家の支援を受けることの重要性にも言及した。

2 番目の登壇者、ベルギーの AID 出生者のリーン・バスチアンセン氏も自身の経験やドナー情報を求めたその理由等を語った。ベルギーでは配偶子提供は一部の例外を除いて、匿名提供が法律で定められている。ベルギーでもバスチアンセン氏等、AID 出生者が中心となって出生者の出自を知る権利の法的な保障を求める活動を展開してきたが、ドナーの匿名性は現在も維持されたままである。彼女は、偶然にもオランダでのテレビ番組に出演したことをきっかけにドナーと出会うことができた。しかし、自分にとってのドナーという存在がどのような意味をなすのかに悩むなど、ドナーを知ってもすべての問題が解決するわけではないと述べた。

3 番目の登壇者、日本の AID 出生者の加藤英明氏は、自身の AID 出生者としての経験とともに、日本の AID の歴史的な背景と自身の医療者としての立場も含めて、提供精子の利用に関する現状の医療システムの問題点を述べた。加藤氏は、2003 年、医学部の 5 年生のときに、HLA 検査の実習を通して父親と HLA 型がまったく一致していないことから、父親と生物学的なつながりのないことを知ったが、親が AID の話題を避けたがり、加藤氏からの問いに向き合おうとしないことから親子関係に亀裂が生じたという。この経験から、親が隠そうとすると、生まれた子は隠さなければいけないような方法で自分は生まれたのかと、自分を否定的にみるようになる。AID の利用を希望し、自身の選択が間違っていないと思うなら、親は生まれた子に事実を伝えるべきであると言った。そして AID の当事者の自助グループ (Donor Offspring Group—DOG) を立ち上げ、ドナーの匿名性廃止を求める活動を展開してきた経験などを紹介した。

4 番目の登壇者、日本の AID 出生者の石塚幸子氏は、父親が遺伝性疾患を患ったことをきっかけに、母から AID で生まれ、父親とは生物学的なつながりがないことを告知された。事実を知って自身への病気の遺伝の心配がなくなったことに安堵する一方で、23 年もの間、親に隠され、うその上に自分の人生は成り立ってきたのかというように感じ、大きなショックを受けたという。ドナーを知りたいが、その理由は、母親と精子というものからできたのではなく、そこに実際の人があったということを確認したいからだという。石塚氏もドナーの匿名性の廃止や出自を知る権利の保障を求めてロビーイング活動を行ってきたが、これらを通して、告知の重要さやドナーがわからないことの問題への理解を求めることの難しさを感じていると述べた。

ディスカッサントのケン・ダニエルズ氏はまず、世界的に、出生した当事者が提供者の情報にアクセスをしたい、可能であれば会いたいと望むケースが増え、中には DNA 検査をしてドナーを探したり、SNS、WEB サイトを使ったり、さまざまなグループを立ち上げてドナーや同じドナーから生まれた人を探そうとしている人が出てきていることを紹介した。そして提供者情報が分かってしまうことは家族環境



を損なうのではないかと、という考え方から匿名性の廃止に反対する者もいるが、親が隠していても、年齢が高くなるにつれて、自分の家族に何か秘密があることに気づく当事者が多いと述べた。AID で子どもを持った親の多くは、医療者たちから AID で子どもを持ったことを秘密にするように言われてきたが、ダニエルズ氏が関わった 19 歳から 46 歳までの AID 出生者 21 名を対象にした調査では、自分のアイデンティティが家族関係に大きく影響を受けていると答えるものが多く、また育ててくれた親は大事であるが、それと遺伝的背景を知ることの重要性は別の話だと答えた当事者も多かったことが紹介された。そして家族形成には信頼が重要であり、秘密のある家族の中で育つことは、子どものアイデンティティ形成にもよくない影響を及ぼすことや、親もいつか子どもが事実気づくかもしれないと不安を抱えながら一緒に暮らすほうが好ましくない影響が大きいと述べた。また、世界で初めて匿名性を廃止したスウェーデンでは、法の施行後は一時的にドナー数は減ったが、その後ドナー数は増加に転じ、それも年齢が高い結婚して子どものいるドナーが増えたことを紹介した。ニュージーランドでのドナーの研究でも、自身の情報を開示してもいいというドナーは少なくないという。そして、匿名性を維持していてもドナーの数は常に不足気味であり、匿名性の廃止とドナーの減少は別の問題だと述べた。最後に、法律ができなければ社会の態度も変わらない、ということもあり、いいかえれば、出自を知る権利を法で保障することで、匿名性の廃止がいかに重要であるかを社会が認識するようになると述べた。

このフォーラムは多方面から注目され、当事者や研究者、メディアや一般の人など 190 名近くの参加者があり、インターネット記事（8/30 付け HuffPost と 8/30 付け Yahoo News）や 9 月 17 日付け『しんぶん赤旗』の暮らし家庭のページでもフォーラムの様子が取り上げられて配信された。

記録担当：仙波由加里（IGS 特任講師）

## IGS セミナー

# 戦争と美少女

## エンターテイメントとしての戦いの表象

【日時】2021年10月22日(金) 17:00~18:30

【会場】オンライン開催 (Zoom ウェビナー)

【講演】

足立加勇 (東京造形大学・立教大学講師)

「アニメの中の戦争と美少女」

【ディスカッサント】

関根里奈子 (IGS アカデミック・アシスタント、一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程、大正大学他講師)

【司会】大橋史恵 (IGS 准教授)

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】90名

【趣旨】

日本のアニメには「戦い」を題材としたものが無数にあり、そこで描かれる美少女たちは、日本アニメを象徴するアイコンである。日本アニメにおける「戦い」の物語は、第二次世界大戦における敗戦を契機に、自分の命を国家ではなく恋人同士や仲間内での小さな人間関係のために捧げる物語へとシフトし、美少女はそれを可能にする媒介として存在する。

本セミナーは、戦争を題材としたアニメに登場する美少女の変遷を通して、日本アニメにとっての戦争、そして美少女とは何であるのかを考察するものである。

【開催報告】

2021年10月22日(金) IGS セミナー「戦争と美少女：エンターテイメントとしての戦いの表象」がオンライン開催された。本セミナーは、戦争を題材としたアニメに登場する美少女の変遷を通して、日本アニメにとっての戦争とは何であるのか、そして美少女とは何であるのかを考察するものである。

足立加勇氏(東京造形大学・立教大学講師)は、日本のマンガ・アニメ文化における戦争の描写の変遷を追いながら、美少女という存在がどのように物語に影響しているのかを論じた。1970年代末から80年代半ばにかけて巻き起こるアニメーションブームの火付け役となった『宇宙戦艦ヤマト』シリーズ。中でも1978年公開のアニメ映画『さらば宇宙戦艦ヤマト 愛の戦士たち』(以下『さらば宇宙戦艦ヤマト』)は、戦前の少年向け小説などに登場する大日本帝国や日本軍の描写とはまるで違った「腐敗した国家」のイメージを打ち出した点で、戦争を描く物語の文法を大きく転換させた。その文法の転換に大きく影響を及ぼしているのが、森雪という美少女の存在であった。『さらば宇宙戦艦ヤマト』は戦争の物語でありながら「国家」という概念を通さず、主人公である古代進と、その恋人である森雪との個人間の「絆」や、宇宙全体に及ぶ「愛」の物語へと昇華してゆく。

『さらば宇宙戦艦ヤマト』以降の日本のマンガ・アニメにおいては、こうした個人間の「絆」や「愛」の物語をもってして宇宙全体にまで及ぶ戦いの物語を展開する、いわゆる「宇宙教」と呼称されるアニ



メのストーリーパターンが、美少女のイメージを伴いながら出来上がってゆく。そして90年代、「セカイ系」と呼ばれるパターンが登場する。ここで語られるのは、あくまで普通の少年である男性主人公自身の内面、主観的な物語だ。セカイ系では、主人公自身の問題が、美少女を介することで世界全体の愛の問題へと拡大されてゆく。あくまで「普通の少年」である主人公は、世界を救うために戦っているヒロインの美少女と精神的に深く結びつくことで、世界の運命を決める戦いにアクセスすることができるようになるのだ。

セカイ系以降の日本アニメは「美少女を供給するメディア」へと姿を変えてゆき、次第に「戦い」という非日常の描写そのものを切り捨て、美少女たちの日常の描写に終始する「日常系」というパターンを生み出してゆく。日常系において、男性主人公はもはや必要とされず画面から姿を消してしまう。なぜなら美少女たちの日常を楽しむ視聴者にとって大切なのは、画面の中の美少女たちとアニメを見ている自分との間にある直接的な結びつきであり、男性主人公を媒介とする必要がないからだ。こうした願望に応えるように、日常系以降、美少女のみで構成されたアニメが頻出することになる。

しかしながら現在、この日常系もまた、一部「戦い」の物語へと舞い戻ってきている。『ガールズ&パンツァー』を代表とする「萌えミリタリー」と呼ばれるジャンルでは、美少女たちは日常的に激しい戦闘に参加しつつも、怪我ひとつせず、不死身であるかのように描かれる。美少女たちの「戦い」の物語を美しい「絆」の物語として描かんとするが故に、傷や死はなきこととされるのだ。宇宙教的な作品群においても、美少女は時として傷つき、死を経験するものの、その傷や死もまた、戦いを通して強化される絆によって癒されるレベルにとどまる、乗り越え可能な、適度な障害物として主人公たちの前に提示される。これは「戦い」の物語に登場する美少女に付与された特殊性の一つだろう。

日本アニメにおける美少女は、主人公に寄り添うことで主人公を「立派な男性」として証明する存在であったし、主人公を「戦い」に参入させるための装置として働くこともあった。しかし何においても主人公との「絆」や「愛」の鍵として特別な価値を持つ存在として描かれてきたことを示し、報告を閉じられた。

コメントでは関根里奈子(IGS)が、自身が「どうしてもなく惹かれてきた戦いの表象」として「戦う美少女」像を紹介しつつ、美少女という存在があくまで主人公を肯定するためのアイテムとして存在し、「きみとぼくの物語」の「きみ」としてしか描かれてこなかったことに対するもどかしさを語った。「日常系」の台頭で美少女が物語の主人公にはなったが、それは単純に評価できることなのだろうか？不死身で傷つかず、かわいく戦う「普通の女の子」たちの表象によって「戦い」の物語がいつそう血生臭さを失い、気軽なものへと変換される可能性がある。アニメにおける美少女とミリタリーを掛け合わせた「萌えミリタリー」の表象は、自衛隊のリクルートポスターにも起用されるようになった。一旦国家から切り離され、個人間の絆の物語へと昇華されたはずの「戦い」の物語が、もう一度国家へと回収される政治性も考慮せねばならない。日常系以降の戦いにおける「美少女」という存在が、ヴァーチャル空間を飛び越えてリアル空間、現実における「戦い」のイメージをも和らげてしまう可能性がある点でも、ある意味で特別な価値と危うさを持つ存在であると論じた。

質疑応答では日常系以降の「美少女をみる視聴者—みられる美少女」という関係性に見出される性的対象化の問題について、議論が展開され、美少女をみる主体として想定されているのは誰であるのか、さらにみられる対象であるキャラクターが「美しい男性」となる場合コンテンツの消費者に差異は生まれるのか、という議論にも発展した。

記録担当：関根里奈子(IGS アカデミック・アシスタント)

## IGS セミナー

# 移住労働者の子どもたち

【日時】2021年10月30日(土) 14:30~17:30

【会場】オンライン開催 (Zoon ウェビナー)

### 【講演】

小ヶ谷千穂 (フェリス女学院大学教授)

「移動に生まれ、移動を生きる子どもたち：フィリピンのケースから」  
ヨガ・プラスティヨ (移住労働研究者、フリーランス通訳・翻訳者)  
「移民規制レジームに直面する残された子どもたちの苦境：インドネシアの経験から」

### 【ディスカッサント】

高畑幸 (静岡県立大学教授)

【司会】平野恵子 (IGS 特任講師)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英 (同時通訳有)

【参加者数】63名

### 【趣旨】

本セミナーは「移住労働者の子どもたち」に焦点を当て、先進国のケア労働を移民女性労働者が担うグローバル・ケア・チェーンが生み出す課題をジェンダーの視点から考察したものである。移住労働研究者の Yoga Prasetyo (ヨガ・プラスティヨ) 氏は、移民労働者の子どもが移民規制レジームによって、送り出し国に「取り残される」状況を報告した。フェリス女学院大学教授の小ヶ谷千穂氏は、フィリピンのケースから子どもの「生きられた」経験に着目する必要性を指摘した。最後に、静岡県立大学教授高畑幸氏がディスカッサントとして加わり、セミナー参加者からの質問にも答えながら討論を行った。

### 【開催報告】

本セミナーは「移住労働者の子どもたち」に焦点を当て、先進国のケア労働を移民女性労働者が担うグローバル・ケア・チェーンが生み出す課題をジェンダーの視点から考察したものである。講師には、移住労働研究者である Yoga Prasetyo 氏とフェリス女学院大学教授である小ヶ谷千穂氏をお迎えし、インドネシアとフィリピンの事例について講演いただくとともに、静岡県立大学教授である高畑幸氏をディスカッサントとして討論を行った。

はじめに、研究者であり自身が移住労働者の子どもである Yoga Prasetyo 氏は、移住労働者に対して制約を課す移民規制レジームは家族統合に困難をもたらしており、特にそのしわ寄せが残された子どもに及んでいることを問題提起した。講演ではまず、インドネシアの叔父叔母の家で養育された自身の幼少時代にふれ、シンガポールに家事労働者として移住した母との交流や、家族間の信頼関係の構築について語った。シンガポールの「選択的規制移民政策」では、3種類の就労許可のうち、低スキルの移住労働者

The poster features a vertical title '移住労働者の子どもたち' (Children of Migrant Workers) on the right side. It lists three speakers: Chiko Ogaya (小ヶ谷千穂), Yoga Prasetyo (ヨガ・プラスティヨ), and Sachi Takahata (高畑幸). Each speaker's name is accompanied by a small portrait and their affiliation. The event date is '2021 10/30 (Sat)' with times '14:30-17:30 (JST)' and '12:30-15:30 (WIB)'. It also includes a QR code and contact information for the Gender Studies Office (IGS).

働者に付与される就労許可においては、市民権が申請できないほか家族の呼び寄せも禁止されている。Yoga氏は、低スキル移住労働者が経済的成長のために使用される一方、移民としては歓迎されず不利益な扱いを受けていることを指摘した。こうした状況によって、移住労働者の送り出し国には、Yoga氏のように多くの子どもが親に付いていくことができず「取り残される (stay-behind)」ことになる。「取り残される子ども」に関する公式な統計データはなく、十分にその実態が把握されているとは言い難い。残された子どもへのケア提供、経済的、法的側面における課題も顕在化している。最後に、こうした課題に対しインドネシアでは、「デスマグラティブ (Desmigratif)」といった移住労働者の子どもの養育に係るプログラムや支援の提供が推進されていることが言及された。

小ヶ谷千穂氏は講演において、従来の移民・移動研究では、子どもは大人の「扶養者」「付属物」として語られてきたが、主体的な意思に基づき自立的な選択を行うエイジェンシー（行為主体性）を持った存在として、子どもの「生きられた」経験に着目し、「移動に生まれ、移動を生きる」子どもとして捉える必要性を指摘した。「移動に生きる子ども」は一概に捉えられるわけではない。移住労働者の子どもや外国にルーツを持つ子どもなど、移動の中に生まれ、移動を直接あるいは間接に経験していく存在である。その中で移住労働者の子どもは、労働者の出身社会に「取り残される」、将来的な社会の構成員ないし生まれること自体が想定されていないなど、ホスト社会からその存在を想定されていない子どもという側面がある。さらに移住労働者とその子どもの再統合においては、親・子どもの両者が親子関係の再構築に向けて大きな負担を強いられる。カナダに移住し家族の呼び寄せを行ったフィリピン人ケア労働者の事例から、子どもは、母親との再統合やホスト社会への適応など複数の適応を同時に行うことを要求されるほか、親世代とは異なる経験、「移住者の子ども」から「移住労働者」への移行経験など、様々な経験や困難を持つことも示された。最後に、こうした状況を踏まえ、「同化」の対象や「移住者の子ども」として見る視点を超えて、「移動の中に生まれ・生きる子ども・若者」という視点を持つこと、またそこにジェンダー視点を持つことが課題であることが指摘された。

講演を受けて高畑幸氏は、まず両講演ともに移住労働者である女性やその子どもの脆弱性を指摘したと述べた。そして、政策過程における移住労働者自身の声の欠如、移動「せざるを得ない」人への理解を持つ必要性について言及した。次に、Yoga氏に対しては母親や親族と「信頼」関係を構築するための具体的な取組、またインドネシアのデスマグラティブにおけるコミュニティ・ペアレンティングの持続可能性について質問がなされた。小ヶ谷氏に対しては、移動を生きる子どもを研究対象とする難しさや、子どもに接する大人の責任についての所見を尋ねた。セミナー参加者からは、インドネシア政府やNGOの実践内容や日本政府や自治体における取組、呼び寄せられた子どものネットワークや居場所づくりに関して、多くの質問が寄せられた。これらを受けディスカッションでは、Yoga氏からは、デスマグラティブが「取り残された子ども」へのエンパワメントという点で効果を上げていること、高畑氏からは、浜松市など日本の自治体においても多文化共生に向けた子どもへの支援が行われていること、小ヶ谷氏からは、外国にルーツを持つ子どもの増加を踏まえ日本政府も政策的関心を持ち始めていることなどが共有された。

最後に、現在の「取り残される子ども」が生まれる状況が、グローバル資本主義の中で「通常」となるかという質問に対し、「取り残される」こと自体が「異常」であり、そうした構造を批判していくとともに、家族形態が多様化する中でそこに生きる子どもの人生を尊重する重要性が各登壇者から述べられ、本セミナーは閉幕した。

記録担当：高橋麻美（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）

## IGS セミナー（生殖領域シリーズ） 不妊と男性のセクシュアリティ

【日時】2021年11月26日（金）17:00～18:30

【会場】オンライン開催（Zoom ウェビナー）

【講演】

由井秀樹（山梨大学大学院総合研究部医学域社会医学講座 特任助教）

「戦後日本における男性不妊の語られ方」

竹家一美（お茶の水女子大学非常勤講師）

「男性不妊の医療化と男性性」

【司会】

仙波由加里（IGS 特任講師）

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】109名

【趣旨】

不妊の問題は、産む性である女性の問題というように捉えられがちだが、不妊原因の約半分に男性がかかわっている。しかし、不妊男性を対象とした研究調査は国内外ともにあまり多くなく、不妊男性たちが不妊という状況とどのように向き合っているのか、それもよく知られていない。そこで本セミナーでは、男性不妊に関連する問題について、生命倫理、医療社会学、科学史の分野から研究をすすめられてきた由井秀樹氏と、社会学、ジェンダー／セクシュアリティの分野から研究をすすめられてきた竹家一美氏を招いて、「不妊と男性のセクシュアリティ」をテーマに議論した。

【開催報告】

不妊の原因は女性のみならず、男性に起因することも少なくない。しかし今なお、不妊を含む生殖の問題は女性の問題と捉える価値観が根強く残り、今日でも、こうした言説は再生産され続けている。本セミナーでは、この男性不妊を取り巻く状況について、由井秀樹氏と竹家一美氏の二人を招いて、「不妊と男性のセクシュアリティ」をテーマに議論した。

1人目の登壇者、由井氏は、1914年からすでに100年以上も続く讀賣新聞の「人生案内」というコーナーに寄せられた、男性不妊によって子どものいない男性当事者、また不妊の夫を持つ女性からの悩み相談56例を分析し、男性と不妊をめぐる問題について何が語られてきたかを検討した。興味深いことに、男性不妊の問題でも、相談を寄せてきたのは当事者である不妊男性よりも不妊の夫を持つ妻からの方がはるかに多い。そして戦後から1990年くらいまでは、女性自身にも妊娠・出産役割と自身の幸福を結び付ける考え方が多数みられ、「女性なら子どもが欲しいのは当然」というような語りもしばしば登場する。2000年くらいからはそのような語りはなくなるものの、自分に子どもができないこと自体を喪失と捉えるような語りはあり、また2000年以降は不妊治療にかかる経済的負担の問題や、女性の身体への負担に対する内容が増えるという特徴もみられる。由井氏の分析では、それは体外受精や顕微授





精など、高額のコストがかかる医療が中心となってきたことと関連するだろうという。そして不妊治療を通しての女性への身体への負担が、不妊男性の罪悪感にもつながり、妊娠出産役割を内面化するパートナーとの関係性が、不妊男性に苦悩をもたらしているという。また、男性の生殖機能の問題は、男性同士の間では性的能力（性交の能力）と同一視もしくは混同されている傾向が強みられ、それゆえに、男性不妊が男性にとって大きなスティグマになっているという興味深い分析が述べられた。男性が不妊の抑圧から逃れるための戦略として、不妊治療に対して消極的な態度を取り、それが、女性たちのさらなる苦悩へと続く。由井氏は最後に、不妊の原因が男性にある場合も女性にある場合も、また双方の生物学的な相性の問題である場合も、男女ペアという関係性がなければ、不妊はそもそも問題にならず、可視化されない。不妊とはさまざまな意味で、男女の関係性の病ではないかと述べた。

二人目の登壇者、竹家一美氏は、「男性不妊の医療化と男性性」をテーマに、男性不妊の医療化という現象を通して、男性性の構築性や可変性について論じた。不妊は女性の問題という社会通念によって、子どもができないことへの社会的プレッシャーは女性に集中しがちである。一方で、男性の場合、性的能力が男らしさというアイデンティティの中核を構成する要素の一つとなっていると推察され、男性は不妊であると告げられると性的能力を疑われ男らしさが欠如していると思われる大きなショックを受ける。それによって、男性不妊の当事者は沈黙を貫く。その結果、これまで「男性不妊」は可視化されずにきた。竹家氏自身の研究の中でも、勃起障害を原因とする男性不妊の研究協力者がまったく現れなかったことに触れ、男性にとって性的能力は男らしさを示す上で重要な要素となっていることを示唆した。しかし近年、日本では少子化対策を背景に、政治的・医療的な問題として「男性不妊」が注目されるようになってきている。これまで男性不妊イコール性的能力の欠如とみられ、不妊であることは男性性の欠如、男らしくないと捉えられがちだったが、男性不妊治療の技術が発展する中、専門医による男性への啓蒙・啓発活動が進み、行政も支援を開始するなど、男性不妊をとりまく社会的状況は変わりつつある。竹家氏は男性たちがセクシャリティと生殖を切り離して考えられるようになれば、男性も自身の不妊について語れるようになるのではないかと主張した。そして最後に生殖技術の発達によって、性と生殖が分化した現代社会では、男性にも生殖への積極的な関わりが求められる時代が到来しており、今後は男性不妊の社会的認知が高められ、不妊は男性の問題でもあるという認識が広がることを期待すると述べた。

本セミナーには、男性不妊の当事者や医療者も多く参加されていた。今後も不妊について、男女双方の視点からの議論が深まることを望む。

記録担当：仙波由加里（IGS 特任講師）

## IGS セミナー（学内限定）

# 教育とジェンダー、世界と日本 2030 年にむけて今日の課題

【日時】 2021 年 12 月 1 日（水） 13:20～14:50

【会場】 オンライン開催（Zoon ウェビナー）

【講演】

菅野琴（元ユネスコネパール事務所長・ユネスコ代表）

「教育とジェンダー、世界と日本——2030 年にむけて今日の課題」

【司会】

平野恵子（IGS 特任講師）

【主催】 ジェンダー研究所

【参加者数】 16 名

【趣旨】

本学博士前期課程科目「国際社会ジェンダー論」の授業の一環として、2021 年 12 月 1 日（水）IGS セミナー（学内限定）「教育とジェンダー、世界と日本——2030 年にむけて今日の課題」が開催された。本セミナーでは、元ユネスコネパール事務所長・ユネスコ代表の菅野琴氏をお招きし、国際社会が目指す「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の文脈の中で教育におけるジェンダー平等の諸課題を分析いただいた。現在もなお残る国際社会における男女間の教育格差とジェンダー平等の課題を提示し、また近年の COVID-19 によるジェンダー化されたインパクトについても考察するものである。

【開催報告】

はじめに、国連の活動の原点にもなる「世界人権宣言」について触れられた。特に教育の重要性として、単に教育を受ける権利だけでなく、教育は人権を尊重する公正な社会の構築へのプロセス、そして平和維持に貢献するものであると強調された。そして、教育における女子・女性差別の撤廃、そしてジェンダー平等は国際社会での共通の認識であることも確認した。

1990 年以降の国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）による「万人に教育を」運動の中では、男女教育の格差が解消されることはなかった。女子の教育参加阻害の背景として、家事・育児などの無償労働を女子が行なっていること、伝統的な社会規範の影響、女子への配慮に欠けるトイレなどの教育設備など、学校での安全性、学校空間でのジェンダー平等意識の欠如など様々な要因が挙げられる。2000 年代以降、ダカール「万人のための教育（Education For All: EFA）」会議では、男女間格差ではなく、教育におけるジェンダー平等について包括的な戦略を試みるようになる。ジェンダー平等とは、男女の違いを認めて、その違いも同じ価値あるものとして扱うことを示す。また、教育におけるジェンダー平等とは、単に数の上での平等ではなく、教育を受ける機会、受ける過程、受けた結果での平等であり、教育の平等を測る具体的な指標も作成された。初等教育における男女間格差に関しては前進はあったものの、そ

IGSセミナー(学内限定)  
教育とジェンダー、世界と日本  
-2030年にむけて今日の課題-



講師：菅野琴先生(元ユネスコ本部職員)  
司会：平野恵子(お茶の水女子大学ジェンダー研究所特任講師)

2021年12月1日(水) 13:20-14:50

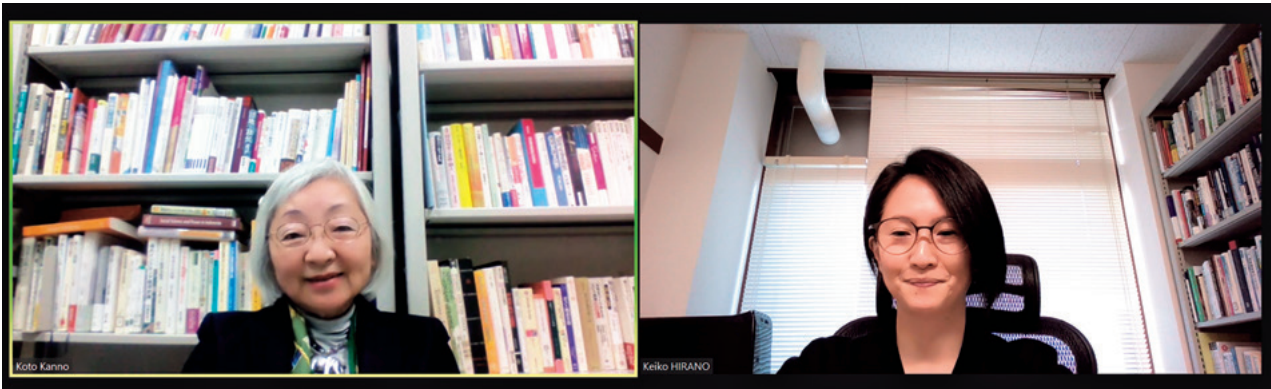
事前申込・登録制(参加無料)  
右のQRコードか当研究所のHPからお申し込みください  
お問い合わせ：ジェンダー研究所 igsoffice@cc.ocha.ac.jp



オンライン視聴  
ZOOM Webinar

IGS  
Institute for Gender Studies  
Osaka University

主催：お茶の水女子大学ジェンダー研究所 <https://www2.ocha.ac.jp/>



れでもなお、2015年までの初・中等教育就学率の男女間格差の解消は達成されず、女性の成人識字率の低さや国内での地域格差、性暴力やハラスメントの問題も浮き彫りになった。さらに、ジェンダー平等といった質的な経験をどう測定するのか、また女子だけではなく男子へのジェンダー役割期待や貧困による男子の中退の増加、といった新たな課題も明らかになった。

女子教育が普及しない大きな理由として、政府やトップレベルのコミットメントの欠如がある。人権としての教育という意識が弱く、ジェンダー平等政策が他の政策に比べ重要視されず、さらには実施されても小規模化、周辺化されてしまう。ポスト 2015 の持続可能な開発目標（SDGs）の中では教育におけるジェンダー格差、男女間格差をなくすことが強調されているが、菅野氏は、ジェンダー平等に焦点が当てられていないことに警鐘を鳴らす。ジェンダー格差解消という数の平等だけに囚われてしまうことは、教育におけるジェンダー平等とは言い難い。また、ジェンダー平等が、「持続可能な開発のための教育の普及に必要な知識と技術」として語られてしまっていること、そしてダカール EFA 比べて、教育におけるジェンダー平等を達成する意識が薄れてしまっていることも問題だと指摘した。ユネスコの「持続可能な開発のための教育」の中でも、持続可能性とジェンダー平等の接点は不明確である。菅野氏は、持続可能な共生社会とジェンダー平等を実現するには、変革志向のエンパワメント教育が必要だと述べる。単に女性を意思決定の場に参加させることだけでなく、「変革の担い手」の主体として教育していくことが求められている。「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に向けて、現状維持の教育をどう変えていけるのか、ジェンダー政策立案や過激化する国際対立への対処、そしてネットワークの構築など課題は山積みであることが確認された。

最後に、COVID-19 が教育とジェンダーにどう影響したのかが述べられた。学校閉鎖によって学習機会の喪失や、女子の健康・福祉・保護といった学校役割が機能しないということが挙げられる。そればかりか、リモート学習にアクセスできるかどうかにも男女間で格差があること、貧困家庭において、学校に行かなくなった女子は家事手伝いをさせられてしまうなどジェンダー格差は一層深刻化している。一方で、包括的な性教育のデジタル配信や妊娠した女子生徒がリモート学習を通して教育を受け続けることができたというデジタル化の成果の例も報告されている。コロナ渦での報告はまだまだ少ないが、今後学習にアクセスできない困難な子供たちをサポートしていく多様で、包括的な取り組みが求められている。

本セミナーは、授業「国際社会ジェンダー論」（博士前期課程）（本報告書 102 頁参照）の一環として実施され、国際協力や国際機関でのキャリア形成を考える学生にとって良い機会になった。

記録担当：花岡奈央（お茶の水女子大学大学院博士前期課程）

## IGS セミナー

# 国際協力とジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ

【日時】2021年12月15日(水) 13:20~14:50

【会場】オンライン開催 (Zoon ウェビナー)

### 【講演】

田中由美子 (城西国際大学招聘教授・国連女性の地位委員会 (CSW) 日本代表)

第一部「国際的キャリアの形成と国際協力機構 (JICA) での仕事」  
第二部「実証的研究——『タンザニア農村におけるジェンダーと土地権の変遷について』」

【司会】平野恵子 (IGS 特任講師)

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】47名

### 【趣旨】

国際協力におけるジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ (GTA) は、近年開発プログラムの中で鍵概念として登場したものである。ジェンダー不平等が構造の中にあることを明確に指摘する本アプローチは、不公正をもたらす社会規範などの是正を考える契機となる。本セミナーでは、講師の学位論文をもとにした『『近代化』は女性の地位をどう変えたか——タンザニア農村におけるジェンダーと土地権をめぐる変遷』新評論 (2016) を具体的な事例として取り上げ、GTA についての理解を深めることにより、国際協力におけるジェンダー主流化の意義を再認識する機会とする。

### 【開催報告】

博士前期課程科目「国際社会ジェンダー論」(102頁参照)の授業の一環として2021年12月15日、IGS セミナー「国際協力とジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ」がオンライン開催された。

第一部「国際的キャリアの形成と国際協力機構 (JICA) での仕事」では、田中氏が、国際開発の民間企業就職→英国の大学院で国際開発学履修→国連 JPO (Junior Professional Officer) 派遣制度により国連工業開発機関 (UNIDO) タイ国事務所勤務→国連アジア太平洋経済社会委員会 (ESCAP) 社会開発部 WID (開発と女性) 課勤務→JICA 国際協力専門員として活動、と、海外で学問と実務の双方で国際的なキャリアを形成してきた経緯をお話いただいた。

田中氏が JICA 国際協力専門員としてジェンダー支援の新しい方法を開拓する過程で、2015年国連サミットでの SDGs (「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」と持続可能な開発目標) 採択を契機に様々な分野でジェンダー主流化が推し進められるようになり、2020年代から SDGs 目標達成のための社会変革を目指して GTA の言葉が使われだしたという。

GTA とは、今まで行われてきたジェンダーのアプローチを Agency、Relations、Structure の 3 点から整理し直したものである。Agency とは、当事者が自らの人生において自身の意思で選択したことを実現

IGSセミナー  
国際協力と  
ジェンダー・トランスフォーマティブ  
アプローチ

本講義では、国際協力におけるジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ (GTA) を考える。GTAは近年開発プログラムの中で鍵概念として登場しているが、ジェンダー不平等が構造の中にあることを明確に指摘する本アプローチは、不公正をもたらす社会規範などの是正を考える契機となる。特に、講師の学位論文をもとにした『『近代化』は女性の地位をどう変えたか：タンザニア農村におけるジェンダーと土地権をめぐる変遷』新評論(2016)を具体的な事例として取り上げる。また、大学教授やCSW代表としての仕事についてもお話をうかがう。

講師  
田中由美子先生  
城西国際大学招聘教授  
国連女性の地位委員会 (CSW) 日本代表

司会  
平野恵子  
お茶の水女子大学ジェンダー研究所特任講師

2021年12月15日(水) 13:20-14:50

事前申込・登録制(参加無料)  
右のQRコードから当研究所のHPからお申し込みください  
お問い合わせ：ジェンダー研究所 igsoffice@cc.ocha.ac.jp

オンライン開催  
ZOOM Webinar

IGS  
Gender Studies  
Institute  
お茶の水女子大学ジェンダー研究所 <https://www2.igs.ocha.ac.jp/>



できる主体能力の育成を支援すること、Relations とは、社会のジェンダー規範や男女の意識を変革すること、Structure とは、ジェンダー平等で多様性を尊重する法律・政策・制度の構築を指す。また田中氏が監修した『ジェンダー・トランスフォーマティブ・プログラム ガイドブック』（[https://www.plan-international.jp/about/pdf/2104\\_GTP\\_guidebook.pdf](https://www.plan-international.jp/about/pdf/2104_GTP_guidebook.pdf) 公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン）では、GTA はジェンダー規範の変革、エージェンシー支援、ジェンダー平等達成を目的とした男児と男性のエンゲージメント、状況改善にとどまらない女兒と女性の社会的地位の向上、多様なニーズの明確化と差別や排除の問題への取り組み、法律・社会構造の変革と、6 点で提示されている。

第二部は、「実証的研究——『タンザニア農村におけるジェンダーと土地権の変遷について』」と題し、田中氏の学位論文を基に GTA についての議論が行われた。

土地権とジェンダーについては SDGs のゴールに、1.4「土地への男女の平等の権利」、2.3「土地への平等なアクセス」、5a.「女性に対し、経済的資源に対する同等の権利、オーナーシップ及び土地、その他の財産、相続財産等に対するアクセスを与えるための改革を行う」とあるが、具体的な方法は明示されていない。女性の農地所有率はその労働力に対して、アフリカ南部では 15%、日本でも 21% と低い。タンザニアでの女性の土地所有を阻む背景には、父兄社会、氏族社会の慣習法による土地所有・相続と民法の問題があり、氏の研究は以下のような女性の土地所有の実態を明らかにしている。①女性の自己名義登録には必ずしも管理権が伴わず特に処分権が付与されないことが多い、②夫の土地は自己名義に変更しない傾向があるが、農村女性の土地権は増加している、③氏の調査によれば、娘より息子に土地相続させる回答が倍多いが、希望としては全体の約半数が娘と息子の両方に相続させたいと考えている、④遺言書の作成啓発が女性の土地所有の拡大装置として機能している、の 4 点である。

GTA 概念に照らすと、女性は土地所有によってエージェンシーを高めるが、「女性は自らにとって価値があることを選び、その選択にはバリエーションがある。土地購入、遺言書などの選択肢を通じて実現可能性を高めようとしている」という Agency、「ジェンダー平等な土地法は必要だが、固有の状況に沿って多様な選択が可能になるような制度構築が必要」という Relations、「社会の近代化により、家族の関係性、ジェンダー関係性、土地所有・相続のあり方、社会規範が変容しており、コミュニティは女性と協働関係を築くことが可能となっている」という Structure の 3 点が指摘できる。

開発政策・事業へのインプリケーションとしては、①土地の慣習的耕作権・所有権を確保できる制度構築、②相続・贈与・売買により土地権を確保できる制度構築、③土地権の多様な選択を実現可能にする制度構築があげられた。本研究で、近代化による農村社会の核家族化という変容に伴い、女性の土地所有を助勢する事象が発現している、女性の多様な土地権に関する選択肢を拡大することが農村女性の実現可能性を高めることが明らかになった。

質疑応答では、キャリア形成における日本での就職の意義や、インタビュー調査の実際、JICA のジェンダー案件の分類の仕方についてなど、活発な議論が展開された。

記録担当：下川自子（お茶の水女子大学大学院博士前期課程）

## IGS セミナー

# 宝塚というランドスケープとジェンダー ファンダムの文化的・地理的越境とその可能性

【日時】2022年2月24日（木）14:00~16:30（予定）

【会場】オンライン開催（Zoom ウェビナー）

【報告】

ルセッタ Y・L・カム（香港浸會大学准教授）

「台湾における宝塚歌劇の文化越境的欲望とクィア女性のファンダム」

ズザンナ・バラニャク平田（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）

「『夢の世界』を作り出す—関西における宝塚のファン文化を事例に」

【ディスカッサント】張瑋容（同志社女子大学助教）

【司会】大橋史恵（IGS 准教授）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳）

【参加者数】132名



### 【開催報告】

2022年2月24日（木）IGS セミナー「宝塚というランドスケープとジェンダー：ファンダムの文化的・地理的越境とその可能性」がオンライン開催された。宝塚歌劇については、女性によって作られた「夢の世界」であり、女性の観客を一時的に男性優位社会の日常的な抑圧から解放させるというユートピア的なイメージの下で語られることが少なくない。しかし「清く正しく美しく」という女性演者のモットーの裏で、宝塚歌劇団が、家父長的な企業構造の下で厳しく管理されているということも事実である。こうした相反する表象やイメージをめぐる考察するために、本セミナーでは、大橋史恵氏（お茶の水女子大学ジェンダー研究所）による司会のもと、ルセッタ・カム氏（香港浸會大学文學院准教授）とズザンナ・バラニャク平田（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程）の報告の後、ディスカッサントの張瑋容氏（同志社女子大学現代社会学部助教）が加わって討論を行った。

1人目の登壇者、ルセッタ・カム氏は、台湾における文化越境的欲望と宝塚歌劇団のファンの中でもレズビアン女性のファンを中心に講演を行った。植民地的遺産の経緯により、台湾の宝塚ファンダムは多くの世代を魅了したが、近年では2013年、2015年、2018年の宝塚歌劇団の台湾公演を機に現地の関心が改めて高まっているようだ。カム氏の講演は、台湾の新世代の宝塚ファンに着目し、そのファンたちがクィアな読解と欲望の生産に積極的に関与し、分節化しようとしていることを示した。この文化越境的な欲望の生産は、ローカルなLGBTQ+／「同志」運動がもたらした新たな資料へのアクセスと、国境を越えた中国語圏のクィアなファンコミュニティの形成によって可能となったとカム氏は主張した。

2 人目の登壇者、ズザンナ・バラニャク平田は、日本の宝塚ファンが宝塚歌劇の本拠地である宝塚市をどのように認識しているのかについて発表した。宝塚ファン文化の「聖地」である宝塚大劇場周辺の都市空間は、多くの宝塚ファンにとって安全な空間であり、女性ファンにとって地理的な居場所として認識される。彼女たちがこの都市空間との関係や日常的な相互作用をどのように築いているかを探求することでバラニャク平田は、この空間が宝塚ファン文化に重大な役割を果たしており、女性のファンネットワークによって居場所として常に創造・維持・意義づけされつつあると考察した。

2 人の報告に続いて、張瑋容氏が加わりディスカッションを行った。張氏はファンダム空間には、固定的で限定的な物理的空間から、個々のファンの実践や欲望を投影した抽象的な言説空間まで、さまざまな形態があることを指摘した。宝塚ファンダムの文脈では、曖昧さと混合性を持ち合わせたジェンダーパフォーマンスは、女性ファンにクリアな読解を温存できる密やかな空間を提供しているのである。このような解釈を中心とする英語圏の先行研究がある一方、日本の研究ではほとんど議論されていない。バラニャク平田は、パフォーマンス/役者やファン自身のセクシュアリティ等を決して議論しないことは日本のファンダムの暗黙のルールの一つで、先行研究のギャップはそこに起因している可能性が高いと指摘した。興味深いことに、カム氏はこのようなファンの自己検閲の現象が台湾の宝塚歌劇のファンダムにも発生し、クリアな読解を楽しむ多くのファンが主流派のファンダムから疎外されていると述べた。この状況は、ファン文化の中にクリアなファンタジー空間は存在しうるが、それでも社会的排除の対象となりうることを示唆しているのではないかと討論した。

張氏が取り上げたもう一つの議論点は、トランスナショナルなファンダムの社会文化的背景と、それがポップカルチャーの受容に与える影響であった。例えば、日本のポップカルチャーは台湾社会に大きな影響を与えたが、K-POP など他の国境を越えたファンダムの影響はそれほど大きくないという。このような受容度の違いは、世代間の違いによるものではないかとカム氏がコメントした。1980 年代から 1990 年代にかけては、日本のポップカルチャーが東アジア市場を支配していたが、2000 年代以降、韓国のポップカルチャーの輸出が強化され、台湾人の若い世代は日本よりも韓国の文化に親しんでいると指摘した。この世代の差は、カム氏が台湾の宝塚のレズビアン女性のファンを調査した際、その多くが 20 代後半から 40 代の社会人女性であったことから明らかであった。

本セミナーの参加者からは、宝塚のクリアな読解、女性ファンダムの特徴や新型コロナウイルス禍がファンのコミュニティに与えた影響などについて、多くの質問やコメントが寄せられた。本セミナーで話題となった国境を越えるファンダムと女性ファンのネットワークについて理解を深めることができた。宝塚歌劇が近年、国際的な観客を獲得しようとしていることを考えると、解釈・読解・欲望の多様性やクリアなファンの包容力についての議論が今後必要になっていくだろう。

記録担当：ズザンナ・バラニャク平田（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程）

## IGS セミナー

# 『ルッキズム』：女性美をめぐる理論と表象から

【日時】2022年3月22日（火）10：00～11：30

【会場】オンライン開催（Zoom ウェビナー）

【報告】

英美由紀（藤女子大学教授）

【司会】

戸谷陽子（IGS 所長／お茶の水女子大学教授）

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】66名

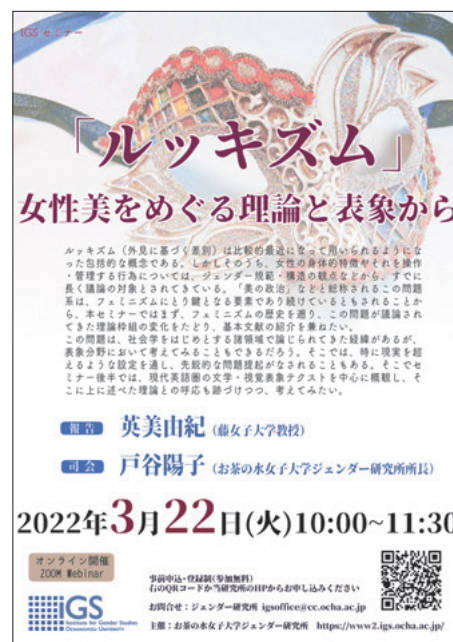
【開催報告】

2021年3月22日（火）、IGS セミナー「『ルッキズム』：女性美をめぐる理論と表象から」がオンライン開催された。ルッキズム（外見に基づく差別）は比較的最近になって用いられるようになったタームおよび概念であるが、女性の美の理想やそれを操作・管理・獲得するための実践については、ジェンダー規範・構造の観点から、長く議論の対象とされてきた。本セミナーでは、英美由紀氏（藤女子大学教授）が、この言葉が使われることになった経緯を含め文学・文化表象の観点から、主に女性の外見や美容行為に論点を絞り、議論の経緯や理論枠組の変化、実際の例を分析しつつ報告した。

ルッキズムは1970年代終わりに、肥満体形の人々が使い出した造語で、人種差別と同様の陰險な差別として認識された。100年のフェミニズムの流れで、女性たちは美を求めながらも、それを拒絶する動きを見せてきた。それは、画一的な美意識を掲げる美容産業への懐疑や、社会から求められる美の規範からの離脱に繋がる。1960年代の第二派フェミニズム以降に、「個人的なことは政治的なこと」のスローガンのもと、女性の身体を含む私的領域が焦点化されたことで、女性の規範的な美や美容行為が議論されるようになった。こうして女性の身体が、家父長制を理論基盤にしなが、男性権力が設定した美の基準によって操作、抑圧されてきたことが批判されるようになり、美容行為も抑圧システムとして理解された。

しかしその後、女性の美意識は、男性権力による直接的抑圧とは異なり、女性自身の日常的な言説実践によって身体に作用する、女性と美意識規範の双方向の共謀関係の構図をなしているという説も生まれる。美容行為は、規範的身体を（再）生産する権力作用と意味付けられ、男性から強制されているというよりもむしろ、女性自身が規範を永続化し、その流れに身を投じる共謀的存在になったという。

それと並行して、1990年代初頭から、西欧中心の表層的運動に終始したポスト・フェミニズムを否定する、第三派フェミニズムが台頭する。女性の美を力であるととらえる点に特徴がある。女性が自



身を犠牲者だと定義する「犠牲者・フェミニズム」から「力・フェミニズム」への転換がなされた。

文学における女性と外見的な美については、男性主人公の資質が個性であるのに対し、女性主人公は美が求められる傾向にあると、当初から指摘されてきた。しかし、女性作家が、美しくはないが生き生きとしたヒロインを描くこともある。例えば、C・ブロンテ『ジェイン・エア』(1847)やG・エリオット『ミドルマーチ』(1871)では、その魅力が外見ではなく人間性にある女性主人公が描かれる。当時の書評で、女性主人公の外見を魅力に欠けるものとするべきではない、という批判がなされたという事実は、当時いかに外見の美しさが不可欠な要素とされていたかを逆説的に示すものであると言える。

20世紀半ば以降は、女性主人公の外見が自己イメージや異性関係に影響を及ぼす様子が描かれる。外見に外科的に介入する例も増えたが、同時に女性の美容行為は虚飾と捉えられ、女性美や若さなどのジェンダー規範を押し付けられながらも、それを追求することは断罪される節がある。

それに対し、アイラ・レヴィン『ステップフォードの妻たち』(1972)では、美しく従順な妻たちに疑問を持っていた女性主人公が、結局彼女たちと同様にロボット化される過程を描く。女性とその身体の抑圧の原因が男性基盤社会の権力構造にあること、そして女性がそこから逃れるすべを持たず、画一的な美を体現することにおいて、彼女は抑圧モデルにおける典型例である。

フェイ・ウェルドン『魔女と呼ばれて』(1983)では、主体的に美容行為を行う主婦が描かれる。社会規範を変えられないから自分を変えるという彼女の行為は、自ら人生を切り拓くという意味で主体的なエンパワーメントであるとする意見がある一方で、社会規範が求める通りの「美」の実現を強いる社会の抑圧の犠牲者であり、主体的な選択とは言えないという見方も存在する。

ポスト・フェミニズムで取り上げられる、独身女性の仕事と恋愛を描く「チック・リット」というジャンルは、性的魅力をアイデンティティやパワーとして示すも、結局社会規範から抜け出せていないという見方もある。

近年では、商業主義の搾取の対象としての身体を描く作品の中で、女性たちが心を通わせる展開になることもある。自身の身体を管理し、改造してきた女性が、美の規範を認識しつつも、欺き、その行為を読者と共有する側面もある。フェミニスト間で、美への関心が復活している近年。文学や映画における美の表象を、今後も観察する必要がある。

質疑応答では、男女共に自分のためと謳う美容脱毛が勧められる状況や、骨格診断やパーソナルカラー診断など、互いに優劣関係のない美の基準が再編成されつつある状況への言及があった。それに対し、自分のためと言いながら、あくまで社会規範に合致する自分でいたいという矛盾があることを英氏は指摘する。社会的連携が希薄な時代に、自己管理や自助が必要になるという文脈で理解されるという。また、日本では、ルッキズムが女性の美に限定して使用される傾向にあるが、男性や身体障害者、事故や病気の結果による身体部位の欠損等、外見を規範的な美の概念からはずれるとして排除する傾向にあるルッキズムにも意識を向ける必要があるのではないかという指摘もなされた。

第二波フェミニズム以降、常に議論の俎上に挙げられてきた女性の身体や外見の問題は、時に行き詰まりを見せつつも、依然としてフェミニズムの中心的課題であり、「美の規範による抑圧 vs. 欲びや戯れ、女性のエイジェンシー vs. 文化の支配、美容産業の複合体への揺るぎない懐疑 vs. それに抵抗する女性の能力への期待」(Elias, Gill and Scharff 5)であり続ける。

記録担当：海老鴻子（お茶の水女子大学大学院博士前期課程）

## ▶ 2021 年度 主催 IGS 研究会詳細

### IGS 研究会

### IGS 研究協力員研究報告会

【日時】 2022 年 3 月 24 日（火） 17：00～18：30

【会場】 オンライン開催（Zoom）

#### 【報告】

板井広明（専修大学准教授）

「肉食／非肉食の倫理に見られる差別の問題」

佐野潤子（慶応義塾大学特任講師）

「既婚女性の金融資産：ジェンダー視点からの考察」

#### 【挨拶・コメント】

戸谷陽子（IGS 所長／お茶の水女子大学教授）

#### 【司会】

仙波由加里（IGS 特任講師）

【主催】 ジェンダー研究所

【参加者数】 17 名

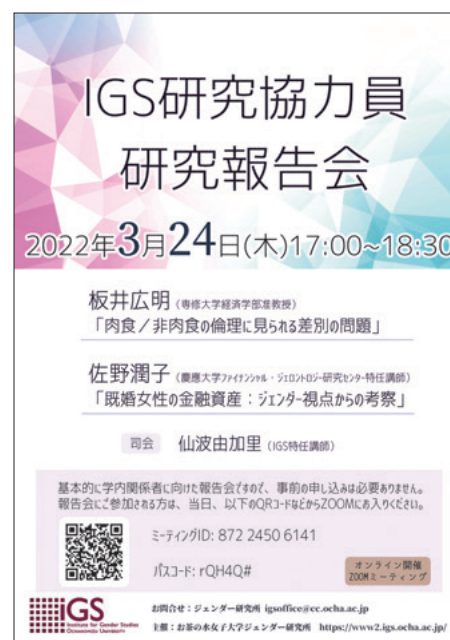
#### 【趣旨】

お茶の水女子大学ジェンダー研究所では、当研究所の研究協力員には在籍期間中に自身の研究紹介も兼ね、研究報告することを義務付けている。2021 年度は 2 名が研究協力員として研究活動を行い、その研究成果報告として 2022 年 3 月 24 日、IGS のメンバーや学内研究者に向けてそれぞれの研究について報告した。1 人目の報告者の板井広明氏は、食肉／非食肉に対する正当化する論理、否定する論理を差別に結び付けて、倫理・哲学・ジェンダーの視点から分析した。また、2 人目の報告者の佐野潤子氏は日本の既婚女性の就業形態と資産形成、そして金融行動を調査データを示しながら報告した。

#### 【開催報告】

2022 年 3 月 24 日、お茶の水女子大学ジェンダー研究所の研究協力員研究報告会を開催し、2021 年度の IGS 研究協力員であった専修大学の板井広明氏と、慶応義塾大学の佐野潤子氏が報告した。

1 人目の報告者の板井氏は『社会科学年報』56 号（2022 年、専修大学）に掲載された「規範的な食の倫理の可能性」をベースにして、「肉食／非肉食の倫理に見られる差別の問題」というタイトルで報告した。英語の Food Ethics という用語に日本語の定訳はなく、それは Food Ethics の認知が低いことを示している。日本では食に関する倫理は、主に環境倫理や動物倫理の中で語られ、食に関する倫理の研究者も農学の分野の研究者が多い。板井氏は、「食について議論するとき、エコロジストとフェミニストの結びつきが希薄」という鬼頭葉子（同志社大学）の主張を紹介し、本報告では、動物を食すること（食肉）についての批判や正当化の理論に、倫理的視点のみならず、エコロジーやジェンダーの視点からも報告



した。食の危機を遺伝子組み換え、サプリメントなどに頼ることで乗り越えようとする流れや、動物の屠殺を肯定する理由に動物を人間よりも下位に見る風潮があることを紹介し、それは障害者差別にも通じるものがあると述べた。また草食系男子、肉食系女子といった言葉にもみられるように、食肉がジェンダー差別とも深い結びつきをもっていることも紹介した。

2人目の報告者、慶應義塾大学の佐野潤子氏は、「既婚女性の金融資産：ジェンダー視点からの考察」というテーマで、自身の研究を紹介した。正社員・パートタイマー・専業主婦といった就業形態でグループ化した既婚女性を対象に行った調査データをもとに、各グループの女性たちの資産形成や金融行動の類似点や相違点、特徴などを報告した。日本は高齢化社会に突入しており、男性よりも寿命の長い女性が老後貧困に陥るケースが少なくない。そのため女性が一生涯、経済的安定を得るためにも女性の資産形成が重要となっている。佐野はカップルのうち、女性が正社員であったり、高収入を得ているほど、性別役割分担意識が低く、パートナーとの家事分担意識が高いことを紹介した。その一方で、パートや専業主婦で夫への経済的依存度が高いほど、女性が夫に稼得役割を期待し、自身は家事の多くを担うようになり、それがさらなる男女の収入格差を招いて、女性の老後の経済不安にも影響を与えていると述べた。しかし、就業形態がどのようなものであれ、女性たちは家族の資産形成には女性自身も貢献していると考えていることも紹介した。

2人の報告のあとに、参加者の間からも様々な質問やコメントがあがり、まったく異なる問題を扱う報告であったにもかかわらず、ジェンダー問題への関心や教育などにおいて共有すべき課題があるという意見も出され、非常に意義のある討論を展開することができた。そして最後にジェンダー研究所所長である戸谷陽子教授より報告会についての総括の言葉が述べられた。

記録担当：仙波由加里（IGS 特任講師）

## ▶ 2021 年度 後援イベント

### 日本フェミニスト経済学会 2021 年度大会

### コロナ災害があらわにした女性のいのちとくらしの課題

【日時】 2021 年 9 月 18 日 (土) 10:15~17:00

【会場】 オンライン開催 (Zoom ウェビナー)

【座長】 中原朝子 (神戸大学)

【司会】

小ヶ谷千穂 (フェリス学院大学)

中原朝子 (神戸大学)

【トークセッション】

雨宮処凛 (作家・活動家)

伊田久美子 (大阪府立大学名誉教授)

「相談現場からみえる女性の貧困、仕事、住まい」

【報告】

Carlos, Maria Reinaruth Desiderio (龍谷大学)

コロナ禍における在日フィリピン人女性の問題と今後の課題

湯澤直美 (立教大学)

コロナ禍におけるシングルマザーの現況と政策課題

大沢真理 (東京大学名誉教授)

コロナ禍への日本政府の対応—社会政策の比較ジェンダー分析から

【討論】

丸山里美 (京都大学)

三山雅子 (同志社大学)

【主催】 日本フェミニスト経済学会

【後援】 お茶の水女子大学ジェンダー研究所、早稲田大学ジェンダー研究所、早稲田大学平和学研究所



# 4.

## 特別招聘教授 プロジェクト

2021 年度特別招聘教授  
プロジェクト概要



## ▶ 2021 年度 特別招聘教授プロジェクト概要

「特別招聘教授プロジェクト」の主な目的は、グローバルな視野から本学のジェンダーに関する教育研究活動の一層の推進及び活性化を図ることである。海外の著名な研究者を招聘して、高水準の研究プロジェクトの実施、国際シンポジウムの企画・登壇を含む国際的な研究ネットワークの構築、大学院生を対象としたジェンダー研究教育プログラムに貢献していただき、「国際的研究拠点」としての研究所の総合力を向上させる重要な事業である。

2021 年度も、新型コロナウイルス感染症対策としての国際移動の制限の影響により本研究所への特別招聘教授の招聘はかなわなかった。大学教員の海外招聘は「特段の事情」による入国が認められた時期もあったが、入国許可や検疫の条件が感染状況次第で急に変更になる可能性があるという条件下での来日交渉は困難を極めた。新規の招聘はなかったものの、過年度に特別招聘教授の任についた海外の研究者との研究交流は続けられている。とりわけ、2018～2019 年度に招聘したジャン・バーズレイ氏（ノースカロライナ大学チャペルヒル校名誉教授）には、『ジェンダー研究』の編集委員を務めていただいているほか、INTPART プロジェクトの書籍刊行で論文のレビューをお引き受けいただくなど、継続的に研究所事業にご貢献いただいている。このような長期的な交流関係が築かれることも、特別招聘教授プロジェクトの成果の一つである。

本プロジェクトは、海外の第一線の研究者との教育・研究の現場での直接交流を実現させることで、本学の研究・教育の現場の活性化を図ってきた。そして、本学の招聘に応じて特別招聘教授の任についた研究者たちは、熱意をもってその職務に当たり、多大な貢献をしてくださっている。そのご貢献の内容とプロジェクト成果を研究所のウェブサイトで俯瞰できるよう、特別招聘教授プロジェクトの特設サイト（日本語版・英語版）の構築作業が進められている。

### IGS特別招聘教授プロジェクト

お茶の水女子大学ジェンダー研究所  
2015～2021年度特別招聘教授招聘事業の記録

特別招聘教授プロジェクトとは

職務内容と実施事業

特別招聘教授別プロジェクト一覧



**特別招聘教授プロジェクトとは**

お茶の水女子大学ジェンダー研究所（IGS）が、大学機能強化事業「グローバル女性リーダー育成のための国際的教育研究拠点形成」の一環として実施する**特別招聘教授プロジェクト**は、海外から著名なジェンダー研究者を招聘し、本学におけるジェンダー研究にグローバルで学際的な最先端の知見を提供することで研究教育活動の活性化をもたらし、かつ国際的な研究ネットワーク構築を推進することを目的としています。特別招聘教授は、研究プロジェクトの推進、セミナーや講義等での教育事業への参加、国際シンポジウムの企画や研究報告、それらプロジェクト成果の発信に携わります。



# 5.

## 国際研究ネットワーク

- 1) 海外研究交流
- 2) 国際共同研究プロジェクト
- 3) AIT ワークショップ
- 4) INTPART プロジェクト
- 5) JAWS
- 6) 国内外招聘研究者一覧

## 1) 海外研究交流

■ジェンダー研究所所属の研究者が2021年度に研究交流または共同研究をした海外の研究者

<アジア・オセアニア>

### 黄長玲 (Chang-Ling Huang) (国立台湾大学教授)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究プロジェクトの研究協力者。韓国ジェンダー政治研究所との共同研究の台湾国会議員アンケート調査を実施、論文の執筆。(本報告書 85 頁参照)

### 楊婉瑩 (Wan-Ying Yang) (台湾国立政治大学教授)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究プロジェクトの研究協力者。韓国ジェンダー政治研究所との共同研究の台湾国会議員アンケート調査を実施、論文の執筆。(本報告書 85 頁参照)

### Ah-ran Hwang (釜山大学教授)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表的性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。研究成果発表・論文の執筆(本報告書 85 頁参照)。

### Jinock Lee (韓国ジェンダー政治研究所研究委員)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表的性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。研究成果発表・論文の執筆(本報告書 85 頁参照)。

### Soo-hyun Kwon (韓国ジェンダー政治研究所研究委員)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表的性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。研究成果発表・論文の執筆(本報告書 85 頁参照)。

共著論文 “It’s Money that Matters in the End: the Impact of Gender-targeted Public Funding on Political Parties and Women Candidates in South Korea.” 執筆、*International Political Science Review* の特集に投稿

<アジア・オセアニア>

**Jiso Yoon (韓国女性政策研究院国際協力センターセンター長)**

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

申琪榮が韓国女性政策研究院の Visiting Scholar として当該研究院の研究プロジェクトに対する諮問、研究交流、国際フォーラムの基調講演を行った。

**Devin K. Joshi (Singapore Management University 准教授)**

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

コンラート・アデナウアー財団 (ドイツの政治財団 (シンクタンク)、現理事はメルケル元首相) のシンガポールオフィスが支援する共同研究プロジェクト「Substantive Representation of Women Parliamentarians and Gender Equality in Asia: A Comparative Study」の研究代表者。申琪榮は共同研究者として当プロジェクトに参加した。研究成果は書籍 *Substantive Representation of Women in Asian Parliaments* として 2022 年 8 月に Routledge 社から出版される (本報告書 84 頁参照)。

**Lucetta Y. L. Kam (香港浸會大学准教授)**

【担当】大橋史恵 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

2022 年 2 月 24 日開催の IGS セミナー “Takarazuka as Gendered Landscapes: Transculturality/Translocality of Fandom and its Possibilities” (宝塚というランドスケープとジェンダー: ファンダムの文化的・地理的越境とその可能性) に講師として招聘した (本報告書 62 頁参照)。

**鐘仁耀 (華東師範大学教授)**

【担当】大橋史恵 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

科研費・国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B)) 「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」において共同研究を実施している (本報告書 88 頁参照)。

**李晶 (華東師範大学副教授)**

【担当】大橋史恵 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

科研費・国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B)) 「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」において共同研究を実施している (本報告書 88 頁参照)。

**張繼元 (華東師範大学講師)**

【担当】大橋史恵 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

科研費・国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B)) 「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」において共同研究を実施している (本報告書 88 頁参照)。

<アジア・オセアニア>

**王橋（中国社会科学院研究員）**

【担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

科研費・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」において共同研究を実施している（本報告書 88 頁参照）。

**Chia-Ling Wu（国立台湾大学教授）**

【担当】仙波由加里（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

Society for Social Studies of Science（4S）年次学会（カナダのトロント開催予定だったがオンラインに変更）で、Chia-Ling Wu 氏他、台湾研究者 1 名、日本人研究者 2 名と仙波の計 5 名でワークショップ「Assisted Reproductive Technology and Third Party Reproduction in East Asia: Japan and Taiwan」を企画し、2021 年 10 月 9 日に同ワークショップと一緒に登壇し、報告および討論した。

**Yu-Ling Huang（国立成功大学助理教授）**

【担当】仙波由加里（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

Society for Social Studies of Science（4S）年次学会（カナダのトロント開催予定だったがオンラインに変更）で、Yu-Ling Huang 氏他、台湾研究者 1 名、日本人研究者 2 名と仙波の計 5 名でワークショップ「Assisted Reproductive Technology and Third Party Reproduction in East Asia: Japan and Taiwan」を企画し、2021 年 10 月 9 日に同ワークショップと一緒に登壇し、報告および討論した。

**Ani Soetjipto（インドネシア大学准教授）、Avyanthi Azis（インドネシア大学講師）**

【担当】平野恵子（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

共同研究を行っているインドネシア大学政治社会学部国際関係研究ユニットのメンバー。Soetjipto 氏、Azis 氏が主宰する研究会「政治的ディアスポラ——アジア地域におけるインドネシア人移住労働者保護へ向けて」第 5 回研究会参加（オンライン形式、2021 年 6 月 25 日）。また Avyanthi 氏には、7/23 実施 IGS セミナー「ジェンダー・エスニシティ・技能実習制度」にディスカッサントして登壇いただいた（本報告書 47 頁参照）。

**Deborah Dempsey（スウィンバーン工科大学准教授）**

【担当】仙波由加里（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

Deborah Dempsey 准教授と、ラ・トローブ大学の Fiona Kelly 教授が編著者となり、2022 年 Cambridge University Press から出版予定の *Donor-linked families in the digital age: Relatedness and regulation* という書籍の中の 1 章“Challenges to donor anonymity in Japan”を分担執筆しているため、Dempsey 氏とは頻りにコンタクトをとった。

<アジア・オセアニア>

**Fiona Kelly (ラ・トロープ大学教授)**

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

Fiona Kelly 教授とスウィンバーン工科大学の Debora Dempsey 准教授が編著者となり、2022 年 Cambridge University Press から出版予定の *Donor-linked families in the digital age: Relatedness and regulation* という書籍の中の 1 章“Challenges to donor anonymity in Japan“を分担執筆しているため、Kelly 氏とコンタクトをとった。

**Ken Daniels (カンタベリー大学講師およびカウンセラー)**

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

2021 年 8 月 29 日に開催したオンライン国際フォーラム「出自を知ることがなぜ重要なのか—提供精子で生まれた人たちの経験と思い」にディスカッサントとして登壇してもらった。(本報告書 49 頁参照)

<ヨーロッパ>

**Elizabeth Evans (ロンドン大学教授)**

【担当】 申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

2021年8月からイギリスの学術雑誌 *Politics* の編集委員として共同編集長の Evans 教授と交流。

**Rainbow Murray (ロンドン大学クイーン・メアリー校教授)**

【担当】 申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

Rainbow Murray, Vibeke Wang, Ragnhild Louise Muriaas 教授らが *International Political Science Review* の特集「Gender and Financial Cost of Elected Office Worldwide」を共同企画したことをきっかけに、2019年からワークショップや論文執筆の過程で研究交流を行なっている。

**Vibeke Wang (クリスティアン・ミケルセン研究所シニア・リサーチャー)**

【担当】 申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

2013年以来研究交流。特に *International Political Science Review* の特集「Gender and Financial Cost of Elected Office Worldwide」を共同企画したことをきっかけに、2019年からワークショップや論文執筆の過程で研究交流を深めている。

**Ragnhild Louise Muriaas (ベルゲン大学教授)**

【担当】 申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

2013年以来研究交流。特に *International Political Science Review* の特集「Gender and Financial Cost of Elected Office Worldwide」を共同企画したことをきっかけに、2019年からワークショップや論文執筆の過程で研究交流を深めている。

**Guro Korsners Kristensen (ノルウェー科学技術大学教授)**

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

2019年度から始動しているノルウェー科学技術大学とIGSの二国間共同研究 (INTPART プロジェクト) の一環として、Kristensen 氏とは日本とノルウェーのファミリープランニングと出生率に関連する比較研究をすすめ、研究の成果として、二国間共同研究の成果物となる書籍 *Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway: Same But Different ?* の中の Chapter 11 “A matter of gender (in)quality? Public discourse on declining fertility rate in Japan and Norway” (pp. 173-190) を共同執筆し、2021年11月にRoutledgeより出版された。(本報告書91~94頁参照)

<ヨーロッパ>

**Merete Lie (ノルウェー科学技術大学教授)**

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

2019 年度から始動しているノルウェー科学技術大学と IGS の二国間共同研究 (INTPART プロジェクト) の一環として、Lie 氏とは日本とノルウェーの生殖医療とジェンダー関連する比較研究をすすめ、研究の成果として、二国間共同研究の成果物となる書籍 *Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway: Same But Different?* 中の Chapter 12 “Assisted reproduction with donated eggs and sperm: A comparison of regulations on assisted reproduction in Norway and Japan” (pp. 191-205) を共同執筆し、2021 年 11 月に Routledge より出版された。(本報告書 91~94 頁参照)

**Stine W. Adrian (オールボー大学准教授)**

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

2021 年 7 月 2 日に IGS 国際オンラインセミナー「商業的精子バンクに関する問題—倫理・ジェンダー・社会的側面から」に講師として招聘し、「精子提供のしたたかな実践—倫理の国境」と題した報告のあと、商業的精子バンクの是非等について討論した。(本報告書 41 頁参照)

また、2021 年 Adrian 准教授が研究代表としてデンマーク教育研究庁に申請した国際共同研究プロジェクト *Reconceiving Donor Conception in Denmark and Japan* が採択され、仙波もプロジェクトメンバーとして参加し、デンマークと日本の研究者 8 名で共同研究を行う (本報告書 87 頁参照)。2022 年 3 月より本格的にプロジェクトが始動するが、準備段階の打ち合わせ等をオンライン等で行った。

**Kirsten MacLeod (エディンバラ・ネピア大学准教授)**

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

2021 年 7 月 16 日に IGS 国際オンラインセミナー「生理の貧困」に講師として招聘し、「生理の貧困をテーマにしたドキュメンタリーフィルム“Bleeding Free”から」と題した報告のあと、2 人目の講師、長島美紀氏とともに日英の生理の貧困に関連する問題について討論した (本報告書 45 頁参照)。また日本の他研究機関や大学関係者からドキュメンタリーフィルムに日本語字幕を挿入してほしいという要望があり、マックロード准教授とフィルム製作者らの許可を得て、彼らと連絡を取りながらドキュメンタリーフィルムに日本語字幕を入れる作業をすすめている。2022 年 3 月までには日本語字幕付きのフィルムを完成させ、要望のあるところは無料で視聴できるようにする予定。

<北米>

**Melissa Deckman (ワシントンカレッジ教授)**

【担当】 申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

第 10 回 JAWS (日本開催、オンライン) にてパネリスト担当。(本報告書 98 頁参照)。

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

**韓国女性政策研究院**

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

2021年9月1日～30日まで Visiting Scholar として招聘を受ける。同院開催の国際フォーラムにキーノートスピーカーとして登壇したほか、研究プロジェクトに関する諮問など、各種の研究プロジェクトに参加した。

**韓国ジェンダー政治研究所**

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

当研究所理事を務める。2016年～2018年に韓国研究財団から助成金を受託し、共同研究を実施。研究課題は「議会内政治的代表的性の性差に関する公式・非公式的的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」（本報告書 85 頁参照）。

**ソウル大学日本研究所**

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

学術雑誌『日本批評』海外編集委員、ならびに、共同研究プロジェクト『思想と文学』共同研究員を務める。

**ソウル大学国際問題研究所**

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

Social Science Korea 「East Asian International Relations Theory」共同研究員。東アジアの国際関係理論におけるフェミニスト国際政治、日本研究を担当。研究グループで共著『主権と比較地域秩序』を出版（韓国語、2020年）

**コンラート・アデナウアー財団シンガポールオフィス**

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

コンラート・アデナウアー財団のシンガポールオフィスが支援する共同研究プロジェクト「Substantive Representation of Women Parliamentarians and Gender Equality in Asia: A Comparative Study」に共同研究者として参加した。研究成果は書籍 Substantive Representation of Women in Asian Parliaments として 2022年8月に Routledge 社から出版される（本報告書 84 頁参照）。

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

西江大学社会科学研究所

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

『社会科学研究』編集委員

釜山大学女性学研究所

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

『女性学研究』編集委員

香港浸會大学社会科学院・文学院

【担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

担当教員が社会科学院・文学院の共同プログラムであるジェンダー研究専修課程の所属教員らとのあいだで研究交流を実施している。

アジア工科大学院大学（AIT）環境資源開発研究科「ジェンダーと開発」専攻

【担当】日下部京子（AIT 教授）、申琪榮（IGS 教授）、平野恵子（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

本学ジェンダー社会科学専攻院生の AIT 派遣、AIT 院生の日本でのフィールドワーク受入による交換研修プログラム「AIT ワークショップ」は、新型コロナウイルス感染症拡大のため今年度は実施できなかったが、20 年におよぶ交流の内容を 20 周年記念報告書にまとめて刊行した（本報告書 89～90 頁参照）。

インドネシア大学戦略的国際研究大学院ジェンダー研究センター

【担当】平野恵子（IGS 特任講師）Kristi Poerwandari（インドネシア大学教員、センター員）

【共同研究・研究交流の概要】

2008 年以降、定期的に研究交流を実施している。2021 年度も継続して、Kristi Poerwandari 氏（インドネシア大学教員）との共同研究「日本、インドネシアにおける母—成人娘間の愛着、コンフリクト、ジェンダー構築」を推進し、比較調査を行った。

サティヤ・ワチャナ・キリスト教大学 インドネシア女性・ジェンダー・子供学会

【担当】平野恵子（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

当学会が刊行する学術雑誌 *Salasika* の海外査読者を務める。 <http://salasika.org/index.php/SJ/reviewers>

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター

【担当】石井クンツ昌子（お茶の水女子大学理事・副学長／グローバル女性リーダー育成研究機構長）、戸谷陽子（IGS 所長）、小玉亮子（IGS 研究員）、仙波由加里（IGS 特任講師）、吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー／お茶の水女子大学リエゾン・URA センターリサーチ・アドミニストレーター）、佐野潤子（IGS 研究協力員）ほか

【共同研究・研究交流の概要】

2017 年 4 月の NTNU 研究者本学来訪及び国際シンポジウム登壇を起点に研究交流始動。ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 INTPART による共同プロジェクト（2019～2022 年度）では、共同研究、研究者および大学院生の相互派遣、国際シンポジウム・セミナー・ワークショップ開催などの事業を展開し、2021 年 11 月には共同研究の成果書籍『Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway: Same but Different?』を Routledge 社から刊行した。また、INTPART プロジェクトをさらに発展させる目的で立ち上げられた新規の教育交流プロジェクト（DIKU）が、ノルウェーの高等教育の国際連携推進の助成金を獲得し、2021～2025 年度に学部生、院生らの交換研修事業が実施される（本報告書 86 頁、91～94 頁参照）。

オールボー大学 文化・学習学科

【担当】仙波由加里（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

2021 年オールボー大学の Stine Adrian 准教授が研究代表としてデンマーク教育研究庁に申請した国際共同研究プロジェクト Reconciving Donor Conception in Denmark and Japan が採択され、2022 年 3 月より始動する。主にデンマークと日本の配偶子提供に関して共同研究を進める。研究メンバーは、Adrian 教授の他、Janne Rothmar Herrmann（コペンハーゲン大学教授）、Tine Ravn,（オーフス大学准教授）、柘植あづみ（明治学院大学教授）、白井千晶（静岡大学教授）、仙波由加里（お茶の水女子大学ジェンダー研究所特任講師）、小門穂（神戸薬科大学准教授）、由井秀樹（山梨大学特任助教）である（本報告書 87 頁参照）。

【国内外関連研究会】

- 政治代表におけるジェンダーと多様性研究会（Women and Diversity in East asian political Representation (Wonder)）（申）
- 日本政治学会「ジェンダーと政治」研究会（申）
- 日本政治学会 年報政治学「コロナとジェンダー特集」研究会（申）
- 国際移動とジェンダー研究会（大橋・平野）
- 経済理論学会分野別分科会・ジェンダー（大橋）
- 国立精神・神経医療研究センター臨床研究支援部研究プロジェクト「筋ジストロフィーの発症前・早期診断および早期治療における倫理的課題の検討」研究会（仙波）
- 国際ジェンダー学会「開発とジェンダー」研究会（平野）
- 国内の女性学・ジェンダー研究センターとのネットワーク  
ジェンダー関連学協会コンソーシアムへの参加 ほか

## 2) 国際共同研究プロジェクト

ジェンダー研究所所属メンバーは、各国の研究者たちと国際共同研究プロジェクトを推進している。

プロジェクトタイトル	
<b>Substantive Representation of Women Parliamentarians and Gender Equality in Asia: A Comparative Study</b>	
メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 Devin K. Joshi	Singapore Management University
【研究分担者】	
申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
衛藤幹子	法政大学
Chang-Ling Huang	国立台湾大学
Ella S. Prihatini	Universitas Bina Nusantara
Ummu Atiyah Ahmad Zakuan	Universiti Utara Malaysia
Jean Encinas-Franco	University of the Philippines, Diliman
Sara Niner	Monash University
Therese Thi Phuong Tam Nguyen	Universidade Nacional Timor Lorosa'e
Syeda Lasna Kabir	University of Dhaka
Aashiyana Adhikari	Center for South Asian Studies
Ruwanthi Jayasekara	Institute of National Security Studies
研究プロジェクト概要	
<p>コンラート・アデナウアー財団（ドイツの政治財団（シンクタンク）、現理事はメルケル元首相）のシンガポールオフィスが支援する国際共同研究プロジェクト。バングラデシュ、インドネシア、日本、マレーシア、ネパール、フィリピン、韓国、スリランカ、台湾、東ティモールなど、アジア各国の国会における女性の代表性を調査・分析する。研究成果は書籍 <i>Substantive Representation of Women in Asian Parliaments</i> として 2022 年 8 月に Routledge 社から出版される（本報告書 23 頁参照）。</p>	

プロジェクトタイトル

## 東アジアにおけるジェンダーと政治

メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
【研究分担者】 Ah-ran Hwang	韓国釜山大学
Jinock Lee	韓国ジェンダー政治研究所
Soo-hyun Kwon	韓国ジェンダー政治研究所
三浦まり	上智大学
Jackie Steele	名古屋大学
Chang-ling Huang	国立台湾大学
Wan-ying Yang	台湾国立政治大学

研究プロジェクト概要

東アジア地域はその経済発展の成果により国際的に注目されているが、政治の民主化の道筋は一様ではない。本研究プロジェクトでは、日本、韓国、台湾の民主主義の有り様と政治代表性の関係について、ジェンダー視点に立脚した国際共同研究により比較分析する。議員を対象としたアンケート調査、政党、議員、市民社会関係者へのインタビューや現地でのフィールドワークを実施するほか、定期的な国際シンポジウムや研究会を開き、研究交流を促進する。東アジア地域において、政治代表性の男性優位性が続くメカニズムを明らかにし、政治制度におけるジェンダー公平性・多様性を実現させる政策も検討する。2019年度に成果をまとめ国内外で成果発表を行った。また日本の国会議員を対象とする2度目のアンケート調査も実施した。2021年は海外の学術雑誌に投稿のために論文執筆に取り組んだ。

プロジェクトタイトル

## 議会内政治的代表性の性差に関する公式・非公式的制度要因分析 韓国・日本・台湾比較分析

メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 Ah-ran Hwang	韓国釜山大学
【研究分担者】 申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Jinock Lee	韓国ジェンダー政治研究所
Soo-hyun Kwon	韓国ジェンダー政治研究所

研究プロジェクト概要

2016年度から韓国研究財団から助成金を受託し共同研究を実施。研究課題は「議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的の制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」。ジェンダー研究所の「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究プロジェクトの韓国調査を実施。2019年度は、成果をまとめつつ国内外で成果発表に力を入れた。2021年度は引き続き英語論文を執筆して政治資金に関する制度がどのように女性の政治参画に影響を与えるのかを分析した論文を投稿して掲載が決定された。

プロジェクトタイトル	
<b>Politics &amp; Gender Critical Perspectives 「#MeToo in East Asia」</b>	
メンバー	メンバー所属研究機関
<b>【共同責任編集者】</b>	
申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Chang-Ling Huang	国立台湾大学
Mari Miura	上智大学
Ruby Y.S. Lai	嶺南大学
Chao-ju Chen	台湾法律学院
Jing Xiong	活動家
研究プロジェクト概要	
<p><i>Politics &amp; Gender</i> (アメリカ政治学会学会誌) の <i>Critical Perspectives</i> セッションに「#MeToo in East Asia」特集を企画し、台湾、香港、中国の研究者らと日本を含む東アジア 5 カ国における#MeToo 運動に関する事例研究を紹介 (2021 年 9 月発行)。</p>	

プロジェクトタイトル	
<b>Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)</b>	
メンバー	メンバー所属研究機関
<b>【研究代表者】</b> 石井クンツ昌子	お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構
Guro Kristensen	ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター
<b>【研究分担者】</b> 戸谷陽子	お茶の水女子大学ジェンダー研究所 / 基幹研究院人文科学系
小玉亮子	お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系 / ジェンダー研究所
仙波由加里	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
吉原公美	お茶の水女子大学ジェンダー研究所 / リエゾン・URA センター
佐野潤子	慶應義塾大学ファイナンシャル・ジェロントロジー研究センター
松田デレク	お茶の水女子大学国際教育センター
Priscilla Ringrose	ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター
Siri Øyslebø Sørensen	ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター
Jennifer Branlat	ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター
研究プロジェクト概要	
<p>ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 (INTPART) による、2019~2021 年度の 3 年間に渡る国際共同プロジェクト。お茶の水女子大学ジェンダー研究所とノルウェー科学技術大学ジェンダー研究センターの所属員が参加。家族、教育とジェンダー、生殖医療などの領域で、ノルウェーと日本の国際比較研究に取り組むほか、互いの大学に滞在しての在外研修や、修士・博士院生の共同指導、ワークショップ・セミナーの開催といった活動を進める。共同研究の成果を Routledge 社から刊行。新型コロナウイルス感染症の影響により在外研修の実施が滞っていることから、事業終了が 1 年延期され、2022 年度までとなった (本報告書 22 頁、91~94 頁参照)。</p>	

プロジェクトタイトル

## Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan

メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 小林誠	お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所／基幹研究院人間科学系
Guro Kristensen	ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター
【研究分担者】 戸谷陽子	お茶の水女子大学ジェンダー研究所／基幹研究院人文科学系
石井クンツ昌子	お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構
松田デレク	お茶の水女子大学国際教育センター
岡村利恵	お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所
吉原公美	お茶の水女子大学ジェンダー研究所／リエゾン・URA センター
Priscilla Ringrose	ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター
Siri Øyslebø Sørensen	ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター
Jennifer Branlat	ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター

研究プロジェクト概要

ノルウェー高等教育国際連携推進機関 (Diku) の UTFORSK 助成金による、2021～2025 年度の 4 年間にわたる国際共同プロジェクト。お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構とノルウェー科学技術大学ジェンダー研究センターの所属員が参加。ジェンダーおよびダイバーシティ研究教育の質を高めるための新しい教育戦略を構築するプロジェクト。学生、若手研究者、教員が、パートナー大学での共同セミナーや共同指導を経験するなど、質が高く活力に満ちた、国際的な学びの環境を提供する。研究発表や産学連携への参与など若手研究者への機会提供や、論文の共同執筆など研究者同士の将来的なパートナーシップ発展につながる活動も行う。2021 年度はオンラインでのプロジェクト会議を実施し、プロジェクト計画についての話し合いを持った。相互訪問を含む本格的なプロジェクト事業は 2022 年度より実施 (本報告書 22 頁、93～94 頁参照)。

プロジェクトタイトル

## Reconceiving Donor Conception in Denmark and Japan

メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 Stine W. Adrian	Aalborg University
【研究分担者】 Tine Ravn	Aarhus University
Janne Rothmar Herrmann	University of Copenhagen
柘植あづみ	明治学院大学
白井千晶	静岡大学
小門穂	神戸薬科大学
由井秀樹	山梨大学
仙波由加里	お茶の水女子大学ジェンダー研究所

研究プロジェクト概要

本プロジェクトでは、デンマークの研究者 3 名と日本の研究者 5 名で、デンマークと日本のドナーの確保を含む精子バンクの状況を調査し、それらの調査を通して、安全性を確保するためのドナーのスクリーニングの在り方やドナーへの報酬の是非、ドナーの匿名性の問題等について検討し、その結果を政府や社会に向けて発信していく (本報告書 23 頁参照)。

## プロジェクトタイトル

## 人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー

メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】堀口正	大阪公立大学
【研究分担者】大橋史恵	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
江口伸吾	南山大学
南裕子	一橋大学
松木洋人	大阪公立大学
閻美芳	早稲田大学
劉楠	山梨英和大学
岩島史	同志社大学
李亜コウ	お茶の水女子大学基幹研究院リサーチフェロー
鐘仁耀	中国・華東師範大学
李晶	中国・華東師範大学
張継元	中国・華東師範大学
王橋	中国・社会科学院

## 研究プロジェクト概要

本研究は科研費・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））を受け、2021年12月から2025年3月にかけて実施される国際共同研究のプロジェクトである。人民公社期（1950年代～70年代）の中国農村における生活秩序の変化とジェンダーについて、資源配分のあり方に着目して、実証的に検討することを目的とする（本報告書21頁参照）。

中国農村では、1949年の「暫定憲法」や50年の「婚姻法」「土地改革法」の公布、また人民公社制度の展開により、封建的な慣習の廃絶が進められるとともに男女平等の制度的基盤が構築されていった。ところが、生産労働への参加の程度の男女差（労働点数に対する女性差別の存在も）、耕地や水利施設などの共有資源へのアクセスに女性と男性とでどの程度違いがあったのかなど、不明な点が多い。さらに公共食堂や託児所の現実的な利用状況、家事やケアなど再生産労働の性別分業についても、研究の空白部分になっている。

以上のことから、①各地農村における人民公社期の資源配分のあり方を解明すること、②世帯内外における生産・再生産労働の労働力配置の実態を考察し、「村」や「家」の権力関係や規範にどのような揺らぎがあったのかを解明すること、③さらに①②と関係する問題として、国家レベルの指針や計画生育が基層社会における生活秩序に与えた影響を解明する。

2021年度は11月21日にZoomで研究会を実施した。

### 3) AIT ワークショップ

#### ジェンダー研究所が運営主体を務める国際研究交流プロジェクト

##### タイのアジア工科大学院大学（AIT）とジェンダー研究所による若手研究者国際交流プログラム

AIT ワークショップは、ジェンダー研究所と、タイのアジア工科大学院大学（Asian Institute of Technology (AIT)）とにより実施されている、国際研究交流プログラムである。

2001 年に、ジェンダー研究センター（現ジェンダー研究所）所属教員と、AIT「ジェンダーと開発」専攻の日下部京子教授らの尽力によって始められ、2004 年には、本学と AIT との間で大学間学術交流協定が結ばれた。以降、協定に基づき、日本ではジェンダー研究所が、タイでは AIT・環境資源開発研究科が運営主体となり、AIT で実施されるワークショップへの本学院生派遣と、AIT 大学院生の日本国内での研修受入による、国際研究交流事業をほぼ毎年実施している。お茶大ではもっとも歴史が長い国際研究交流プログラムである。

2009 年度からは、AIT ワークショップ・プログラムは、ジェンダー研究センターが従来提供してきた大学院博士前期課程科目「国際社会ジェンダー論演習」として単位認定が始まった。2013 年度はサマープログラムを活用して AIT 院生の日本国内研修を実施し、2014 年度からは大学院博士前期課程科目「フィールドワーク方法論」を国内事前研修として取り入れた。

##### AIT ワークショップ過年度実績

実施年度	研修テーマ
2001	Gender and Development
2002	Gender, Work and Globalization
2003	Women, Globalization and Home-based Work
2004	Female Migrant Workers' Rights in Thailand
2005	Gender and Development in Thailand: Labor rights and violence against women
2006	〔実施せず〕
2007	Gender, Rights and Empowerment
2008	Thailand-Japan Interactive Research Actions by Using Gender Perspectives
2009	Gender and Policy: Through Thailand-Japan Interactive Analysis
2010	Gender and Social Change: Comparative Analysis of Thailand and Japan
2011	Gender and Disaster 〔特別プログラム：本学でのシンポジウム開催〕
2012	Sexuality
2013	Global Justice, Women's Health and Prostitution
2014	1) Sexuality, 2) Gender and Poverty, 3) Education and Empowerment
2015	Labor, Sexuality and Empowerment
2016	Labor and Association from Gender Perspective
2017	Sexual minority and migrant workers from gender perspectives
2018	Power and Sexuality from Gender perspectives
2019	Gender and Empowerment in Urban Space

## 大学院講義「国際社会ジェンダー論」での学習とグローバルなフィールドでの実践・交流

本ワークショップの日本からの参加者は、春学期に大学院科目「フィールドワーク方法論」を履修し、開発とジェンダーにかかわるグローバルな課題群の分析方法や視座、海外におけるフィールド調査方法を学ぶ。その後にアジア諸国の将来を担う多彩な人材が集う AIT での研修に参加し、フィールドワークに基づく研究の基礎を実践的に学習する。また各国の院生たちとワークショップで研究交流することで、彼らの熱意ある議論スタイルや問題関心の多様さから研究者としての刺激を得る。帰国してからはジェンダー研究所所属教員が担当する「国際社会ジェンダー論」（本報告書 102 頁参照）にて、タイで得た知見を共有し、国際社会におけるジェンダーの問題の理論的検討を通じて、さらに理解を深める。また参加者は毎年、報告書をまとめている。

ジェンダー研究所は、このような大学院生の国際研究交流プログラムを提供し、大学院生の教育キャリアを補強することで、次世代のジェンダー研究者、あるいは、NGO や国際機関で国際協力の仕事につく人材の養成に持続的に取り組んでいる。

### ■2021 年度 AIT ワークショップについて

新型コロナウイルス感染症拡大のため今年度も実施は見送られたものの、大学院講義「国際社会ジェンダー論」（本報告書 102 頁参照）の一環として「ジェンダーと開発」分野における実践専門家を招き、実践における理論の在り方を学ぶ機会を設けた。具体的には、IGS セミナー（学内限定）「教育とジェンダー、世界と日本：2030 年にむけて今日の課題」（本報告書 58 頁参照）と、IGS セミナー（一般公開）「国際協力とジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ」（本報告書 60 頁参照）をジェンダー研究所所属教員が開催した。

また昨年度（2020 年度）開催した AIT ワークショップをめぐる国際シンポジウムを基に、本交流事業 20 周年を記念する報告書を刊行した。本報告書は、2001 年度から 20 年度までに実施したワークショップの記録である。但し、2020 年度は新型コロナウイルス感染症拡大により渡航不可であったことから、その代替として実施した「お茶大—AIT20 周年記念シンポジウム 開発・教育・ジェンダー」における各登壇者の報告概要を第一部として掲載している。第二部には、各年度の日程、参加者氏名およびワークショップ時の写真を、各資料や当時の参加者から可能な限り収集し収めた。

本ワークショップは年度を経るごとに単位認定される大学院教育プログラムとして整備されていくが、それを支えた教員、コーディネーター（博士後期課程学生）など関係者一覧も巻末に掲載している。

「ジェンダーと開発（Gender and Development: GAD）」にかかわる課題群の分析方法や視座、また海外におけるフィールドワークの基礎を学ぶことが目的の本プログラムによって、参加者は国際協力や開発援助、市民運動に直に触れ、フェミニスト視点から議論する機会を得ることができたといえるだろう。IGS が長期継続的に取り組んできた国際的連携の下での本教育プロジェクトによって、20 年間で多くの研究交流が生まれたことを示す報告書となった。



## 4) INTPART プロジェクト

### 国際比較研究とその最新成果を研究教育に応用する国際共同事業

#### ■概要

ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 International Partnerships for Excellent Education, Research and Innovation (INTPART) による、Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ\_BREGED) プロジェクト。ノルウェー科学技術大学 (NTNU) のジェンダー研究センターと IGS とで、2019～2021 年度の 3 年間にわたって、教員・研究者・院生の相互派遣および、ノルウェーと日本のジェンダー平等についての比較研究、セミナーやワークショップの開催などを進め、共同研究の成果を書籍として刊行する。

#### ■プロジェクト構成 (相互に連携する 6 つのワークパッケージ (WP))

WP1 プロジェクト管理：NTNU とお茶大の代表が高水準の生産性と創造性を担保。

WP2 在外研修：両大学の院生、教員、研究者がパートナー大学に滞在して教育交流や在外研究を行う。

WP3 院生共同指導：両大学の教員が、大学院生の研究プロジェクトの共同指導を行う。

WP4 合同カリキュラム開発と交換教育：質の高い研究に基づく国際的な教育プログラムを開発。

WP5 共同出版と年次ワークショップの開催：アンソロジー刊行プロジェクト

WP6 広報・成果普及とセミナー開催：公開イベントの開催などプロジェクト成果の発信

#### ■2021 年度プロジェクトメンバー

##### 《NTNU》

グロ・コースニス・クリステンセン (学際的文化研究学部長・教授：プロジェクトマネージャー)

ジェニファー・ブロンラ (ポストドク研究員：プロジェクトコーディネーター)

プリシラ・リングローズ (教授)

シリ・エイスレボ・ソレンセン (ジェンダー研究センター長・教授)

##### 《IGS》

石井クンツ昌子 (お茶の水女子大学理事・副学長：本学側代表)

戸谷陽子 (IGS 所長／基幹研究院人文科学系教授)

小玉亮子 (IGS 研究員／基幹研究院人間科学系教授)

仙波由加里 (IGS 特任講師)

吉原公美 (IGS 特任リサーチフェロー／リサーチ・アドミニストレーター：事務局)

松田デレク (国際教育センター講師)

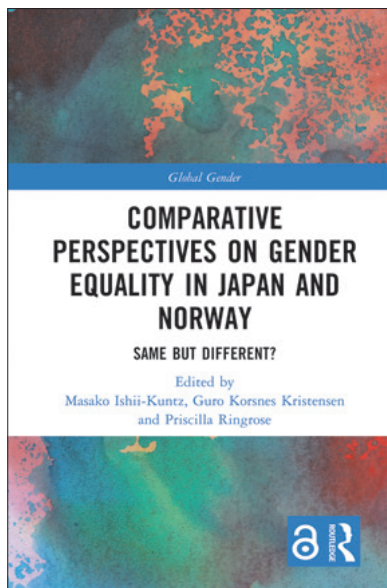
佐野潤子 (IGS 研究協力員／慶應義塾大学ファイナンシャル・ジェロントロジー研究センター特任講師)

## ■2021 年度事業内容

新型コロナウイルス感染症まん延防止対策の影響により、研究者および大学院生の相互派遣が実施できずにいるが、そうした中でも、研究活動は活発に進められ、11月末に国際比較研究の成果書籍が海外の出版社から刊行された。また、本プロジェクトが進めてきたジェンダー研究教育交流をさらに発展させる目的で立ち上げられた新規の教育交流プロジェクト（DIKU）が、ノルウェーの高等教育の国際連携推進の助成金を獲得した。

### ①書籍刊行プロジェクト

ノルウェーと日本の研究者による共同研究チームを編成して進めてきた国際比較研究の成果書籍『Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway: Same but Different?』が11月末にRoutledge社から刊行された。プロジェクトメンバー以外の研究者も参加し、広範なテーマの論考をまとめたアンソロジーとなった。ノルウェーと日本のジェンダー状況を様々な視点で比較分析した論文14章が、家族、教育、メディアなどのテーマ別に分類されている。ハードカバー書籍の発売と同時にオープンアクセスの電子書籍も刊行されており、出版社のサイトから全ページ無料でダウンロードして読むことができる。



## Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway: Same but Different?

石井クンツ昌子、グロ・コースニス・クリステンセン、プリシラ・リングローズ（編著）

【初版刊行年】 2021 年

【e-Book 刊行日】 2021 年 11 月 29 日

【出版社】 Routledge

【DOI】 <https://doi.org/10.4324/9781003185222>

【ページ数】 252 ページ

【オープンアクセス資金提供】 Knowledge Unlatched GmbH

### 《目次》

1. Introduction: Comparative perspectives on gender in Japan and Norway  
*Masako Ishii-Kuntz, Guro Korsnes Kristensen and Priscilla Ringrose*

### PART I: Family and home

2. Gender and home in Japan and Norway: Considering the past and contemplating the future  
*Guro Korsnes Kristensen, Priscilla Ringrose, and Masako Ishii-Kuntz*
3. Caring masculinity: Fathers' childcare in Japan and Norway  
*Masako Ishii-Kuntz*

### PART II: Education

4. Education and gender in Japan and Norway from historical perspective  
*Ryoko Kodama*

5. Creating more equal partnerships: Home Economics education and gender equality in Japan and Norway  
*Jennifer Branlat and Junko Sano*
6. Teaching with feminist values: A dialogical narrative analysis of gender studies educator narratives  
*Jennifer Branlat*
7. Making it in academia: A study of career narratives of men and women professors in Norway and Japan  
*Vivian Anette Lagesen, Guro Korsnes Kristensen, Siri Øyslebø Sørensen, and Derek Matsuda*

#### PART III: Media

8. Masculinity in contemporary Viking and Samurai comedies: 'It's not really me, that fear-based leadership style stuff'  
*Jennifer Branlat and Priscilla Ringrose*
9. Work-life balance and equality observed through advertising during the COVID-19 pandemic in Japan and Norway  
*Chihiro Wada and Roger A. Søraa*

#### PART IV: Sexuality and reproduction

10. The struggle to belong: Trans and gender-diverse experiences in Japan and Norway  
*france rose hartline and Keiichiro Ishimaru*
11. A matter of gender (in)equality? Public discourses on declining fertility in Japan and Norway  
*Guro Korsnes Kristensen and Yukari Semba*
12. Assisted reproduction with donated eggs and sperm: A comparison of regulations on assisted reproduction in Norway and Japan  
*Merete Lie and Yukari Semba*

#### PART V: Dialogue

13. Becoming a feminist academic in Japan and Norway: A dialogue with Professors Masako Ishii-Kuntz and Agnes Bolsø  
*Jennifer Branlat, Agnes Bolsø, and Masako Ishii-Kuntz*

#### Conclusions

14. Conclusion: Comparative perspectives on gender equality in Japan and Norway: Reflections and lesson learnt  
*Priscilla Ringrose, Masako Ishii-Kuntz, and Guro Korsnes Kristensen*

#### ②新規プロジェクトの立ち上げ

これまでに IGS と NTNU ジェンダー研究センターで進めてきた研究教育交流をさらに発展させる目的で、新たな教育交流プロジェクトが立ち上げられ、Norwegian Agency for International Cooperation and Quality Enhancement in Higher Education (DIKU) の UTFORSK プログラム助成金に採択された。INPART は大学院生以上の交換派遣が中心であるが、この新規プロジェクトは学部生も対象であり、また、パートナー大学への滞在期間も 3 か月以上が原則になる。新型コロナウイルス感染症の影響で、派遣は開始できていないが、早期に国際移動の自由が回復されることを願いつつ、両大学では本プロジェクトによる教育プログラムの検討が進められている。以下は、助成金の申請書に記載した事業内容の抜粋。

【プロジェクトタイトル】 Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan

【プロジェクト期間】 2021年8月1日～2025年7月31日

【事業目的】 現行の INTPART プロジェクトで築いたパートナーシップと研究成果を基礎に、ジェンダーおよびダイバーシティ研究教育の質を高めるための新しい教育戦略を構築する。学生をはじめ、若手研究者、教員に至るすべてのレベルで、質が高く活力に満ちた、国際的な学びの環境を提供する。SDGs のジェンダー・ダイバーシティ関連の目標達成に資する成果を目指す。

【組織とメンバー】

	NTNU	本学
部局	学際的文化研究学部(ジェンダー研究センターの所属組織)	グローバルリーダーシップ研究所 (IGL) ジェンダー研究所
部局代表	Margarethe Aune (学部長)	小林誠 (IGL 所長)
コーディネーター	グロ・クリステンセン	戸谷陽子
メンバー	シリ・ソレンセン プリシラ・リングローズ ジェニファー・ブロンラ	石井クンツ昌子 松田デレク 岡村利恵 (IGL 特任講師)

【主な事業内容】

- (1) 学部生、院生、教員のパートナー大学での研修 (3 カ月程度)
  - ・ NTNU→本学：学部生/M 院生 8 名、D 院生 2 名、教員 2 名 (2022 年と 2024 年に実施予定)  
(サマープログラム参加を含む予定)
  - ・ 本学→NTNU：学部生/M 院生 8 名、D 院生 2 名、教員 2 名 (2023 年と 2025 年に実施予定)  
(NTNU が実施する英語による講義「Gender and Norwegian Culture」などへの出席が可能)
- (2) 共同セミナーの実施と院生の共同指導
- (3) 若手研究者への機会提供 (研究発表や産学連携)
- (4) 成果発信、論文の共同執筆、将来的なパートナーシップ発展につながる活動

## ■2021 年度事業成果

国際移動の制限が続く中ではあったが、編者そして執筆者らの努力により、共同研究の成果書籍を遅延なく刊行することができた。また、電子書籍版がオープンアクセスとなったことで、研究成果の広範な頒布が可能になり、また今後の教育連携のプログラムへの活用が容易になった。2020 年度以降、相互派遣が実施できていないことから、ノルウェーリサーチカウンシルに 1 年間のプロジェクト延長を申請し承認され、INTPART プロジェクトは 2022 年度も継続する運びとなった。また、これまでに本学と NTNU が積み重ねてきた研究教育連携の実績が評価され、新規プロジェクトの助成金採択が決定した。パンデミックの長期化という困難がある中で、このような成果を上げることができたことは、喜ばしいことである。相互派遣の再開を待ち望む日々が続いているが、パンデミック下で重ねられている研究教育現場での創意工夫を本プロジェクトにおいても活用し、事業活動の充実と発展に努める所存である。

## 5) JAWS

ジェンダー研究所は、次世代ジェンダー研究者を養成するための持続的な国際研究交流ネットワークの形成に取り組んできた。そのひとつが「AIT ワークショップ」(本報告書 89 頁参照)であり、もうひとつの代表的な活動が「日本—アメリカ女性政治学者シンポジウム」(Japan-America Women Political Scientists Symposium, JAWS)である。

JAWS は、政治学分野でジェンダー研究を遂行する日米の女性研究者らが、日本とアメリカで交互に集まって研究交流を行うユニークな研究ネットワークである。参加者は、互いの研究交流はもちろん、若手研究者に参加を促して国際的な視点を身につけてもらうと共に、政治学分野でマイノリティーである若手女性研究者にメンタリングを行う。ジェンダー研究所は JAWS の活動拠点として、日本が開催地となる際は、研究集会・国際シンポジウムを主催し、成果発信にも努めている。

### ■概要と歴史変遷

JAWS の歴史は 2000 年の夏に遡る。2000 年にアメリカン大学 (American University) のカレン・オコナー (Karen O'Connor) 教授が、同大学に「女性と政治研究所」(The Women and Politics Institute) を開設したことを記念して「女性と政治に関する比較政治学」ワークショップを主催したことがその始まりである。このワークショップに、アメリカ政治学会と日米友好基金 (The Japan-US Friendship Commission) の支援を得て日本から 5 名の研究者が招かれ、同じく招かれた 7 名のアメリカの研究者らと 3 日間にわたって研究交流が行われた。

当時、日本の政治学の分野では、女性政治学者がとりわけ少数であったのみならず、ジェンダー視点に基づいた研究は、政治学研究としてほとんど関心を持たれていなかった。これがさらに若手女性研究者を遠ざけ、「女性と政治」分野の研究が進まない原因となっていた。そんな中で始まったアメリカの研究者との交流は、日本の研究者にとって国際的な研究動向に触れることに加え、日本で女性研究者が政治学を研究するときにつつかる様々な壁について議論する場も提供した。女性研究者の地位向上や女性研究者が行っている研究への評価という問題は、アメリカの女性研究者らにとっても共通の課題であった。

JAWS を始めたアメリカの女性研究者、M・マーガレット・コンウェイ (M. Margaret Conway)、カレン・オコナー、マリアン・パリー (Marian Palley) は、そのような女性研究者の課題に取り組んできた「女性と政治」研究のパイオニアであった。彼女らは同分野の女性研究者を励ましてサポートするだけでなく、自ら質の高い論文を政治学ジャーナルに発表することで、「女性と政治」研究を正統性のある政治学の研究として位置付けることに貢献したのである。JAWS を通じての交流により、日本の研究者とアメリカの若手研究者たちはアメリカの第一世代女性研究者らの経験を共有し、大きな励ましを得ることができた。例えば、2000 年の第 1 回 JAWS ワークショップの参加者たちは、後にアメリカ政治学会の実行委員長 Rob Hauck の協力を得て学会誌『PS: Political Science & Politics』の 2001 年 6 月号に論文を掲載した。この掲載をきっかけに JAWS の日本参加者らは日本の政治学会でも注目されることになり、彼女らの研究も認められるようになったと回顧する。岩本美砂子 (三重大学)、大海篤子 (お茶の水女子大学) は福岡市で開催された 2006 年世界政治学会 (IPSA) の準備委員も務めた。

このように JAWS は日本の研究者たちに、アメリカの女性研究者との交流による研究やキャリアの発展、アメリカ政治学会での研究発表、長期にわたってのメンタリングの機会を与えてくれた。アメリカ

の研究者にとっても、日本で研究発表を行う機会、日本の女性研究者とのネットワーク形成、若手研究者のキャリア開発へと繋がった。歴代の JAWS に参加した日米の女性研究者らは、互いの社会の相違点を認識しつつ、それぞれの場で女性研究者が直面する課題に取り組み、国際的な視点で研究を進めていく貴重な経験を得たのである。

JAWS は 2000 年から現在に至るまで、日米友好基金等の支援を得て 9 回研究集会を実施した。その概要を簡単に以下に振り返る。

第 2 回：マリアン・パリー教授（デラウェア大学,University of Delaware）が 2001 年サンフランシスコで開かれたアメリカ政治学会で「Women in Japan and the US」をテーマに企画し、12 名が参加。

第 3 回：2002 年に日本で開催。アメリカから 3 名が参加した。三重大学、お茶の水女子大学のジェンダー研究センターで研究集会を開催した他、女性議員、地方議員、アクティビスト達に面会した。

第 4 回：2003 年、デラウェア大学とアメリカ政治学会（フィラデルフィア市）で開催され、新たに若手研究者が日本から 3 名、アメリカから 2 名加わった。この時の成果として、2004 年 1 月号の『PS: Political Science & Politics』に論文要約が掲載された。論文全文はアメリカ政治学会ウェブサイトの Special E-Symposium で公開された。

第 5 回：2007 年にジュリー・ドーラン（Julie Dolan）准教授（マカレスター・カレッジ,Macalester College）とアメリカ政治学会（APSA）の Bahram Rajaee の企画によって開かれた。APSA（シカゴ市）では「女性と外交」を題したパネルを構成した他、マカレスター・カレッジ（ミネソタ州セントポール市）で研究集会が開かれた。14 名の日米女性研究者が参加した。

第 6 回：2009 年、再び日本で開かれアメリカから 6 名の研究者が来日した。アメリカ大統領選挙に挑んだヒラリー・クリントンとサラ・ペイリンに関する研究、アメリカの少数政党における女性の役割、下院議員のスピーチ分析、医療政策と女性など最新の研究を報告した。日本の参加者も女性と地方議会、投票行動、女性議員のリクルートメント、女性国会議員に関する研究を発表した。お茶の水女子大学のジェンダー研究センターはドイツ日本研究所（German Institute for Japanese Studies）と共に東京の研究集会を主催した。アメリカの研究者らは東京都世田谷区の生活者ネットワークを訪問、さらに富山県で行われた母親大会でも研究発表し好評を得た。

第 7 回：2010 年に、メリッサ・デックマン（Melissa Deckman）准教授（ワシントン・カレッジ,Washington College）と APSA の Bahram Rajaee の企画によってアメリカで開催された。参加者は「Gender, Politics and Policy: Post-Elections」をテーマにワシントン・カレッジ（メリーランド州）とアメリカ政治学会（Washington DC）で研究報告を行った。2010 年の JAWS は日米から 19 名が参加し、それまでで最大規模となった。

## ■JAWS 第 8 回

第 8 回は時をおいて 2017 年に日本で再開された（しばらく開催されなかったのは資金上の問題と第一世代の高齢化による）。

JAWS の再開を兼ねてジェンダー研究所がアメリカからジュリー・ドーランとメリッサ・デックマン（マリアン・パリー教授も来日予定だったが、悪



第 8 回 JAWS、お茶の水女子大学での研究交流会



第 8 回 JAWS、東京都議会訪問

天候により断念した)を招聘し、国際シンポジウム「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?」を開催した。130 名を超える多くの聴衆が集まり大盛況だった。このほか、東京都議会訪問や、JAWS の新旧メンバー、ジェンダー研究所の研究者、お茶大の院生らとの研究交流も行った。

この時の成果は 2018 年刊行の『ジェンダー研究』21 号の特集「Gender and Political Leadership」に掲載された。

アメリカ政治学会における JAWS HP→<https://connect.apsanet.org/jaws/>

## ■JAWS 2018 年度成果

2018 年 JAWS (第 9 回) 「ジェンダーと民主主義」 “Gender and Democracy”

(8 月 28 日～31 日、マサチューセッツ州、ボストン)

2018 年、第 9 回 JAWS がアメリカ政治学会の協力を得てボストンで 4 日間開催された。ボストン市にあるサフォーク大学のローゼンバーグ東アジア研究所は、研究集会の場所とレセプションを提供してくれた。今年から第一世代の JAWS メンバーは引退した形となり、申瑛榮 (ジェンダー研究所)、メリッサ・デックマンが引き続きファシリテーターとして参加した以外は、全員新しいメンバーが参加した。

今回はリンダ・ハスヌマ (Linda Hasunuma) (ブリッジポート大学, University of Bridgeport) と三浦まり (上智大学) が加わり、アメリカ政治学会の国際交流担当の Andrew Stinson の協力も得て、アメリカ政治学会と日本政治学会から、若手女性研究者に参加を呼びかけた。最終的に日米からそれぞれ若手研究者を 6 名ずつ、計 12 名を選抜した。

テーマは「ジェンダーと民主主義」(Gender and Democracy) として、4 名のファシリテーターが初日にレクチャーをすることで始まった。12 名の参加者は研究セッションとアメリカ政治学会パネルで、女性運動、女性の政治参画、トランスナショナルな女性連帯、リーダーシップ、政治参加のジェンダーギャップなどについて研究発表を行った。そのほか、キャリア形成、メディアと研究発信、論文の出版などについて議論するセッションも設けた。女性の政治参加に関する大規模な研究を支援している「Barbara Lee Foundation」も訪問し財団の活動についてうかがった。(具体的なスケジュールは

<https://mk0apsaconnectbvy6p6.kinstacdn.com/wp-content/uploads/sites/22/2019/02/2018-JAWS-detailed-schedule.pdf>)

## ■JAWS 2019 年度成果

JAWS 2018 年の参加者らがアメリカ政治学会で発表した論文をさらに発展させ、アメリカ政治学会の学術雑誌「PS」に投稿した。その内 4 名が採択され掲載予定である。また、JAWS 2020 年 (日本) に向けて、アメリカ政治学会のコーディネーターと協力して資金申請に取り組んだ。

## ■JAWS 2020 年度成果

2020 年度は日本で開催される予定だったが、資金申請がうまく進まなかったのと、新型コロナウイルス（COVID-19）のパンデミックによって移動が制限され、日本政治学会で JAWS のパネルを組んでオンライン発表（9月26日土曜日 13:15~15:15）を行った。参加者と発表論文のタイトルは下記のとおりである。

### 2020 日本政治学会 JAWS パネル：Intersectional Perspectives of Crisis Politics

1. Melissa Deckman, Washington College （メリッサ・デックマン、ワシントン・カレッジ）

Gender, Age, and Intersectionality in the 2020 Presidential Race

2. 浅野幸子、減災と男女共同参画 研修推進センター・早稲田大学

Impact of COVID-19 on Japanese society: From Gender & Minority Perspective

3. 西田奈保子、福島大学

Gender issues in rebuilding the lives of disaster victims: surveys on post-disaster public housing areas in Fukushima prefecture

#### Chair

申琪榮、お茶の水女子大学 IGS

#### Discussants

武田宏子、名古屋大学

本山央子、お茶の水女子大学

## ■JAWS 2021 年度

今後の活動計画は未定。

## 6) 国内外招聘研究者一覧

### ■ 2021 年度 海外からの招聘研究者

#### 【アジア・オセアニア】

権金炫伶 (クォン・キム・ヒョニョン) (女性現実研究所・韓国)

IGS 国際シンポジウム「#MeToo の政治学：#MeToo が残したフェミニズムの課題を考える」(32 頁参照)  
ルイン (トランスジェンダー・クィア研究所・韓国)

IGS 国際シンポジウム「#MeToo の政治学：#MeToo が残したフェミニズムの課題を考える」(32 頁参照)  
趙成南 (チョ・ソンナム) (梨花女子大学校・韓国)

IGL/IGS 国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言」(38 頁参照)  
日下部京子 (アジア工科大学院大学・タイ)

IGL/IGS 国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言」(38 頁参照)  
コリーナ・リアントプトラ (インドネシア大学・インドネシア)

IGL/IGS 国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言」(38 頁参照)  
アヴィヤンティ・アジス (インドネシア大学・インドネシア)

IGS セミナー「ジェンダー、エスニシティ、技能実習制度」(47 頁参照)  
ケン・ダニエルズ (カンタベリー大学・ニュージーランド)

IGS 国際フォーラム「出自を知ることがなぜ重要なのか：提供精子で生まれた人たちの経験と思い」  
(49 頁参照)

ルセッタ Y・L・カム (香港浸會大学・香港)

IGS セミナー「宝塚というランドスケープとジェンダー：ファンダムの文化的・地理的越境とその可能性」(62 頁参照)

#### 【ヨーロッパ】

ロージー・キャンベル (キングス・カレッジ・ロンドン・英国)

IGL/IGS 国際シンポジウム「リーダーシップの地平：ジェンダー平等推進のための理論と実践」(35 頁参照)

グロ・クリステンセン (ノルウェー科学技術大学・ノルウェー)

IGL/IGS 国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言」(38 頁参照)  
カレン・シャイア (デュースブルグ・エッセン大学・独)

IGL/IGS 国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言」(38 頁参照)  
スティン・W・エイドリアン (オールボー大学・デンマーク)

IGS セミナー「商業的精子バンクに関する問題：倫理・ジェンダー・社会的側面から」(41 頁参照)  
カースティン・マックロード (エディンバラ・ネピア大学・英国)

IGS セミナー「生理の貧困」(45 頁参照)

## 【北米】

本田桂子 (コロンビア大学・米)

IGL/IGS 国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言」(38 頁参照)

ジャン・バーズレイ (ノースカロライナ大学チャペルヒル校・米)

IGL/IGS 国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言」(38 頁参照)

## ■ 2021 年度 国内招聘研究者

吉良智子 (日本女子大学) IGS シンポジウム「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」(29 頁参照)

中嶋泉 (大阪大学) IGS シンポジウム「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」(29 頁参照)

北原恵 (大阪大学) IGS シンポジウム「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」(29 頁参照)

香川檀 (武蔵大学) IGS シンポジウム「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」(29 頁参照)

菊地夏野 (名古屋市立大学) IGS 国際シンポジウム「#MeToo の政治学：#MeToo が残したフェミニズムの課題を考える」(32 頁参照)

大木直子 (椛山女学園大学) IGL/IGS 国際シンポジウム「リーダーシップの地平：ジェンダー平等推進のための理論と実践」(35 頁参照)

レティツィア・グアリーニ (国際基督教大学) IGS セミナー「日本文学における父娘関係：欲望・暴力・支配・抵抗」(43 頁参照)

長島美紀 (プラン・インターナショナル・ジャパン) IGS セミナー「生理の貧困」(45 頁参照)

巢内尚子 (ラバル大学大学院博士後期課程／東京学芸大学) IGS セミナー「ジェンダー、エスニシティ、技能実習制度」(47 頁参照)

ワオデ・ハニファー・イスティコマー (一橋大学大学院博士後期課程) IGS セミナー「ジェンダー、エスニシティ、技能実習制度」(47 頁参照)

足立加勇 (東京造形大学・立教大学) IGS セミナー「戦争と美少女：エンターテインメントとしての戦いの表象」(52 頁参照)

小ヶ谷千穂 (フェリス女学院大学) IGS セミナー「移住労働者の子どもたち」(54 頁参照)

高畑幸 (静岡県立大学) IGS セミナー「移住労働者の子どもたち」(54 頁参照)

由井秀樹 (山梨大学) IGS セミナー「不妊と男性のセクシュアリティ」(56 頁参照)

田中由美子 (城西国際大学) IGS セミナー「国際協力とジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ」(60 頁参照)

張瑋容 (同志社女子大学) IGS セミナー「宝塚というランドスケープとジェンダー：ファンダムの文化的・地理的越境とその可能性」(62 頁参照)

英美由紀 (藤女子大学) IGS セミナー「『ルッキズム』：女性美をめぐる理論と表象から」(64 頁参照)

# 6.

## 若手研究者の育成

専任・特任教員担当講義

2021 年度修士論文要旨

## ▶ 2021 年度 IGS 専任・特任教員担当講義

---

### 《人間文化創成科学研究科博士後期課程ジェンダー学際研究専攻》

#### 申琪榮（教授）

比較政治論（前期不定期）

比較政治論演習（後期不定期）

ジェンダー学際研究報告（基礎）（通年不定期）

ジェンダー学際研究報告（発展）（通年不定期）

ジェンダー学際研究論文指導（通年不定期）

#### 大橋史恵（准教授）

ジェンダー政治経済学（前期）

ジェンダー政治経済学演習（後期）

ジェンダー学際研究報告（基礎）（通年不定期）

### 《人間文化創成科学研究科博士前期課程ジェンダー社会科学専攻》

#### 申琪榮（教授）

フェミニズム理論の争点（前期）

国際社会ジェンダー論演習（前期）

ジェンダー立法過程論（後期）

特別研究（専攻必修）（通年不定期）

#### 大橋史恵（准教授）

ジェンダー基礎論（専攻必修）（前期）

ジェンダー社会経済学演習（後期）

特別研究（専攻必修）（通年不定期）

#### 平野恵子（特任講師）

国際社会ジェンダー論（後期不定期）

※（本報告書 89～90 頁「AIT ワークショップ」参照）

### 《学部》

#### 戸谷陽子（教授）

Summer Program in English I（前期集中）Gender Representation in Contemporary Japanese Culture

#### 申琪榮（教授）

ジェンダー8 政治・政策とジェンダー（前期）

#### 大橋史恵（准教授）

アジア社会とジェンダーII・文化変動論II（前期）

グローバル文化学総論（前期）

グローバル化と社会（後期）

グローバル文化学特論（後期）

卒業研究（通年不定期）

Summer Program in English I（前期集中）Gender, Sexuality and Migration in Japan

## ▶ 2021 年度大学院（人間文化創成科学研究科）

ジェンダー研究所はジェンダーの視点から学際的・国際的な研究を推進する次世代の研究者育成も行っている。IGS 所属教員の指導のもと、2021 年度は以下の院生が博士前期課程を修了した。

### 博士前期課程（ジェンダー社会科学専攻）修了者

【氏名】下川 自子

【指導教員】申 琪榮（IGS 教授）

【修論タイトル】配偶者暴力相談支援センターの相談機能に関する調査研究—東京都 23 区を例に—

【要旨】

本論文では、東京 23 区内にある配偶者暴力相談支援センターに、支援体制や機能、相談体制についてアンケート調査と相談員へのインタビューを実施した。相談員個人の力量に立脚する不安定な支援構造という実態と問題を明らかにするとともに、今後の包括的被害者支援体制の再構築に向けて、法律、心理や医療の専門家のチーム支援を取り入れるというひとつの展望を導き出した。

【氏名】町田 彩夏

【指導教員】申 琪榮（IGS 教授）

【修論タイトル】Twitter でジェンダー関連政策を発信する政治家が受けるネガティブな反応に関する分析——選択的夫婦別姓への賛成を例に——

【要旨】

本研究では、日本の国会議員がジェンダーに関連する政策、特に選択的夫婦別姓に対して Twitter 上で賛成の意を示したツイートをした際に、他の Twitter ユーザーからどのような反応を受けるのかを明らかにし、そこから得られた結果をもとに、Twitter というソーシャルメディアや、そこで発生する言説がどのような効果をもたらしているのかを考察した。加えて、これらのツールが、民主主義の発展に貢献するためには、どのような対策や仕組みづくりが必要なのかを論じた。

【氏名】今村 さくら

【指導教員】申 琪榮（IGS 教授）

【修論タイトル】日本のお笑い界における性差別の再生産メカニズム——バラエティー番組のコンテンツ分析と若手芸人へのインタビューから見えてきたもの——

【要旨】

本研究では、お笑い界で性差別的言動が看過され、繰り返されている原因を明らかにする。バラエティー番組「アメトーク！」のコンテンツ分析と、お笑い事務所に所属している若手芸人への半構造化インタビューを実施し、分析を行った。お笑い界の性差別問題はお笑い芸人の力だけで解決できるものではない。番組の制作側、お笑い芸人の事務所や養成所など多方面で、より実践的で効果的な対策を打ち出していくことが求められる。

【氏名】高橋 沙綾

【指導教員】申 琪榮（IGS 教授）

【修論タイトル】「政治分野における男女共同参画の推進に関する法律」の制定・改正と政策ネットワーク

【要旨】

「政治分野における男女共同参画の推進に関する法律」（候補者均等法）がどのように制定・改正されたのかを、3つのアクター（超党派議員連盟 10 名、女性団体 3 名、専門家 1 名）へのインタビュー調査を通して、多角的に分析した。さらに候補者均等法の制定にいたる政策過程の分析を通じて、ジェンダー政策がどのように形成されるかに関する既存理論への示唆を得た。

【氏名】駒村 日向子

【指導教員】大橋 史恵 (IGS 准教授)

【修論タイトル】家庭空間における賃労働とジェンダー —— COVID-19 緊急事態宣言下での女性たちのテレワーク経験から ——

【要旨】

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の緊急事態宣言下にテレワークを経験した、東京圏在住の育児期の女性 (小学校低学年以下の子どもを持つフルタイム労働の女性) たちへの聞き取りをもとに、在宅形態での就労がはらむ問題を、ジェンダーの視点から実証的に分析した。家庭空間がペイドワーク・アンペイドワーク双方が入り混じる場となり、外部にケアを託すことができない場合には、在宅形態の労働をおこなうことはほぼ不可能であることがわかった。

【氏名】鈴木 七海

【指導教員】大橋 史恵 (IGS 准教授)

【修論タイトル】社会的再生産の危機と代理出産をめぐる考察 —— リプロダクティブ・ジャスティスの視点から ——

【要旨】

本研究は、代理出産の需要が発生する背景にある構造的な問題に接近するものである。資本主義はその発展において人間の社会的再生産を必要とする。社会的再生産のなかでも重要な要素が、生物学的再生産としての妊娠・出産である。産むこと／産ませることが、社会的再生産においてどのように位置づけられるのかを検討する。さらにリプロダクティブ・ジャスティスという視点から、代理出産に関わる産む主体や生まれる子どもたちにとっての「正義」をどうとらえるべきかを考察する。

● IGS 所属教員が副査を務めた 2021 年度博士前期課程修了者と論文タイトル

博士前期課程 (ジェンダー社会科学専攻) 修了者

【氏名】ルフバクシュ モナ

【副査】申 琪榮 (IGS 教授)

【修論タイトル】戦う女神たち—女性アイドルのエージェンシーとファン権力の相克に関する研究

【氏名】小口 藍子

【副査】大橋 史恵 (IGS 准教授)

【修論タイトル】現代日本の「男性の美容」を起点とする男性性理論の再検討：構造的男性性からパフォーマンスな男性性へ

【氏名】梁 せいよ

【副査】大橋 史恵 (IGS 准教授)

【修論タイトル】現代日本における「ジェンダーレス」概念の誕生と語用——権力をめぐる批判的検討——

● IGS 所属教員が副査を務めた 2021 年度博士後期課程修了者と論文タイトル

博士後期課程 (ジェンダー学際研究専攻) 学位取得者

【氏名】KAKIN OKSANA

【副査】申 琪榮 (IGS 教授)

【博論タイトル】「未熟さ」を愛でる —— アイドルのファン文化研究を起点とする日本文化論の再考 ——

# 7.

## 学術成果の発信

- 1) 学術雑誌『ジェンダー研究』
- 2) プロジェクト報告書  
IGS Project Series

# 1) 学術雑誌『ジェンダー研究』

国内外の執筆者による最新のジェンダー研究の成果を世界に発信



本研究所が編集・発行している査読付きの国際学術雑誌で、特集論文、特別寄稿論文、投稿論文、書評から構成される。巻頭に掲載される特集論文はその年に特に注目されたジェンダー関連のテーマについて世界第1級のジェンダー学研究者が執筆し、外部評価を得た論文で組まれており、学術研究としての寄与も大きい。特別寄稿論文は、編集部によるオリジナル企画として、学際的・国際的なジェンダー研究の成果を世に問う論文を掲載している。投稿論文は、国内外から投稿された日本語もしくは英語の論文で、国際的に活躍する研究者による外部審査を経て採用された質の高い論文である。書評も近年ジェンダー関連分野で注目された著書をジェンダー研究および隣接分野の研究者が評しており、最新のジェンダー研究の動向を示すものである。

## ■『ジェンダー研究』24号（2021年7月刊行）概要

### 特集「パンデミックとジェンダー」

『ジェンダー研究』24号は、「パンデミックとジェンダー」と題する特集を組み、すべての論文を公募により募集した。また今回は、現在進行形の事象を取り扱うことから幅広い研究分野からの投稿を期待して、通常の「研究論文」の他に、「研究ノート」「資料報告」「現場報告／事例報告」というカテゴリーを新たに設けることとした。厳正な審査の結果、研究論文2本、研究ノート3本、そして現場報告／事例報告3本を掲載している。

研究論文1本目の金井論文は、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）が生命保険営業の現場にもたらしたジェンダー格差を調査から明らかにする。金井によれば地域に密着し対面での営業を重視する女性労働者よりもITを駆使し営業地域を限定しない男性の営業の方が、物理的距離が重視される状況においては営業成績を上げているという。金井は、従来の保険営業の担い手が男性稼働モデルを補完する主婦を想定し、「専門性」よりも女性が構築する人間関係に営業を依存していたこと、また男女労働者間にデジタル格差があること、といった諸要因を指摘し、パンデミック下で対面を重視する「生保レディ」の構造的脆弱性を明らかにした。2本目の本山論文は、グローバル・ガバナンスが直面する危機の性質について、フェミニスト国際政治経済学の視点から言説分析をおこなっている。エッセンシャルワークの名のもとに再生産労働に焦点が当たった今般のパンデミックでは、ケアの社会的必要性がこれまでのフェミニスト知の蓄積により広範囲に認識される一方で、「ケア」をどこまでの射程において捉えるか、また市場経済との関係性をどのように概念化するか、新自由主義との関連において差異が見られることを示す。パンデミックとジェンダーに関するあらゆる言説が、グローバル政治経済体制を変容、維持、再生産させるジェンダー化された統治権力と関わっていることを明らかにする論考である。

そのほかにも、BLM運動の視点から問い直す公共彫刻（内山）、COVID-19がドイツのジェンダー施策に与える影響（佐野）、パンデミックを契機に「ホーム」という空間を再考する論文（倉光）、パンデミックをマニラの都市下層女性がどのように生き延びたか、生き生きと記述した報告（小ヶ谷・モラレス）、日本のシングルマザーへの大規模調査からコロナ禍がもたらした影響を明らかにした報告（五十嵐／石本）、そして北京でパンデミックを経験した医師たちの経験をつづった報告（大友）が特集として掲載された。この未曾有の危機にいかに対応すべきなのか、ジェンダー研究、フェミニズムの視点だからこそ明らかにできる、またそれを多角的に問う素晴らしい特集になったと自負している。

続く一般投稿論文のセクションでは、5本を掲載することができた。いずれも厳正な審査を経て掲載可となったもので、後掲の目次から明らかなように、セクシュアリティ、表象、教育、心理といった幅広い分野からの掲載となった。注目すべきは藤高論文で、本学へのトランス女性受け入れ発表を機に表出した、日本の「フェミニスト」によるトランス・フォビア言説に焦点を当て、その背後にある「ポストフェミニズムとしてのトランス」という認識論的枠組みを明らかにしている。現在のフェミニズムが抱える課題を浮き彫りにし、トランス・インクルーシブなフェミニズムの構築を訴える力作である。

また書評は、林美子、高橋麻美、山根純佳、小川真理子、田間泰子、児玉谷レミ、小勝禮子、佐藤智美、大野恵理、具裕珍、徐阿貴の諸氏によって評された11本の書評を収録した。いずれも人文科学・社会科学の幅広いフェミニズム、ジェンダー研究の先端をいく文献を厳選し、寄稿いただいた。

今号も多彩な執筆陣によって最先端のジェンダー研究の知見が提供される1冊となった。

『ジェンダー研究』24号(2021年7月刊行)目次

巻頭言 ..... 申琪榮

特集：パンデミックとジェンダー

研究論文

コロナ禍の生命保険営業における「対面」営業の変化 ..... 金井郁  
危機としてのコロナ・パンデミックとフェミニスト知 ..... 本山央子

研究ノート

カラ・ウォーカーによる《フォンス・アメリカス》(2019)—パンデミック下のイギリスにおけるBLM運動の視点から...内山尚子  
COVID-19がジェンダー施策に与える影響—ドイツの男女平等戦略を巡る現状報告 ..... 佐野敦子  
COVID-19と「ホーム」—フェミニスト地理学の視点から ..... 倉光ミナ子

現場報告／事例報告

パンデミックを生き延びる  
—マニラ首都圏都市底辺層女性のロックダウン下の日常生活経験から ..... 小ヶ谷千穂／ロレイン・モラレス  
コロナ禍のシングルマザー調査プロジェクト—1800人の実態調査から見えてきたこと ..... 五十嵐光／石本めぐみ  
パンデミック期の北京で生きる医師たちの日常 ..... 大友聡

投稿論文

「Xジェンダーであること」の自己呈示—親とパートナーへのカミングアウトをめぐる語りから ..... 武内今日子  
腐女子の「ファンタジー・トラブル」—身体・欲望・妄想をめぐるBLファンタジーの存在論 ..... 張瑋容  
女性発達障害児者を支援者はどのような対象として考えているのか  
—支援者に残るジェンダーバイアスとその再生産 ..... 向井理菜  
若者の性の問題化の構造—保健体育科教科書における性感染症の記述を例に ..... 反橋一憲  
ポストフェミニズムとしてのトランス?—千田有紀「女」の境界線を引きなおす」を読み解く ..... 藤高和輝

書評

ケイト・マン著, 小川芳範訳, 慶應義塾大学出版会  
『ひれふせ、女たち ミソジニーの理論』 ..... 林美子  
Koikari Mire 著, Bloomsbury Academic.  
*Gender, Culture, and Disaster in Post-3.11 Japan* ..... 高橋麻美  
ジョアン・C・トロント著, 岡野八代訳・著, 白澤社発行／現代書館発売  
『ケアするのは誰か?新しい民主主義のかたちへ』 ..... 山根純佳  
戒能民江／堀千鶴子著, 信山社  
『婦人保護事業から女性支援法へ—困難に直面する女性を支える』 ..... 小川真理子  
小浜正子著, 京都大学学術出版会  
『一人っ子政策と中国社会』 ..... 田間泰子  
シンシア・エンロー著, 佐藤文香監訳, 岩波書店  
『〈家父長制〉は無敵じゃない 日常からさぐるフェミニストの国際政治』 ..... 児玉谷レミ  
中嶋泉著, ブリュッケ  
『アンチ・アクション 日本戦後絵画と女性画家』 ..... 小勝禮子  
跡部千慧著, 六花出版  
『戦後女性教員史 日教組婦人部の労働権確立運動と産休・育休の制度化過程』 ..... 佐藤智美  
Cynthia J. Cranford 著, Cornell University Press.  
*Home Care Fault Lines Understanding Tensions and Creating Alliances*, ..... 大野恵理  
鈴木彩加著, 人文書院  
『女性たちの保守運動 右傾化する日本社会のジェンダー』 ..... 具 裕珍  
熊本理抄著, 解放出版社  
『被差別部落女性の主体性形成に関する研究』 ..... 徐阿貴

編集後記

編集方針・投稿規定

■『ジェンダー研究』24号(2021年7月刊行)編集委員会

**編集委員長**

申 琪榮                   お茶の水女子大学ジェンダー研究所

**編集委員**

天野 知香               お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系  
水野 勲                 お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系  
森 義仁                 お茶の水女子大学基幹研究院自然・応用科学系  
石丸 径一郎            お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系  
大橋 史恵              お茶の水女子大学ジェンダー研究所  
倉光 ミナ子            お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系  
脇田 彩                 お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系  
板井 広明              お茶の水女子大学ジェンダー研究所 (2021年3月まで)

**学外編集委員**

三浦 まり               上智大学法学部  
金井 郁                 埼玉大学経済学部  
北原 恵                 大阪大学文学研究科  
板井 広明              専修大学経済学部 (2021年4月から)  
Jan Bardsley            ノースカロライナ大学  
Karen Ann Shire        デュースブルグ・エッセン大学

**編集事務局**

平野 恵子              お茶の水女子大学ジェンダー研究所  
仙波 由加里            お茶の水女子大学ジェンダー研究所  
和田 容子              お茶の水女子大学ジェンダー研究所

## 2) プロジェクト報告書 IGS Project Series による成果刊行

ジェンダー研究所では、開催したシンポジウムやセミナーでの講演・報告内容の記録や、特別招聘教授プロジェクトの成果をまとめた報告書として、IGS Project Series を刊行している。2021年度は、6冊刊行した。以下はそのタイトル一覧。

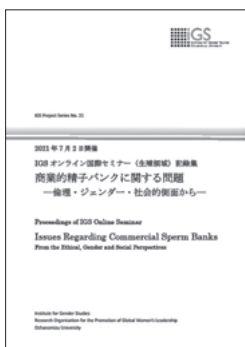
### 【2021年度新刊6冊】



IGS Project Series 15  
特別招聘教授  
プロジェクト特集  
ラウラ・ネンツィ



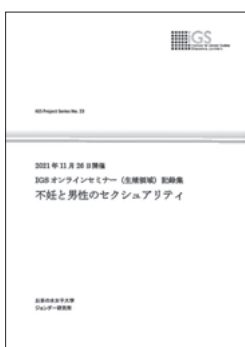
IGS Project Series 16  
特別招聘教授  
プロジェクト特集  
アネッテ・シャート＝ザ  
イフェルト



IGS Project Series 21  
2021年7月2日開催  
IGS オンライン国際セミナー  
(生殖領域) 記録集  
商業的精子バンクに関  
する問題



IGS Project Series 22  
2021年7月16日開催  
IGS オンライン国際セミナー  
(生殖領域) 記録集  
生理の貧困



IGS Project Series 23  
2021年11月26日開催  
IGS オンラインセミナー  
(生殖領域) 記録集  
不妊と男性のセクシュ  
アリティ



IGS Project Series 26  
2021年8月29日開催  
オンライン国際フォーラム  
記録集  
出自を知ることがなぜ  
重要なのか

# 8.

## 文献収集と公開・史料 電子化・ウェブ発信

- 1) 文献・資料の収集と公開
- 2) IGS 史料電子化プロジェクト
- 3) ウェブサイトでの情報発信

## 1) 文献・資料の収集と公開

### ジェンダー研究の知の基盤の一層の充実を図る

ジェンダー研究所は、1975年創立の「女性文化資料館」時代から今日に至るまで40年以上にわたり、女性学・ジェンダー研究の文献・資料の収集を絶え間なく続けてきた。女性に関する膨大な知の集積ともいえる蔵書は、お茶の水女子大学附属図書館の専門コーナーに配架され、学内外からOPAC（Online Public Access Catalog）で検索でき、手続きを経れば学外の者も利用可能である。

2021年度も、寄贈・購入の多数の文献・資料を収集することができた。また、専門コーナーの書架から見つかったOPAC未登録の希少資料について、雑誌登録を進めた。（新規収蔵図書・資料の詳細は本報告書巻末資料142頁参照）。

一方で、増加する文献・資料の配架場所確保と研究資料としての有効活用のため、重複して所蔵している書籍の一部を除却し、希望する外部機関および学内研究者・大学院生に提供した。

#### ■附属図書館専用書架での蔵書貸出・閲覧

ジェンダー研究所蔵文献（書籍約25,000冊、雑誌約340種）は、お茶の水女子大学附属図書館の専門コーナーに配架され、学内外の学生や研究者に利用されている。

##### 《図書館利用案内》

##### ○開館日

- ・月～金 8:45～21:00（授業のない日は17:00まで）
- ・土 9:00～17:00（夏・冬・春期休業期間中は閉館）
- ・日 12:00～17:00

##### ○閉館日

- ・日曜日、国民の祝日、年末年始、大学夏季一斉休業日
- ・夏・冬・春期休業期間中の土曜日
- ・蔵書点検
- ・徽音祭当日、創立記念日、入学試験日当日、卒業式

※新型コロナウイルス感染拡大防止の対応のため、一部利用に制限あり。最新情報は附属図書館ウェブサイト（<https://www.lib.ocha.ac.jp/>）を参照。



## ■蔵書・研究者に関する情報提供

附属図書館収蔵文献・資料のほかに、ジェンダー研究所内にて、購入雑誌・寄贈雑誌の最新号、研究所の過去の成果刊行物、事業の記録、所属研究者執筆の書籍のほか、全国のジェンダー研究施設や男女共同参画団体の定期刊行物を閲覧することができる。

資料閲覧対応のほか、研究者及びジェンダーに関心を持つ方々に、これらの文献や資料、研究所に蓄積された知識を広く活用してもらうため、メールや電話による外部からの問い合わせ、訪問依頼にも随時対応している。

## ■お茶の水女子大学デジタルアーカイブズでの資料公開

<http://archives.cf.ocha.ac.jp/>

お茶の水女子大学デジタルアーカイブズでは、本学を卒業し、女性の先駆的研究者として活躍した保井コノ、黒田チカ、湯浅年子、辻村みちよの研究業績をまとめた資料目録などが公開されている。

これらの資料は、女性文化資料館時代の1981年の文部省特定研究「女性高等教育とその成果に関する総合的研究」における2つのプロジェクト、「III 婦人研究者の活動状況に関する調査研究—自然科学分野を中心に—」「IV 女性文化に関する文献・資料の収集及び調査研究」の中で、それぞれのご遺族の協力を得て収集した遺品のうち、研究関連のものを整理し、長い時間を掛けて目録化したものである。

目録化は本研究所の前身機関のプロジェクト成果であるが、これを大学の歴史資産として広く公開するよう、2007～2009年にデジタルアーカイブズ化された。現在、資料現物は理学部内に設置された「女性科学者資料室」で保管され、本学図書・情報課 大学資料担当 (shiryo@cc.ocha.ac.jp) が窓口となって資料閲覧や貸出等の依頼に応じている。

## 2) IGS 史料電子化プロジェクト

ジェンダー研究所は2017年度に、「IGS 史料電子化プロジェクト」を始動した。ジェンダー研究所の前身であるジェンダー研究センター（1996年設立）、女性文化研究センター（1986年設立）、女性文化資料館（1975年設立）において、所属の研究者たちが企画開催してきた研究会やセミナー、国際シンポジウム等のイベントの記録・資料を電子化し、「IGS デジタルアーカイブ」として後世に残すことで、ジェンダー研究のさらなる発展に寄与することを目的とするプロジェクトである。

5年目を迎えた2021年度は、デジタルアーカイブを実際にデータベースとして活用できるものにするために、メタデータ（電子化した個別のデータについてのデータ）の構築に着手した。今年度の当プロジェクトの成果概要は以下の通りである。

### ■ 電子化済イベント件数

女性文化資料館時代と女性文化研究センター時代に開催されたイベントの記録は、主にカセットテープに録音された音声である。そのほかに、写真（ネガフィルムと紙焼き）と、印刷物や手書きの資料・記録等の紙媒体の史料が残されている。2017年度以来これらアナログデータの調査を進め、バラバラに保管されていた史料を過去の彙報などを参考に整理していく作業と、それと並行して個別のアナログデータをデジタルデータへと変換する電子化作業を進めてきた。2021年12月現在の電子化済イベント件数は【表1】の通りである。

【表1】電子化済イベント件数（※1,2）

時期 (年度)	組織名	イベント 件数	電子化済イベント件数			
			ドキュメント (PDF)	画像 (JPEG)	音声 (mp3)	動画 (mp4)
1975-1985	女性文化資料館	75			54	
1986-1995	女性文化研究センター	137	1	23	85	
1996-2014	ジェンダー研究センター	211	4	91	101	37
2015-2021	ジェンダー研究所	130	130	130	100	30
合計		553	135	244	340	67

※1) 現在も調査中のため、イベント件数は今後増える見込

※2) 女性文化資料館時代と女性文化研究センター時代のイベント一覧は本報告書143～147頁参照

### ■ メタデータの構築

「IGS デジタルアーカイブ」をデータベースとして活用できるように、メタデータの構築に着手した。将来、ジェンダーの研究者がデータベースを検索する際の利便性を考慮し、電子化した個別データのメタデータのカテゴリーを以下の6カテゴリーとすると決定した（個別のメタデータ例は【表2】参照）。

・IGS デジタルアーカイブ メタデータカテゴリー

【ID】【イベントタイトル】【テーマ領域（※）】【キーワード】【登壇者氏名】【データ形式】

※【テーマ領域】については次項参照

【表 2】 メタデータ例

ID	20200716
イベントタイトル	IGS オンラインセミナー〔生殖領域シリーズ〕 ケアのインフラストラクチャーとしての臨床データ報告：生殖補助技術（ART） の臨床結果登録に対するフェミニストアプローチ
テーマ領域	Health; including Mental Health, Psychology and Socialisation（※1）
キーワード	生殖補助医療、生殖補助技術、ART、臨床データ、日本、台湾、韓国、ケア、インフラストラクチャー
登壇者氏名	吳嘉苓、柘植あづみ、仙波由加里
データ形式	Zoom 録画動画、登壇者作成資料パワーポイント、報告原稿の PDF、報告書（IPS シリーズ）の PDF

※1) テーマ領域については次項参照

## ■ テーマ領域の分類法

電子化した個別のイベントが、どのようなテーマで企画開催されたものであるのかを端的に明らかにするために、メタデータの Kategorii のひとつとして「テーマ領域」を設定することとした。テーマ領域の分類には、The Feminist Library（※1）の Feminist Library Classification（※2）を使用する予定。The Feminist Library はジェンダー問題に特化した専門図書館であり、そこで考案された独自の分類法が Feminist Library Classification（【表 3】）で、さまざまなフェミニスト図書館で採用されている。

【表 3】 Feminist Library Classification（※3）

A	General
B	History
C	Society, Customs and Beliefs
D	Education
E	Politics; including the Women's Liberation Movement
F	Health; including Mental Health, Psychology and Socialisation
G	Sexuality
H	Lifestyles
J	Work
K	Law and Rights
L	Crimes Against Women; including Violence Against Women
M	Communications and Mass Media
N	Arts; including Literary Criticism
P	Leisure; Sport; Women Travellers

※1) <http://feministlibrary.co.uk/>

※2) <http://feministlibrary.co.uk/classification-system/>

※3) 【表 3】 は 2021 年 12 月現在のバージョンであり、The Feminist Library では 2022 年 3 月に Feminist Library Classification のアップデート版を公開予定である。

■ 2022 年度は電子化の作業と並行して電子化済イベントのテーマ領域を Feminist Library Classification アップデート版に基づいて順次分類していく。現在 The Feminist Library の研究員の方々とメールでの連絡を継続中であり、アップデート版 Feminist Library Classification を完成次第ご提供いただく予定である。

### 3) ウェブサイト等での情報発信

## ウェブサイト全体の情報整理と英語発信の強化

2021 年度は、前年度末に課題を整理したウェブサイト全体の情報整理と英語発信の強化を進めた。まずは紙媒体で発行されている年次事業報告書を元に、研究プロジェクトの情報整理や、掲載漏れのあったセミナー・シンポジウムの開催報告の掲載作業を行った。さらに、日本語版にはあるが英語版にはない情報を確認し、「AIT ワークショップ」など英語発信が重要と考えられる国際交流事業のページ作成を行った。引き続き、英語発信が不足している部分の強化に努める。

刊行物をオンライン公開するページのうち、年次事業報告書のページは、各巻 1 冊分をひとつの pdf ファイルにまとめたものだけが掲載されていたが、章ごとにファイルを分割したのも加えて、閲覧したい箇所が探しやすい、ユーザーフレンドリーを意識した形態に修正した。IGS Project Series のページもレイアウトを工夫し、それぞれの報告書の関連情報であるセミナーの開催概要や実施報告が掲載されているウェブページへのリンクを貼った。IGS の実施事業は、所属研究者が進める研究プロジェクトと、国際研究ネットワークや開催イベントなどの事業が有機的に連携している。そのような関連性を相互リンクの形で明示できるのがウェブサイトでの情報発信の利点でもある。その利点を活かした情報発信になるよう、工夫を重ねる所存である。

また、これまで成果の発信が十分とはいえなかったプロジェクトのウェブページ作成も進めている。「特別招聘教授プロジェクト」については、担当イベントの案内と開催報告のウェブ掲載はされていたものの、プロジェクト総体での情報整理がされていなかった。IGS ではこれまでに 8 名の招聘実績があり、全員の研究所事業への貢献が俯瞰できる形の特設サイト（日英）の構築作業を進めている。こうした形の発信は国際的な研究教育交流の更なる活性化にもつながるだろう。

さらに、文献収集・資料整理の一環として、1975 年の創設以来の紙媒体の資料やアナログ音源などをデジタル保存する「IGS 史料電子化プロジェクト」についても、ウェブサイト上での情報発信を検討している。電子化後のデータ公開についてはすぐにできることではないが、まずはこのプロジェクトが進行中であることを発信し、それが研究所歴史資料整理作業の充実や、ひいては日本の女性学・ジェンダー研究史の研究に資するものになることを期待している。

年次事業報告書のページ



<https://www2.igs.ocha.ac.jp/publications/jigyou/>

IGS Project Series のページ



<https://www2.igs.ocha.ac.jp/ips/>

9.

社会貢献

## ▶社会貢献概要

---

ジェンダー研究所所属研究者は、行政機関が開催する男女共同参画関連講座の講師を担当したり、メディアの専門家取材に応じるなど、研究成果の社会還元に取り組んでいる。2021年度はオンラインならびに対面の講演会での講演や各種メディアの取材対応など、ジェンダー研究の成果を積極的に発信した。

### ■ 駐日外国公館での講演

#### 申琪榮（教授）

- ・ 駐新潟大韓民国総領事館主催「日韓ジェンダーフォーラム」（オンライン方式とのハイブリット開催）パネリスト「男性優位の政治を変える」、2021年10月18日

### ■ 他大学や研究機関での講演等

#### 申琪榮（教授）

- ・ 公益財団法人 笹川平和財団主催 「アジアの女性の政治リーダー育成」事業 「東南アジアにおける女性政治リーダー育成」ウェビナー講演、2021年9月9日
- ・ アジア女性資料センター主催オンライントークイベント「政治にうんざりしている場合じゃないわたち」（辻元清美\*申琪榮）、2022年3月12日

#### 大橋史恵（准教授）

- ・ 東京都立大学オープンユニバーシティ オンラインスペシャル「今、ジェンダーについて考える」連続講座、「再生産労働とジェンダー：『逃げ恥』からグローバル・ケア・チェーンまで」講義担当、2021年11月20日

#### 仙波由加里（特任講師）

- ・ 横浜市立大学地域貢献センター主催 イクステンション講座「医療と倫理を巡る三つの講座」講師、2021年10月9日

### ■ 男女共同参画センター等での講演

#### 申琪榮（教授）

- ・ 新潟県教職員組合「新潟県母と女性教職員の会」主催講演会「私たちの社会参加：ジェンダー・センシティブな市民が社会を変える」、2021年10月23日
- ・ 富山県女性財団主催講演会「合言葉はパ・リ・テ！ 意思決定の場を男女同数に」2022年2月12日

### ■ 地方公共団体男女共同参画事業への参与

#### 申琪榮（教授）

- ・ 兵庫県明石市「ジェンダー平等の実現に関する検討会」委員（2021年12月～）

### ■ NPO 事業への参与

#### 申琪榮（教授）

- ・ 女性政治リーダーを養成する一般社団法人「パリテ・アカデミー」（Academy for Gender Parity）共同代表。一般向けオンライン講座や講演会を企画・開催。

## ■ 新聞等記事へのコメント提供ほか

### 申琪榮（教授）

- ・『信濃毎日新聞』『宮崎日日新聞』『佐賀新聞』『山陰中央新報』『京都新聞』『西日本新聞』ほか 2021 年 4 月 8 日「内閣府地方議会調査 対策に結びつく実態調査を」
- ・『世界』2021 年 7 月号「特集 2 さらばオトコ政治：「政治とお金」のジェンダー格差」
- ・『47NEWS』2021 年 7 月 3 日「深刻な日本のジェンダーギャップ、改善阻む要因とは？ 政治、経済、教育に潜む障壁、3 人に聞いた」<https://nordot.app/782845005632061440>
- ・『望星』2021 年 8 月号「女性の政治家を増やさなくてはいけないワケ 政治という仕事を魅力あるものに」
- ・TBS ラジオ『荻上チキ・Session\_特集』2021 年 9 月 9 日「荻上チキ・Session\_特集「自民党総裁選から女性の政治参画を考える」」<https://www.tbsradio.jp/articles/44176/>
- ・『朝日新聞デジタル』2021 年 9 月 26 日「政治は豊かに？ ジェンダー政策で読みとく総裁選初の「女性 2 人」」<https://www.asahi.com/articles/ASP9V6JMSP9TOHGB009.html>
- ・『朝日新聞』2021 年 9 月 27 日「総裁候補に女性 2 人 効果は」
- ・『新潟日報モア』2021 年 10 月 19 日「育児、介護 女性に偏る負担どう解消－新潟で韓日ジェンダーフォーラム」<https://www.niigata-nippo.co.jp/news/national/20211019648233.html>
- ・『朝日新聞』2021 年 10 月 22 日「耕論 2021 衆院選「女性政治家」への視線」
- ・『朝日新聞』2021 年 10 月 26 日「[2021 衆院選] 女性の政治家が増えないわけは 政治トップ生んだ韓国、台湾との違い」<https://www.asahi.com/articles/ASPBT3W3DPBSUPQJ002.html>
- ・『中日新聞』2021 年 10 月 26 日「衆院選 10・31 前職優先 女性 1 人だけ」
- ・『PRESIDENT Online』2021 年 10 月 27 日「「女性候補が少ないのは女性のせいなのか」日本で女性議員が増えない本当の理由 候補者均等法はできたけれど…」<https://president.jp/articles/-/51268>
- ・『毎日新聞（有料記事）』2021 年 11 月 2 日「そこが聞きたい：韓国「# MeToo」運動＝お茶の水女子大教授・申琪榮氏」<https://mainichi.jp/articles/20211102/ddm/005/070/005000c>
- ・『東京新聞』2021 年 11 月 2 日「当選 女性は一割に満たず」<https://www.tokyo-np.co.jp/article/140332>
- ・『静岡新聞』『山陽新聞』『北國新聞』『東奥日報』『愛媛新聞』『福井新聞』ほか 2021 年 11 月 11 日「視標 衆院選と女性の政治参加「候補増へ本気度見えず」
- ・『中國新聞』2021 年 11 月 14 日「識者評論 衆院選と政治参加「女性候補増 本気見えぬ」
- ・『佐賀新聞』2021 年 11 月 16 日「評論 衆院選と政治参加「女性候補増へ本気度見えず」
- ・『高知新聞』2021 年 11 月 21 日「論レビュー 衆院選 「女性候補増 本気度見えず」
- ・『朝日新聞』2021 年 11 月 25 日「(論壇時評) 選挙と日本 堅牢な制度が阻む、新しい風」林香里東京大学大学院教授による『PRESIDENT Online』2021 年 10 月 27 日記事「「女性候補が少ないのは女性のせいなのか」日本で女性議員が増えない本当の理由 候補者均等法はできたけれど…」紹介
- ・『中日新聞』2021 年 12 月 1 日「勝静岡県知事の性差別発言に対するコメント「差別と認識せず問題」
- ・『ふえみん』No.3305 (2021 年 12 月 4 日)「【女性議員】女性候補者を増やすには政党の民主化を」

- ・『朝日小学生新聞』2021年12月10日「女性国会議員 どう増やす？」
- ・『社会運動』No.445（2022年1月15日）「ジェンダーの視点で女性の政治参画を考える」
- ・『読売新聞』2022年3月28日「女性参画 まず政治から」 平等先進国 ルワンダ担当相に聞く：法で促進 女性国会議員6割強：男女平等度120位の日本 政治分野で特に停滞」
- ・『COUNTING COUNTS』2022年3月28日『The Return of Old Boys' Politics in South Korea?』  
<https://countingcountsblog.wordpress.com/2022/03/28/the-return-of-old-boys-politics-in-south-korea/>

#### 仙波由加里（特任講師）

- ・『ハフポスト』2021年8月30日「なぜ出自を知りたいのか。精子提供で生まれた子どもたちが望むこと」  
[https://www.huffingtonpost.jp/entry/story\\_jp\\_612b3981e4b02be25b5cc570](https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_612b3981e4b02be25b5cc570)
- ・『しんぶん赤旗』2021年9月17日「提供精子による人工授精—子どもに出自知る権利を」
- ・『東京新聞』2021年11月6日「真実のルーツ知りたい 都立産院取り違え、出自を知る権利 法整備急務」  
<https://www.tokyo-np.co.jp/article/141177>
- ・『BioNews』2022年2月14日「Donor conception in Japan; a case of buyer beware or a need for regulation?」  
[https://www.bionews.org/page\\_162018](https://www.bionews.org/page_162018)
- ・『読売新聞』2022年2月17日「生みの親探し諦めぬ「出自を知る権利」争点に」  
<https://www.yomiuri.co.jp/national/20220216-OYT1T50251/>
- ・『東京新聞』2022年2月22日「生殖医療と出自を知る権利（下）：「半分タイ人だね」屈託ない子どもたち …「告知」決断した母の願い 親に寄り添う支援求める声も」  
<https://www.tokyo-np.co.jp/article/161581>

# 資料

- ① 構成メンバー
- ② 研究プロジェクト一覧
- ③ 協力研究者一覧
- ④ シンポジウム・セミナー一覧
- ⑤ 寄贈図書一覧
- ⑥ 電子化イベント一覧
- ⑦ 国立大学法人お茶の水女子大学  
ジェンダー研究所規則
- ⑧ 国立大学法人お茶の水女子大学  
特別招聘教授に関する規則
- ⑨ 『ジェンダー研究』編集方針・  
投稿規程
- ⑩ ジェンダー研究所ウェブサイト  
プライバシー・ポリシー

## 【資料】①構成メンバー

## 【所長】

戸谷陽子(基幹研究院人文科学系・文教育学部教授)

## 《任期》

2021(R3)年4月1日～2023(R5)年3月31日

## 【専任教員】

申琪榮(ジェンダー研究所教授)

2015(H27)年4月1日～

大橋史恵(ジェンダー研究所准教授)

2018(H30)年9月1日～

## 【学内研究員】

棚橋訓(基幹研究院人間科学系・文教育学部教授)

2021(R3)年4月1日～2023(R5)年3月31日

小玉亮子(基幹研究院人間科学系・文教育学部教授)

2021(R3)年4月1日～2023(R5)年3月31日

斎藤悦子(基幹研究院人間科学系・生活科学部教授)

2021(R3)年4月1日～2023(R5)年3月31日

石丸径一郎(基幹研究院人間科学系・生活科学部准教授)

2021(R3)年4月1日～2023(R5)年3月31日

## 【特任講師】

仙波由加里

2021(R3)年4月1日～2022(R4)年3月31日

平野恵子

2021(R3)年4月1日～2022(R4)年3月31日

## 【特任リサーチフェロー／リサーチ・アドミニストレーター】

吉原公美

2021(R3)年4月1日～2022(R4)年3月31日

## 【アカデミック・アシスタント】

稲垣明子

2021(R3)年4月1日～2022(R4)年3月31日

梅田由紀子

2021(R3)年4月1日～2022(R4)年3月31日

関根里奈子

2021(R3)年4月1日～2022(R4)年3月31日

滝美香

2021(R3)年4月1日～2022(R4)年3月31日

和田容子

2021(R3)年4月1日～2022(R4)年3月31日

## 【客員研究員】

足立眞理子(お茶の水女子大学名誉教授)

2021(R3)年4月1日～2022(R4)年3月31日

## 【研究協力員】

板井広明(専修大学経済学部准教授)

2021(R3)年4月1日～2022(R4)年3月31日

佐野潤子(慶應義塾大学ファイナンス・ジェロントロジー研究センター特任講師)

2021(R3)年4月1日～2022(R4)年3月31日



## 所長 戸谷 陽子

基幹研究院人文科学系・教授

文教育学部言語文化学科英語圏言語文化コース

博士前期課程比較社会文化学専攻英語圏・仏語圏文化学コース

博士後期課程比較社会文化学専攻言語文化論領域

**専門分野:** 舞台芸術論、パフォーマンス研究、アメリカ演劇、文化政策、比較演劇論

### 所属学会等

日本英文学会(編集委員)

日本アメリカ文学会(東京支部評議員・編集委員)

日本アメリカ演劇学会(評議員)

日本アメリカ学会

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構(学位審査会専門委員)

### 主な業績

#### 《書評》

責志雅之『アメリカ演劇，劇作家たちのポリティクス——他者との遭遇とその行方』、2021 年度『アメリカ文学研究』第 58 号(日文号)pp.84-90.

#### 《競争的資金》

- ・ 科学研究費基盤研究 C(課題番号:20K00385)「米国舞台・表象空間における日本人ストックキャラクターの系譜と展開」、2020 年度～2023 年度、研究代表者
- ・ 科学研究費基盤研究 C(課題番号:16K02483)「米国舞台芸術の理論と実践におけるサブジャンルの成立と発展—人形・仮面・演じる物体」、2016 年度～2021 年度、研究代表者



## 専任教員(教授) 申 琪榮

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース(コース長)

生活科学部生活社会科学講座

**専門分野:**ジェンダーと政治、比較政治学(東アジア)、フェミニズム理論、男女共同参画政策

**所属学会等** International Political Science Association, American Political Science Association

European Conference on Gender and Politics, International Association for Feminist Economics

日本政治学会、日本比較政治学会、日本社会政策学会、日本フェミニスト経済学会、

「女性・戦争・人権」学会

ソウル大学日本研究所『日本批評』、西江大学社会科学研究所『社会科学研究』、

釜山大学女性学研究所『女性学研究』編集委員

日米女性政治学者シンポジウム(JAWS、アメリカ政治学会国際交流プログラム)日本側コーディネーター

同志社大学人文社会科学研究所客員研究員

『ジェンダー研究』編集長

一般社団法人 パリテ・アカデミー共同代表

韓国女性政策研究院 Visiting Scholar (2022年9月)

## 主な業績

### 《論文等》

Shin, Ki-young. 2021. “Beyond #WithYou: The New Generation of Feminists and the #MeToo Movement in South Korea.” *Politics & Gender* 17(3): 507-513 September.

申琪榮、2021. 「セクシュアル・ハラスメントの理論的展開——4つの害アプローチ——」、社会政策学会誌『社会政策』第13巻第1号(通巻第38号): 19-34.

申琪榮、2021. 「#MeToo 運動とフェミニズムの「大衆化」——本書の解説に代えて」、『#MeToo の政治学』. 大月書店:193-205.

申琪榮、2021. 「『政治とお金』のジェンダー格差——女性を阻む政治資金問題の解消へ」、『世界』. 岩波書店. 946 (July): 182-188.

申琪榮、2021. 「『候補者均等法』改正で政治分野のジェンダー格差の何が変わるのか」、『MOVING』. 北九州市立男女共同参画センター. 95号:2-3.

申琪榮、2021. インタビュー記事「女性の政治家を増やさなくてはならないワケ——政治という仕事を魅力あるものに」、『望星』. 東海教育研究所. 52(8): 18-25.

申琪榮、2022. インタビュー記事「ジェンダーの視点で女性の政治参画を考える」、『社会運動』. 一般社団法人市民セクター政策機構. 2022-1、445:121-128.

### 《翻訳書》

『#MeToo の政治学』. 2021. 大月書店. 翻訳監修

### 《Online 記事寄稿》

Shin, Ki-young. 2021. “The Return of Old Boys’ Politics in South Korea?” *Academic Blog Counting Counts*

<https://countingcountsblog.wordpress.com/2022/03/28/the-return-of-old-boys-politics-in-south-korea/>

申琪榮、2021. 「女性候補が少ないのは女性のせいなのか」日本で女性議員が増えない本当の理由」

*President Online*、<https://president.jp/articles/-/51268>

### 《学会報告》

申琪榮、2022. 「韓国からの示唆」、日本学術会議 公開シンポジウム「女性の政治参画をどう進めるか?」、3月13日(オンライン)

### 《招待講演等》(すべてオンライン開催)

2021 韓国女性政策研究院専門家フォーラム「ジェンダー視点から見た日本政治の現在と課題」、2021年9月14日

2021 韓国女性政策研究院国際フォーラム「Building Back Better and Women’s Political Empowerment in Asia 1」、基調講演、2021年9月30日

2021 韓国女性政策研究院 研究プロジェクト報告書「外交安保政策の性主流化方案:フェミニスト外交政策を中心に」諮問委員、2021年12月

2022 インドネシア国際政治学会主催:オンライン講演会:Presidential Election of South Korea、3月31日

### 《他大学講演》(すべてオンライン開催)

2021 名古屋大学大学院法学研究科「現代政治学研究」集中講義 9月27日～30日

2021 上智大学 プロフェッショナル・スタディーズ「教養としてのジェンダー」講師 11月29日

2021 ソウル大学「現代家族論」ゲスト講義 12月2日

2021 津田塾大学「ジェンダーと社会変動」ゲスト講義 12月15日

2021 一橋大学 グローバルリーダーズプログラム “Women in Politics in Japan” ゲスト講義 10月25日

### 《競争的資金》

・科学研究費基盤研究 C(課題番号:19K12604)「ジェンダークォータの政治学——制度化と抵抗」、2019～2022年度、研究代表者

・科学研究費基盤研究 B(課題番号:18H00817)「女性の政治参画の障壁:国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査」、2018～2022年度(研究代表者:三浦まり・上智大学)、研究分担者

### 《企画運営国際シンポジウム》

・「ジェンダー視点に基づく美術史研究の現在」、2021年12月18日

・「#MeTooの政治学:#MeTooが残したフェミニズムの課題を考える」、2022年1月21日



## 専任教員(准教授) 大橋 史恵

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域  
博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース  
文教育学部グローバル文化学環

専門分野: ジェンダー研究、国際社会学、中国地域研究

所属学会等 International Association for Feminist Economics

日本社会学会  
関東社会学会  
日本フェミニスト経済学会(幹事会役員、『経済社会とジェンダー』編集長)  
ジェンダー史学会  
現代中国学会  
中国女性史研究会  
経済理論学会分野別ジェンダー分科会

### 主な業績

#### 《著書・論文》

2021 “Rearrangement of Gender Order in Post-Mao China: Changing Networks of Women’s Federations,” in Kohama, Masako and Linda Grove (eds.) *Gender History in China*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2021.

#### 《書評》

2021 「小浜正子著『一人っ子政策と中国社会』、『アジア経済』62 巻 4 号、pp. 113-116、2021 年。

#### 《学会報告》

2021 〈黄金与姐妹关系:战后香港家庭佣工的经济能动性〉, 中国当代史研究中心第十届中国当代史研究工作坊, 東洋文庫現代中国研究班「国際関係・文化」グループ・华东师范大学社会主义历史与文献研究院, 2021 年 12 月 4 日(オンライン開催)。

#### 《競争的資金》

- ・科学研究費基盤研究 B(課題番号:20H01468)「新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー」、2020～2022 年度(研究代表者:堀芳枝・早稲田大学)、研究分担者
- ・科学研究費基盤研究 B(課題番号:19H01578)「再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯」、2019 年度～2021 年度(研究代表者:定松文・恵泉女学園大学)、研究分担者
- ・科学研究費基盤研究 C(課題番号:19K12603)「香港における移住女性の再生産労働力配置——「グローバル・シティ」のジェンダー分析」、2019 年度～2021 年度、研究代表者
- ・科学研究費国際共同研究加速基金(国際共同研究強化 B) (課題番号:21KK0033)「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」、2021～2024 年度、研究分担者



## 特任講師 仙波 由加里

専門分野: 生命倫理学、生殖技術とジェンダー、生殖技術に関連する倫理的問題

### 所属学会等

日本医学哲学・倫理学会(国際誌編集委員・広報委員会委員)  
日本生命倫理学会(評議委員)  
日本生殖看護学会  
European Society of Human Reproduction and Embryology (ESHRE)  
Society for Social Studies of Science (4S)

### 【担当業務】

- ・ 研究プロジェクト「生殖医療とジェンダー」(18 頁参照) / 「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究」(18 頁参照)
- ・ NTNU 国際共同研究プロジェクト「NJ\_BREGED プロジェクト」プロジェクトメンバー(91~94 頁参照)
- ・ IGS セミナー(生殖領域)「商業的精子バンクに関する問題」企画・コーディネーター・司会(41 頁参照) / 「生理の貧困」企画・コーディネーター・司会(45 頁参照) / 「出自を知ることがなぜ重要なのか」企画・コーディネーター・司会(49 頁参照) / 「不妊と男性のセクシュアリティ」企画・コーディネーター・司会(56 頁参照)
- ・ お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構主催国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ: アジアからの提言」における「国際共同プロジェクト: INTPART プロジェクト」成果報告(38 頁参照)
- ・ IGS セミナー(生殖領域)4 本の報告書(各日本語・英語)の作成と記録集(IPS シリーズ)の編集(110 頁参照)
- ・ IGS 研究協力員研究報告会、企画・コーディネーター・司会(66 頁参照)ならびに報告書(日本語・英語)の作成
- ・ 雑誌『ジェンダー研究』編集スタッフ。主に特集の研究ノートと現場報告論文および書評編集担当(106~109 頁参照)
- ・ 海外からの問い合わせに対応
- ・ IGS の HP のイベント報告(英語)の確認作業

### 主な業績

#### 《著書・論文》

2022. 1 (共著) Guro Korsnes Kristensen and Yukari Semba, “Chapter 11: A matter of gender (in)equality? Public discourses on declining fertility rates in Japan and Norway”(pp. 173-190), M. Ishii, G. K. Kristensen and Pricilla Ringrose eds., *Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan*, Routledge: London and NY.
2022. 1 (共著) Merete Lee and Yukari Semba, “Chapter 12: Assisted reproduction with donated eggs and sperm: A comparison of regulations on assisted reproduction in Norway and Japan”(pp. 191-205), M. Ishii, G. K. Kristensen and Pricilla Ringrose eds., *Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan*, Routledge: London and NY.
2021. 6 (分担執筆)「第 4 章5. グローバルエシックスの模索」(pp. 68-69)、「第 4 章 6. 生命倫理と医療倫理・臨床倫理」(pp. 70-71)、「第 5 章5. 配偶子・胚の資源化と社会的影響」(pp. 82-83)、松島哲久、宮島光志編著『薬学生のための医療倫理 新版 コアカリ対応』丸善株式会社

#### 《書評》

2022. 3 Sarah Ferber, Nicola J. Marks, and Vera Mackie, IVF and Assisted Reproduction: *Global History: East Asian Science, Technology and Society: An International Journal*, 16(1), pp.148 -150.

#### 《学会報告・講演》

- 2022 オンライン国内学会: 第 27 回日本臨床エンブリオロジスト学会 学術大会特別講演「商業的精子バンクの現状と課題倫理的側面、ジェンダー的側面、社会的側面から」(招聘講演)(2022 年 1 月 9 日)横浜大さん橋会議場
- 2021 オンライン国内学会: 日本医学哲学・倫理学会第 40 回年次大会シンポジウム講演「諸外国の出自を知る権利を保障する法制度」『出自を知る権利をめぐるこれまでの議論の経緯と今後の課題』(招聘講演)(2021 年 11 月 6 日)横浜市立大学オンライン
- 2021 オンライン国際学会: Society for Social Studies of Science (4S) The 4S 2021 preliminary conference のワークショップ 434. Assisted Reproductive Technology and Third Party Reproduction in East Asia: Japan and Taiwan での報告: 報告タイトル“Family members as gamete donors in Japan”(査読有)(2021 年 10 月 9 日)カナダ・トロント

#### 《競争的資金》

- ・ 科学研究費基盤研究 C(課題番号:18K00034)「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究」、2018 年~2021 年度、研究代表者



## 特任講師 平野 恵子

博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース

専門分野: 国際社会学、ジェンダー研究、インドネシア地域研究

### 所属学会等

International Association for Feminist Economics

日本社会学会

国際ジェンダー学会(理事・評議員)

日本フェミニスト経済学会(幹事)

アジア政経学会

東南アジア学会

移民政策学会

### 【担当業務】

- ・ 研究プロジェクト「国際労働力移動のジェンダー分析」(19 頁参照) / 「移民受入れ国—送出国の政策相互連関——国際社会学からの比較研究」(19 頁参照) / 「再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯」(20 頁参照) / 「インドネシア人帰還移民の再統合における労働経験の意味: 移住先での労働者層別分析」(20 頁参照)
- ・ IGS セミナー「ジェンダー、エスニシティ、技能実習制度」企画・コーディネーター・司会(47 頁参照) / 「移住労働者の子どもたち」企画・コーディネーター・司会(54 頁参照) / 「教育とジェンダー、世界と日本」企画・コーディネーター・司会(58 頁参照) / 「国際協力とジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ」企画・コーディネーター・司会(60 頁参照)
- ・ IGS 国際シンポジウム「#MeToo の政治学」運営担当(32 頁参照)
- ・ お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構主催国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ: アジアからの提言」における「IGS-AIT 交流事業: AIT ワークショップ」成果報告(38 頁参照)
- ・ 担当セミナーのウェブサイト用報告書(各日本語・英語)の監修
- ・ 『ジェンダー研究』編集スタッフ(106~109 頁参照)。主に特集、一般投稿論文担当。ほか『ジェンダー研究』編集刊行業務全般の統括。
- ・ 海外からの問合せ対応

### 主な業績

#### 《著書・論文》

2021 「COVID-19 パンデミック下のインドネシアにおける家事労働者への社会経済的影響」『国際ジェンダー学会誌』第 19 号: 32-53(査読有)

2022 「有償家事労働の位相から「家政」を考える」『現代思想』青土社, 50(2): 79-88.(招待有)

#### 《学会報告・講演》

2022 報告: 「SDGs(持続可能な開発目標)をジェンダー視点からクリティカルに考えてみることをテーマにした読書会」、国際ジェンダー学会「開発とジェンダー」分科会、2022 年 3 月 29 日

#### 《競争的資金》

- ・ 科学研究費基盤研究 C(課題番号:21K12395)「インドネシア人帰還移民の再統合における労働経験の意味: 移住先での労働者層別分析」、2021~2023 年度、研究分担者
- ・ 科学研究費基盤研究 A(課題番号:19H00607)「移民受入れ国—送出国の政策相互連関——国際社会学からの比較研究」、2019~2021 年度(研究代表者:小井土彰宏・一橋大学)、研究分担者
- ・ 科学研究費基盤研究 B(課題番号:19H01578)「再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯」、2019~2021 年度(研究代表者:定松文・恵泉女学園大学)、研究分担者



### 学内研究員 棚橋 訓

基幹研究院人間科学系・教授

文教育学部人間社会科学科社会学コース

博士前期課程ジェンダー社会科学専攻・専攻長

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野: 文化人類学、オセアニア地域研究、ジェンダー文化論、  
セクシュアリティ研究

主な担当業務: ジェンダー研究所運営会議メンバー



### 学内研究員 小玉 亮子

基幹研究院人間科学系・教授

文教育学部人間社会科学科子ども学コース

博士前期課程人間発達科学専攻保育・児童学コース

博士後期課程人間発達科学専攻保育・児童学領域

専門分野: 子ども社会学、教育学

主な担当業務: ジェンダー研究所運営会議メンバー

国際共同プロジェクト INTPART



### 学内研究員 斎藤 悦子

基幹研究院人間科学系・教授

生活科学部人間生活学科・生活社会科学講座

博士前期課程ジェンダー社会科学専攻

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野: 生活経済学、生活経営学、企業文化論

主な担当業務: ジェンダー研究所運営会議メンバー



### 学内研究員 石丸 径一郎

基幹研究院人間科学系・准教授

生活科学部心理学科

博士前期課程人間発達科学専攻発達臨床心理学コース

博士後期課程人間発達科学専攻発達臨床心理学領域

専門分野: ジェンダー心理学、認知行動療法

主な担当業務: ジェンダー研究所運営会議メンバー

『ジェンダー研究』編集委員

国際共同プロジェクト INTPART



### 客員研究員 足立 真理子

(本学名誉教授)

委嘱期間:2021年4月1日~2022年3月31日

#### 研究プロジェクトタイトル

新興アジアにおけるIT-BPOの国際分業の成立とジェンダー(科学研究費基盤研究B 課題番号:20H01468)

資本と身体ジェンダー分析:資本機能の変化と『放逐』される人々



### 研究協力員 板井 広明

(専修大学経済学部准教授)

委嘱期間:2021年4月1日~2022年3月31日

#### 研究プロジェクトタイトル

資本と身体ジェンダー分析:資本機能の変化と『放逐』される人々



### 研究協力員 佐野 潤子

(慶応義塾大学ファイナンシャル・ジェロントロジー研究センター特任講師)

委嘱期間:2021年4月1日~2022年3月31日

#### 研究プロジェクトタイトル

国際共同プロジェクト INTPART

「家庭科教育とジェンダー平等」国際比較研究

女性の金融行動とジェンダー



### リサーチ・アドミニストレーター\* 吉原 公美

主担当業務:ジェンダー研究所事務局統括

- ・ジェンダー研究所全体予算管理
- ・国際共同プロジェクト INTPART ファシリテーター
- ・ジェンダー研究所(IGS)特別招聘教授招聘事務および業務活動支援
- ・グローバルリーダーシップ研究所(IGL)特別招聘教授招聘事務
- ・IGS・IGL 合同シンポジウム準備委員会
- ・各種報告書・報告データ作成
- ・国際シンポジウム等運営 ほか

\*4~9月はIGS特任リサーチフェロー、10月より現職



**アカデミック・アシスタント 稲垣 明子**

主担当業務: シンポジウム等運営関連

- ・ AIT ワークショップ事務
- ・ 研究所事業事務(大学本部各種調査対応含む)
- ・ 会計事務
- ・ IGS 史料電子化作業
- ・ 書類作成・書類整理 ほか



**アカデミック・アシスタント 梅田 由紀子**

主担当業務: 文献収集・資料整理・附属図書館収蔵資料管理関連

- ・ IGS 史料電子化プロジェクト電子化作業管理
- ・ 研究所事業事務
- ・ シンポジウム等運営事務
- ・ 会計事務
- ・ 書類作成・書類整理 ほか



**アカデミック・アシスタント 関根 里奈子**

主担当業務: 広報・情報機器管理

- ・ ウェブサイト・SNS・メーリングリスト等による情報発信・広報
- ・ シンポジウム・セミナー・研究会ポスター作成
- ・ オンラインイベント開催時の Zoom Webinar ホスト担当
- ・ 情報機器・ネットワーク管理 IGS ウェブサイト運営技術担当、情報更新作業 ほか



**アカデミック・アシスタント 滝 美香**

主担当業務: 会計事務関連

- ・ 研究所事業事務
- ・ シンポジウム等運営事務
- ・ IGS 史料電子化作業
- ・ 書類作成・書類整理 ほか



**アカデミック・アシスタント 和田 容子**

主担当業務: 成果発信関連

- ・ 年次事業報告書編集
- ・ 『ジェンダー研究』編集員
- ・ 成果発信日本語原稿校閲
- ・ IGS 史料電子化プロジェクトメタデータ構築企画立案・IGS イベントテーマ領域分類
- ・ 研究所事業事務補佐 ほか

## 【資料】②2021 年度研究プロジェクト一覧

## 1) IGS 研究プロジェクト

プロジェクト名	担当
「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究	申
東アジアの越境的女性運動	大橋
資本と身体ジェンダー分析	大橋・足立・板井
生殖医療とジェンダー	仙波
国際労働力移動のジェンダー分析	平野

## 2) 外部資金による研究プロジェクト

プロジェクト名称	期間(年度)	担当
科学研究費基盤研究 C (課題番号:19K12604) ジェンダークオータの政治学:制度化と抵抗	2019~2022	申
科学研究費基盤研究 C (課題番号:19K12603) 香港における移住女性の再生産労働力配置:「グローバル・シティ」のジェンダー分析	2019~2021	大橋
科学研究費基盤研究 C (課題番号:18K00034) 諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究	2018~2021	仙波
科学研究費基盤研究 A(課題番号:19H00607) 移民受入れ国-送出国の政策相互連関:国際社会学からの比較研究	2019~2021	平野 (分担者)
科学研究費基盤研究 B(課題番号:18H00817) 女性の政治参画の障壁:国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査	2018~2022	申 (分担者)
科学研究費基盤研究 B (課題番号:19H01578) 再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯	2019~2021	大橋 平野 (分担者)
科学研究費基盤研究 B (課題番号:20H01468) 新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー	2020~2022	大橋 足立 (分担者)
科学研究費基盤研究 C (課題番号:21K12395) インドネシア人帰還移民の再統合における労働経験の意味:移住先での労働者層別分析	2021~2023	平野 (分担者)
科研費国際共同研究加速基金(国際共同研究強化 B) (課題番号:21KK0033) 人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー	2021~2024	大橋 (分担者)

## 3) 海外の助成金によるプロジェクト

- ①ノルウェーリサーチカウンスル INTPART(戸谷・小玉・仙波・吉原・佐野)2019~2022 年度
- ②ノルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku の UTFORSK(戸谷・吉原)2021 年 8 月~2025 年 7 月
- ③デンマーク教育研究庁 (Uddannelses- og Forskningsstyrelsen)の助成プロジェクト:Reconceiving Donor Conception in Denmark and Japan (仙波)2022 年 3 月~2023 年 12 月
- ④ Konrad Adenauer Foundation (Konrad Adenauer Stiftung)の支援によるアジア 10 カ国共同研究 Substantive Representation of Women Parliamentarians and Gender Equality in Asia: A Comparative Study (申) 2021 年 2 月~2022 年 7 月

【資料】③協力研究者一覧

氏名・所属	協力事業*	参照
<b>【海外】</b>		
アヴィヤンティ・アジス (Avyanthi Azis) インドネシア大学・インドネシア	(セ)ジェンダー、エスニシティ、技能実習制度	47 頁
スティン・W・エイドリアン (Stine W. Adrian) オーホルボー大学・デンマーク	(セ) 商業的精子バンクに関する問題: 倫理・ジェンダー・社会的側面から	41 頁
ジャン・バーズレイ (Jan Bardsley) ノースカロライナ大学チャペルヒル校・米	(シ) グローバル女性リーダーシップ: アジアからの提言 『ジェンダー研究』編集委員	38 頁 106 頁
ジェニファー・ブロンラ (Jennifer Branlat) ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)	86 頁
	(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	87 頁
	(連) INTPART プロジェクト	91 頁
ロージー・キャンベル (Rosie Campbell) キングス・カレッジ・ロンドン・英	(シ) リーダーシップの地平: ジェンダー平等推進のための理論と実践	35 頁
趙成南 (チョ・ソンナム) (Cho Sung-Nam) 梨花女子大学校・韓国	(シ) グローバル女性リーダーシップ: アジアからの提言	38 頁
ケン・ダニエルズ (Ken Daniels) カンタベリー大学・ニュージーランド	(セ) 出自を知ることがなぜ重要なのか: 提供精子で生まれた人たちの経験と思い	49 頁
本田桂子 (Keiko Honda) コロンビア大学・米	(シ) グローバル女性リーダーシップ: アジアからの提言	38 頁
ルセッタ・Y・L・カム (Lucetta Y. L. Kam) 香港浸會大学・中国	(セ) 宝塚というランドスケープとジェンダー: ファンダムの文化的・地理的越境とその可能性	62 頁
グロ・コースニス・クリステンセン (Guro Korsenes Kristensen) ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	(シ) グローバル女性リーダーシップ: アジアからの提言 (国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)	38 頁 86 頁
	(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	87 頁
	(連) INTPART プロジェクト	91 頁
日下部京子 (Kyoko Kusakabe) アジア工科大学院大学・タイ	(シ) グローバル女性リーダーシップ: アジアからの提言 (連) AIT ワークショップ	38 頁 89 頁
権金炫伶 (クォン・キム・ヒョニョン) (Hyunyoung Kwonkim) 女性現実研究所・韓国	(シ) #MeToo の政治学: #MeToo が残したフェミニズムの課題を考える	32 頁
カースティン・マックロード (Kirsten MacLeod) エディンバラ・ネピア大学・英	(セ) 生理の貧困	45 頁
コリーナ・リアントプトラ (Corina Riantoputra) インドネシア大学・インドネシア	(シ) グローバル女性リーダーシップ: アジアからの提言	38 頁

氏名・所属	協力事業*	参照
<b>【海外】</b>		
プリシラ・リングローズ (Priscilla Ringrose) ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)	86 頁
	(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	87 頁
	(連) INTPART プロジェクト	91 頁
ルイン (Ruin) トランスジェンダー・ケア研究所・韓国	(シ) #MeToo の政治学: #MeToo が残したフェミニズムの課題を考 える	32 頁
カレン・アン・シャイア (Karen Ann Shire) デュースブルグ・エッセン大学・独	(シ) グローバル女性リーダーシップ: アジアからの提言	38 頁
	『ジェンダー研究』編集委員	106 頁
シリ・エイスレボ・ソレンセン (Siri Øyslebø Sørensen) ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)	86 頁
	(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	87 頁
	(連) INTPART プロジェクト	91 頁
<b>【国内】</b>		
足立加勇 (Kayu Adachi) 東京造形大学ほか	(セ) 戦争と美少女: エンターテインメントとしての戦いの表象	52 頁
ワオデ・ハニファー・イスティコマー (Waode Hanifah Istiqomah) 一橋大学大学院博士後期課程	(セ) ジェンダー、エスニシティ、技能実習制度	47 頁
大木直子 (Naoko Oki) 椋山女学園大学	(シ) リーダーシップの地平: ジェンダー平等推進のための理論と 実践	35 頁
小ヶ谷千穂 (Chiho Ogaya) フェリス女学院大学	(セ) 移住労働者の子どもたち	54 頁
香川檀 (Mayumi Kagawa) 武蔵大学	(シ) ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在	29 頁
金井 郁 (Kaoru Kanai) 埼玉大学	『ジェンダー研究』編集委員	106 頁
菊地夏野 (Natsuno Kikuchi) 名古屋市立大学	(シ) #MeToo の政治学: #MeToo が残したフェミニズムの課題を考 える	32 頁
北原恵 (Megumi Kitahara ) 大阪大学	(シ) ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在	29 頁
	『ジェンダー研究』編集委員	106 頁
吉良智子 (Tomoko Kira) 日本女子大学	(シ) ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在	29 頁
レティツィア・グアリーニ (Letizia guarini) 国際基督教大学	(セ) 日本文学における父娘関係: 欲望・暴力・支配・抵抗	43 頁
巢内尚子 (Suani Naoko) 東京学芸大学 / ラバル大学大学 院博士後期課程・カナダ	(セ) ジェンダー、エスニシティ、技能実習制度	47 頁

氏名・所属	協力事業*	参照
<b>【国内】</b>		
高畑幸 (Sachi Takahata) 静岡県立大学	(セ) 移住労働者の子どもたち	54 頁
田中由美子 (Yumiko Tanaka) 城西国際大学	(セ) 国際協力とジェンダー・トランスフォーメティブ・アプローチ	60 頁
張璋容 (Wei-Jung Chang) 同志社女子大学	(セ) 宝塚というランドスケープとジェンダー:ファンダムの文化的・地理的越境とその可能性	62 頁
中嶋泉 (Izumi Nakajima) 大阪大学	(シ) ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在	29 頁
長島美紀 (Miki Nagashima) プラン・インターナショナル・ジャパン	(セ) 生理の貧困	45 頁
英美由紀 (Miyuki Hanabusa) 藤女子大学	(セ) 『ルッキズム』: 女性美をめぐる理論と表象から	64 頁
三浦まり (Mari Miura) 上智大学	『ジェンダー研究』編集委員	106 頁
由井秀樹 (Hideki Yui) 山梨大学	(セ) 不妊と男性のセクシュアリティ	56 頁
<b>【学内】</b>		
佐々木泰子 (Yasuko Sasaki) 学長	(シ) グローバル女性リーダーシップ: アジアからの提言	38 頁
石井クンツ昌子 (Masako Ishii-Kuntz) 理事・副学長・グローバル女性リーダー育成研究機構	(シ) リーダーシップの地平: ジェンダー平等推進のための理論と実践	35 頁
	(シ) グローバル女性リーダーシップ: アジアからの提言	38 頁
	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)	86 頁
	(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	87 頁
	(連) INTPART プロジェクト	91 頁
小林誠 (Makoto Kobayashi) 基幹研究院人間科学系・グローバルリーダーシップ研究所	(シ) リーダーシップの地平: ジェンダー平等推進のための理論と実践	35 頁
	(シ) グローバル女性リーダーシップ: アジアからの提言	38 頁
	(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	87 頁
天野知香 (Chika Amano) 基幹研究院人文科学系	(シ) ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在	29 頁
	『ジェンダー研究』編集委員	106 頁
水野勲 (Chika Amano) 基幹研究院人間科学系	『ジェンダー研究』編集委員	106 頁
森義仁 (Yoshihito Mori) 基幹研究院自然・応用科学系	『ジェンダー研究』編集委員	106 頁
倉光ミナ子 (Minako Kuramitsu) 基幹研究院人間科学系	『ジェンダー研究』編集委員	106 頁

氏名・所属	協力事業*	参照
<b>【学内】</b>		
石丸径一郎 (Keiichiro Ishimaru) 基幹研究院人間科学系	『ジェンダー研究』編集委員	106 頁
本林響子 (Motobayashi Kyoko) グローバルリーダーシップ研究所	(シ)グローバル女性リーダーシップ:アジアからの提言	38 頁
松田デレク (Derek Matsuda) 国際教育センター	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)	86 頁
	(国) Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	87 頁
	(連) INTPART プロジェクト	91 頁
脇田彩 (Aya Wakita) 基幹研究院人間科学系	『ジェンダー研究』編集委員	106 頁
キャロル マイルズ (Myles Carroll) 基幹研究院人間科学系	(シ)リーダーシップの地平:ジェンダー平等推進のための理論と実践	35 頁
宝月理恵 (Rie Hogetsu) グローバルリーダーシップ研究所	(シ)グローバル女性リーダーシップ:アジアからの提言	38 頁
岡村利恵 (Rie Okamura) グローバルリーダーシップ研究所	(シ)グローバル女性リーダーシップ:アジアからの提言	38 頁
内藤章江 (Akie Naitoh) グローバルリーダーシップ研究所	(シ)グローバル女性リーダーシップ:アジアからの提言	38 頁
菊地優美 (Yumi Kikuchi) 基幹研究院リサーチフェロー/ 日本大学ほか	(セ)日本文学における父娘関係:欲望・暴力・支配・抵抗	43 頁
竹家一美 (Kazumi Takeie) 非常勤講師	(セ)不妊と男性のセクシュアリティ	56 頁
ズザンナ・バラニャク平田 (Zuzanna Baraniak-Hirata) 博士後期課程	(セ)宝塚というランドスケープとジェンダー:ファンダムの文化的・地理的越境とその可能性	62 頁

\* (シ) シンポジウム、(セ) セミナー・国際フォーラム、(国) 国際共同研究プロジェクト、(連) 国際ネットワーク

【資料】④シンポジウム・セミナー一覧

開催日	イベント詳細	参照
<b>IGS 主催シンポジウム</b>		
12/18	<p>シンポジウム ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在</p> <p>【司会】天野知香(お茶の水女子大学教授)</p> <p>【パネリスト】吉良智子(日本女子大学学術研究員) 中嶋泉(大阪大学准教授) 天野知香(お茶の水女子大学教授) 北原恵(大阪大学名誉教授)</p> <p>【ディスカッサント】香川檀(武蔵大学教授)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【協力】イメージ&amp;ジェンダー研究会</p> <p>【言語】日本語</p> <p>【参加者数】208 名</p>	29 頁
<b>IGS 主催国際シンポジウム</b>		
1/21	<p>国際シンポジウム #MeToo の政治学: #MeToo が残したフェミニズムの課題を考える</p> <p>【司会】申琪榮(IGS 教授)</p> <p>第 1 部 ドキュメンタリー映画『アフターMeToo』監督とのトーク</p> <p>【パネリスト】カンユ・カラム(監督) 濱田真里(ジェンダー総合研究所共同代表) 金李イスル(翻訳家)</p> <p>第 2 部 国際シンポジウム『#MeToo の政治学』</p> <p>【パネリスト】権金炫恰(女性現実研究所代表) ルイン(トランスジェンダー・クィア研究所専任研究員) 菊地夏野(名古屋市立大学准教授)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所/日本学術振興会基盤研究(C)『ジェンダークオータの政治学: 制度化と抵抗』</p> <p>【言語】日韓(同時通訳)</p> <p>【参加者数】329 名</p>	32 頁
<b>グローバル女性リーダー育成研究機構主催 国際シンポジウム</b>		
11/15	<p>国際シンポジウム[シリーズ: アジアにおける女性リーダーシップを考える 1] リーダーシップの地平: ジェンダー平等推進のための理論と実践</p> <p>Leadership for All: Theory and Action to Foster Gender Equality</p> <p>【基調講演】ロージー・キャンベル(キングス・カレッジ・ロンドン教授/女性リーダーシップグローバル研究所長)</p> <p>【ディスカッサント】キャロル マイルズ(お茶の水女子大学助教/IGL 研究員) 大木直子(椋山女学園大学講師、IGL 客員研究員) 申琪榮(お茶の水女子大学 IGS 教授)</p> <p>【パネルディスカッションモデレーター】小林誠(お茶の水女子大学教授/IGL 所長)</p> <p>【司会】戸谷陽子(お茶の水女子大学教授/IGS 所長)</p> <p>【趣旨説明】石井クヰツ昌子(お茶の水女子大学理事・副学長/グローバル女性リーダー育成研究機構長)</p> <p>【主催】お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構 [グローバルリーダーシップ研究所(IGL)、ジェンダー研究所(IGS)]</p> <p>【言語】日英(同時通訳)</p> <p>【参加者数】167 名</p>	35 頁

開催日	イベント詳細	参照
<b>グローバル女性リーダー育成研究機構主催 国際シンポジウム</b>		
2/18	<p>国際シンポジウム[シリーズ:アジアにおける女性リーダーシップを考える 4]            グローバル女性リーダーシップ:アジアからの提言            Global Women's Leadership: Proposals from Asia  <b>【開会挨拶・趣旨説明】</b> 佐々木泰子(お茶の水女子大学長)            第1部 実践編:決断し、行動する[本学および附属学校園卒の女性リーダーたちによる講演会]  <b>【講演】</b> 本田桂子(コロンビア大学 Adjunct Professor、元世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官兼 CEO)[お茶の水女子大学卒業生]  <b>【ビデオメッセージ】</b> 山崎直子(宇宙飛行士)[お茶の水女子大学附属高等学校卒業生]  <b>【第1部司会】</b> 宝月理恵(IGL 特任講師)            第2部 成果編:探究し、発信する[2015年度からのグローバル女性リーダー育成研究機構(IGL・IGS)の成果報告]  <b>【第2部趣旨説明】</b> 石井クツ昌子(お茶の水女子大学理事・副学長/グローバル女性リーダー育成研究機構長)  <b>【報告:IGL】</b> 小林誠(お茶の水女子大学教授/IGL 所長)                              岡村利恵(IGL 特任講師)                              内藤章江(IGL 特任講師)  <b>【報告:IGS】</b> 戸谷陽子(お茶の水女子大学教授/IGS 所長)            申琪榮(IGS 教授)            仙波由加里(IGS 特任講師)            平野恵子(IGS 特任講師)  <b>【第2部進行役】</b> 本林響子(IGL 副所長・准教授)            第3部 研究編:見極め、捉え直す[IGL・IGS の特別招聘教授・連携研究者を交えての討論]  <b>【基調講演】</b> 趙成南(梨花女子大学校名譽教授)[2020~2021年度 IGL 特別招聘教授]                              日下部京子(アジア工科大学院大学教授)[IGS 連携研究者]  <b>【ディスカッサント】</b> コリーナ・リアントプトラ(インドネシア大学准教授)[2021年度 IGL 特別招聘教授]                              グロ・クリステンセン(ノルウェー科学技術大学教授)[IGS 連携研究者]                              カレン・シャイア(デュースブルグ・エッセン大学教授)[2016~2018年度 IGL 特別招聘教授]                              ジャン・パーズレイ(ノースカロライナ大学チャペルヒル校名譽教授)[2018~2019年度 IGS 特別招聘教授]  <b>【第3部司会】</b> 石井クツ昌子(お茶の水女子大学理事・副学長/グローバル女性リーダー育成研究機構長)  <b>【閉会挨拶】</b> 戸谷陽子(お茶の水女子大学教授/IGS 所長)  <b>【主催】</b> お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構                              [グローバルリーダーシップ研究所(IGL)、ジェンダー研究所(IGS)]  <b>【言語】</b> 日英(同時通訳)  <b>【参加者数】</b> 137名</p>	38 頁
<b>IGS 主催 IGS セミナー</b>		
7/2	<p>生殖領域シリーズ            商業的精子バンクに関する問題:倫理・ジェンダー・社会的側面から            Issues Regarding Commercial Sperm Banks from the Ethical, Gender and Social Perspectives  <b>【司会】</b> 仙波由加里(IGS 特任講師)  <b>【講演】</b> スティン・W・エイドリアン(オールボー大学准教授)  <b>【主催】</b> ジェンダー研究所  <b>【言語】</b> 英語(日本語逐次通訳)  <b>【参加者数】</b> 138名</p>	41 頁

開催日	イベント詳細	参照
<b>IGS 主催 IGS セミナー</b>		
7/8	日本文学における父娘関係:欲望・暴力・支配・抵抗 【司会】 戸谷陽子(お茶の水女子大学教授/IGS 所長) 【研究報告】 レティツィア・グアリーニ(国際基督教大学ジェンダー研究センター助教) 菊地優美(お茶の水女子大学基幹研究院リサーチフェロー/日本大学他非常勤講師) 【主催】 ジェンダー研究所 【言語】 日本語 【参加者数】 64 名	43 頁
7/16	生殖領域シリーズ 生理の貧困 Period Poverty 【司会】 仙波由加里(IGS 特任講師) 【講演】 カースティン・マックロード(エディンバラ・ネピア大学准教授) 長島美紀(プラン・インターナショナル・ジャパン 研究者) 【主催】 ジェンダー研究所 【言語】 英語(日本語逐次通訳) 【参加者数】 154 名	45 頁
7/23	ジェンダー、エスニシティ、技能実習制度 Gender, Ethnicity, Technical Intern Training Program 【司会】 平野恵子(IGS 特任講師) 【講師】 巢内尚子(ラバル大学大学院博士後期課程/東京学芸大学特任講師) ワオデ・ハニファー・イスティコマー(一橋大学大学院博士後期課程) 【ディスカッサント】 アヴィヤンティ・アジス(インドネシア大学講師) 【主催】 ジェンダー研究所 【共催】 科研費・基盤 B「再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯」(19H01578) 【言語】 日英(同時通訳) 【参加者数】 117 名	47 頁
8/29	国際フォーラム[生殖領域シリーズ] 出自を知ることがなぜ重要なのか:提供精子で生まれた人たちの経験と Why Is the Right to Know Important? The Experiences and Thoughts of Donor-conceived People 【司会】 仙波由加里(IGS 特任講師) 【講演】 ダミアン・アダムス(オーストラリアの AID 出生者) リーン・バスチアンセン(ベルギーの AID 出生者) 加藤英明(日本の AID 出生者) 石塚幸子(日本の AID 出生者) 【ディスカッサント】 ケン・ダニエルズ(カンタベリー大学、ソーシャルワーカー) 【主催】 ジェンダー研究所 【共催】 科研費・基盤 C「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究」 【言語】 日英(同時通訳) 【参加者数】 187 名	49 頁
10/22	戦争と美少女:エンターテイメントとしての戦いの表象 【司会】 大橋史恵(IGS 准教授) 【講演】 足立加勇(東京造形大学・立教大学講師) 【ディスカッサント】 関根里奈子(大正大学他講師/一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程/IGS アカデミック・アシスタント) 【主催】 ジェンダー研究所 【言語】 日本語 【参加者数】 90 名	52 頁

開催日	イベント詳細	参照
<b>IGS 主催 IGS セミナー</b>		
10/30	<p>移住労働者の子どもたち Children of Migrant Workers</p> <p>【司会】平野恵子(IGS 特任講師)</p> <p>【講師】ヨガ・プラスティヨ(移住労働研究者、フリーランス通訳・翻訳者) 小ヶ谷千穂(フェリス女学院大学教授)</p> <p>【ディスカッサント】高畑幸(静岡県立大学教授)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【言語】日英(同時通訳)</p> <p>【参加者数】63名</p>	54 頁
11/26	<p>生殖領域シリーズ 不妊と男性のセクシュアリティ</p> <p>【司会】仙波由加里(IGS 特任講師)</p> <p>【講演】由井秀樹(山梨大学大学院総合研究部医学域社会医学講座 特任助教) 竹家一美(お茶の水女子大学他 非常勤講師)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【言語】日本語</p> <p>【参加者数】109名</p>	56 頁
12/1	<p>学内限定セミナー 教育とジェンダー、世界と日本:2030年にむけて今日の課題</p> <p>【司会】平野恵子(IGS 特任講師)</p> <p>【講演】菅野琴(元ユネスコネパール事務所長・ユネスコ代表)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【言語】日本語</p> <p>【参加者数】16名</p>	58 頁
12/15	<p>国際協力とジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ</p> <p>【司会】平野恵子(IGS 特任講師)</p> <p>【講演】田中由美子(城西国際大学招聘教授・国連女性の地位委員会(CSW)日本代表)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【言語】日本語</p> <p>【参加者数】47名</p>	60 頁
2/24	<p>宝塚というランドスケープとジェンダー:ファンダムの文化的・地理的越境とその可能性 Takarazuka as Gendered Landscapes:Transculturality/Translocality of Fandom and its Possibilities</p> <p>【司会】大橋史恵(IGS 准教授)</p> <p>【講演】ルセッタ Y・L・カム(香港浸會大学准教授) ズザンナ・バラニャク平田(お茶の水女子大学大学院博士後期課程)</p> <p>【ディスカッサント】張瑋容(同志社女子大学助教)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【言語】日英(同時通訳)</p> <p>【参加者数】132名</p>	62 頁
3/22	<p>『ルッキズム』:女性美をめぐる理論と表象から</p> <p>【司会】戸谷陽子(お茶の水女子大学教授/IGS 所長)</p> <p>【報告】英美由紀(藤女子大学教授)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【言語】日本語</p> <p>【参加者数】66名</p>	64 頁

開催日	イベント詳細	参照
<b>IGS 主催 IGS 研究会</b>		
3/24	<p>IGS 研究協力員研究報告会</p> <p>【司会】 仙波由加里 (IGS 特任講師)</p> <p>【挨拶・コメント】 戸谷陽子 (IGS 所長／お茶の水女子大学教授)</p> <p>【報告】 板井広明 (専修大学准教授／IGS 研究協力員) 佐野潤子 (慶応義塾大学特任講師／IGS 研究協力員)</p> <p>【主催】 ジェンダー研究所</p> <p>【言語】 日本語</p> <p>【参加者数】17 名</p>	66 頁
<b>IGS 後援</b>		
9/18	<p>日本フェミニスト経済学会 2021 年度大会</p> <p>共通論題「コロナ災害があらわにした女性のいのちとくらしの課題」</p> <p>【座長】 中原朝子 (神戸大学)</p> <p>【トークセッション】 雨宮処凛 (作家・活動家)／伊田久美子 (大阪府立大学名誉教授)</p> <p>【報告】 Carlos, Maria Reinaruth Desiderio (龍谷大学)／湯澤直美 (立教大学)／大沢真理 (東京大学名誉教授)</p> <p>【コメント】 丸山里美 (京都大学)／三山雅子 (同志社大学)</p> <p>【司会】 小ヶ谷千穂 (フェリス学院大学)／中原朝子 (神戸大学)</p> <p>【後援】 ジェンダー研究所／早稲田大学ジェンダー研究所／早稲田大学平和学研究所</p>	68 頁

## 【資料】⑤2021 年度新規収蔵図書・資料

・2021 年度、寄贈により以下の書籍が新規収蔵された。〔寄贈者名『書名』(著者名)〕(敬称略)

大月書店『#MeToo の政治学』(金炫怜[著]), 鄭喜鎮[著編], 桐峯昀[著], ルイン[著], 申琪榮[監修], 金李イスル[翻訳]／亀口まか『河口嗣郎の男女平等思想 近代日本の婦人問題論とジェンダー』(亀口まか) 小金井女性史を作る会『小金井の女性たち : 時代を歩む : 聞き書き集』(小金井女性史を作る会[編])／NPO 法人フォトボイス・プロジェクト『被災した女性たちが提示する防災・復興の課題 : 東日本大震災のフォトボイス』(フォトボイス・プロジェクト編)／中西直樹『仏教婦人雑誌の創刊』(岩田真美, 中西直樹)／晃洋書房『フェミニズムはもういない、と彼女は言うけれど』(高橋幸)／仙波由加里『薬学生のための医療倫理』(松島哲久・宮島光志編)

・2021 年度、寄贈、購入によりジェンダー研究所から以下の書籍が新規収蔵された。〔『書名』(著者名)〕

『Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway』(Masako Ishii-Kuntz/Guro Korsnes Kristensen/Priscilla Ringrose)／『Gender, Culture, and Disaster in Post-3.11 Japan』(Mire Koikari)／『Home care fault lines : understanding tensions and creating alliances』(Cynthia J. Cranford)／『IGS 国際セミナー(生殖領域)報告書』IGS Project Series ;18(お茶の水女子大学ジェンダー研究所)／『アニメの社会学—アニメファンとアニメ制作者たちの文化産業論』(永田大輔[編])／『アンチ・アクション: 日本戦後絵画と女性画家』(中嶋泉)／『概説 ジェンダーと人権』(辻村みよ子/糖塚康江/谷田川知恵)／『〈家父長制〉は無敵じゃない: 日常からさぐるフェミニストの国際政治』シンシア・エンロー[著], 佐藤文香[監訳]／『韓国女性関係資料 韓末女性誌』(梨花女子大学 韓国女性研究所[編])／『ケアするのは誰か?: 新しい民主主義のかたちへ』(ジョアン・C・トロント[著]/岡野八代[訳・著])／『下田歌子と近代日本(実践女子大学下田歌子記念総合研究所 研究叢書第1巻)』(広井多鶴子[編著])／『社会再構築の挑戦: 地域・多様性・未来』(谷富夫/稲月正/高畑幸[編著])／『ジェンダー研究 第24号(通巻41号)』(お茶の水女子大学ジェンダー研究所)／『ジェンダー・選挙・女性の政治的代表性—2019年インドネシア総選挙に関する分析(東アジアにおけるジェンダーと政治 Booklet series ;3, IGS Project Series ;19)』(お茶の水女子大学ジェンダー研究所)／『ジェンダー分析で学ぶ 女性史入門』(総合女性史学会)／『女性画家たちの戦争』(吉良智子)／『女性たちの保守運動: 右傾化する日本社会のジェンダー』(鈴木彩加)／『女性の暮らしと生活意識データ集<2022>』(三冬社編集制作部)／『戦後女性教員史: 日教組婦人部の労働権確立運動と産休・育休の制度化過程』(跡部千慧)／『想起のかたち 記憶アートの歴史意識』(香川檀)／『男女共同参画社会データ集<2021>』(三冬社編集制作部)／『哲学者と皇太子妃: 冷戦期日本における自由と愛と民主主義: 国際シンポジウム = The philosopher and the Princess : freedom, love, and democracy in Cold War Japan : international symposium』IGS Project Series ;14(お茶の水女子大学ジェンダー研究所)／『はじめてのジェンダーと開発—現場の実体験から』(田中由美子ほか[編著])／『ハンナ・ヘーヒ: 透視のイメージ遊戯』(香川檀)／『被差別部落女性の主体性形成に関する研究』(熊本理沙)／『一人っ子政策と中国社会』(小浜正子)／『ひれふせ、女たち: ミソジニーの論理』(ケイト・マン[著], 小川芳範[訳])／『法制度における男性差別』(ポール・ナサンソン+キャサリン・K・ヤング)／『百合子とたか子』(岩本美砂子)

・2021 年度、寄贈、購入によりジェンダー研究所から以下の雑誌が新規収蔵された。〔『雑誌名』(発行者名)〕

『Asian women's liberation = アジアと女性解放』(アジアの女たちの会)／『HAND IN HAND』(円よりこ)／『月刊お母さん now(ナウ)= Women's culture magazine』(大空社)／『女のひろば』(名古屋市市民局広報相談部婦人問題担当室)／『ジェンダー法研究』(信山社)

【資料】⑥史料電子化プロジェクト：電子化イベント一覧

女性文化資料館(1975-1985)/女性文化研究センター(1986-1995)イベント一覧				
年度	活動区分	開催日	イベントタイトル	登壇者
1977	講演会	1977/9/22	湯浅年子先生講演会	湯浅年子
(S52)	シンポジウム	1978/1/14	シンポジウム	
	研究会	1978/2/8	山川菊栄と女性解放思想(木下 研究会)	
	研究会	1978/3/6	社会学における家族	
	研究会	1978/3/22	山川菊栄研究	
1978	研究会	1978/6/6	女性史研究会 欧米の女性論	
(S53)	研究会	1978/7/27	女性史研究会 欧米の女性論	
1979	研究会	1979/5/24	女性の教育と女性問題	
(S54)	研究会	1979/10/4	アメリカ婦人労働の法的諸問題	
	シンポジウム	1980/1/26	総合科目「婦人問題」に関するシンポジウム	
	研究会	1980/2/12	中山みきの思想と歩み—陽気づくめの世界をめざして 50 年—	吉原敬子
		1980/3/1	杉田和子、小島栄子、岩本のり子 於: 中村屋	
1980	研究会	1980/4/1	平安時代の相続制と女子相続権—『平安遺文』文書を中心として—	服藤早苗
(S55)	研究会	1980/4/23	〔マーガレット・ミードの女性研究Ⅰ〕	村松弘子ほか
	研究会	1980/5/29	〔マーガレット・ミードの女性研究Ⅱ〕	田中和子ほか
	研究会	1980/7/3	インドにおける女性の政治的役割	Chandra Mudaliar
	研究会	1980/10/18	〔コペンハーゲン婦人会議及び婦人差別撤廃条約について〕【婦人問題懇話会 講演会】	船橋邦子ほか
	研究会	1980/10/20	性役割とセクシズム	小林啓子
	研究会	1980/11/5	Feminist Literary Criticism からみた『砂の女』	Chigusa Kimura-Steven
	研究会	1980/12/25	目黒依子『女役割』について	田中和子ほか
	研究会	1981/2/12	アメリカの女性史	金子幸子ほか
	研究会	1981/3/27	フランス社会史の動向と女性史	小島智恵
1981	研究会	1981/5/27	人類学者のみた個人的アメリカ女性史	Frederica de Laguna
(S56)	研究会	1981/5/29	Role's of Women's College	Frederica de Laguna
	研究会	1981/6/12	『性の署名』について(1)	内藤和美ほか
	研究会	1981/7/4	『性の署名』について(2)	平川和子
	研究会	1981/7/12	高群逸枝の婚姻・家族形態研究の意義について	関口裕子
	研究会	1981/9/9	カナダの女性学について	Patricia Morley ほか
	研究会	1981/10/16	家族・親族理論研究動向	田中真砂子
	研究会	1981/11/25	兼業農家女性の就労形態の変容—長野県諏訪地方の場合—	久保桂子
	研究会	1981/12/15	オーストラリアと日本の婦人運動／ニューージーランドの女性の地位について	Romanovsky Ulrike ほか
	研究会	1982/1/27	千葉県における廃娼運動—国防婦人会との関連において—	船橋邦子
	研究会	1982/3/24	近現代日本の社会教育と婦人団体	木下 ユキエ
1982	研究会	1982/4/23	女子大学の存在意義を考える—アメリカ・フランス・インド等の各国を見て—	広中和歌子

(S57)	研究会	1982/5/22	女性学研究会 井上輝子、目黒依子		
	研究会	1982/6/4	近世における女性と家族	林玲子ほか	
	研究会	1982/10/22	平安時代の養子制度について—日本家族の特質をテーマに—	William McCullough ほか	
	研究会	1982/11/24	バングラディッシュの女性について	武藤敦子	
	研究会	1982/12/13	Consort, mother, beloved, "Vamp"; the symbolic depiction of womanhood in Indian calendar art	Patricia Uberoi ほか	
	研究会	1983/1/24	出産の社会史—家族の近代化に関連して—	落合恵美子	
	研究会	1983/2/15	韓国の女性について	鄭金子ほか	
	研究会	1983/3/22	『巫女の文化』について—古代女性史の見直しのために—	倉塚暉子ほか	
1983	研究会	1983/5/30	ガブリエラ・ミストラルと『女性読本』について	田村さと子	
(S58)	研究会	1983/6/30	Japanese-German Marriage in Japan: a tentative approach	Irene Hardach-Pinke	
	研究会	1983/7/29	『性の深層』をめぐって—現代西ドイツの女性運動との関連で—	大沢三枝子	
	研究会	1983/9/26	『妻と夫の社会史』について	山本郁子ほか	
	研究会	1983/11/1	女性の側からジェンダーを考える	若井文恵ほか	
	研究会	1983/11/21	Intellectual Differences between Woman and Man "Inherited or Acquired?"	Virginia Mann ほか	
	研究会	1983/12/15	機械女工たちの近代	古庄正	
	研究会	1984/2/22	『婦女新聞』の出發	石崎昇子ほか	
	研究会	1983/3/13	フィリップ・アリエス研究—子ども・教育・女性—	波多野完治ほか	
1984	研究会	1984/4/24	日本の離婚調停に関する研究	Taimie Bryant	
(S59)	研究会	1984/5/15	『更級日記』作者の宗教的コンプレックス	高木きよ子	
	講演会	1984/5/31	お茶の水女子大学百年史刊行記念講演会	林太郎ほか	
	研究会	1984/6/20	キリスト教文化と女性	杉田弘子	
	研究会	1984/7/6	The Function of Libraries, Women' Centers, and "Women's Studies" in doing Feminist Research	Helen Wheeler ほか	
	研究会	1984/10/23	『私生子』概念の発生と消長—明治期を中心とする法制・歴史と実際の扱い—	田中弘子	
	研究会	1984/11/20	Woman and Nature	Susan Griffin ほか	
	研究会	1984/12/11	中国女性史研究—小野和子『中国女性史』を読んで—	加藤直子	
	研究会	1985/2/25	樋口一葉の文学—『十三夜』と『人形の家』の比較を中心に—	フランシスカ・フンチカ	
	研究会	1985/3/14	近世関東農村における女性労働者の存在形態—年季・日雇奉公人の分析から—	青木道子	
1985	研究会	1985/4/26	ユートピアと性	倉塚平	
(S60)	研究会	1985/5/29	西欧近代の結婚観—キルケゴールをめぐって—	野村明代	
	研究会	1985/6/12	清代において模範とされている女性について	Susan Mann	
	研究会	1985/6/13	食事が子供の身体と心に与えるもの		
	研究会	1985/7/4	韓国女性の政治的、社会的地位	白京男	
			1985/10/5	第三世界の女性たちと私たち—ナイロビ報告(日本婦人問題懇話会)	
	研究会	1985/10/28	『源氏物語』にみる婚姻と居住形態と相続—光源氏と紫の上と明石君をめぐる—視角—	木下ユキエ	
	研究会	1985/11/15	主婦とテレビ	香取淳子	
	シンポジウム	1985/11/27	産むことを考える	加藤シヅエほか	
	研究会	1985/12/18	イタリア女性解放思想の歴史と今日的な段階—19世紀末から現在に至る主要な事項—	Argnani Fausta	

	研究会	1986/1/16	スイスにおける女性史研究—論文集『女性』と『イティネラ』にみる女性史家の研究動向—	佐藤るみ子
	研究会	1986/3/3	「円地文子論—"自然な女"の周辺—」	宮内淳子
1986	研究会	1986/4/25	フランス現代女性思想の流れ—ボーヴォワール・クリスティヴァ・イリガライ	棚沢直子
(S61)	研究会	1986/6/24	日本文化における『悪女』	Valerie・L・Durham
	研究会	1986/10/3	航空史における女性の役割—ドイツ女性スポーツ史の視角から	Gertrud Pfister
	研究会	1986/11/20	韓国の家族について	徐炳淑
	研究会	1986/12/8	バングラディッシュの女性—女性政策の視点から—	Jowshan Ara Rahman (ほか)
	研究会	1987/1/14	中東世界の女性—イスラームの原理と実像	黒田美代子
	研究会	1987/3/3	マレーシアの女性	Goh Beng Lan
1987	研究会	1987/4/23	公民の妻/青年団における女子活動の設立	渡辺洋子(ほか)
(S62)	研究会	1987/5/15	Impact of Economics & Technological Change on Women	Tamara・Hareven
	研究会	1987/6/24	円地文子の描いた女性像	アイリーン・マイカルス・アダチ
	研究会	1987/7/14	家計構造の長期的変容	田窪純子
	研究会	1987/8/25	舞踊と語り……祖母の語りとその姿	江川まゆみ
	研究会	1987/10/26	ラテン・アメリカの女性像	三田千代子
	研究会	1987/11/25	和泉式部と仏教	小野美智子
	研究会	1987/12/16	タイ社会における女性の役割	小野沢・ニッタヤー
	研究会	1988/2/10	日本における転勤の問題とデュアル・キャリア・ファミリーについて	青木由紀
	研究会	1988/3/10	新しい家庭科をめざして	西谷洋子
	研究会	1988/3/10	家庭科における消費者教育	小関禮子
1988	研究会	1988/4/11	Income Generation of Women in Rural Bangladesh	Kohinoor Begum
(S63)	研究会	1988/5/26	South Asian Women: Challenges & Prospects	Urmila Phadnis
	研究会	1988/6/22	Some Implications of Women's Status in China	Beverly Y. B. Hong
	研究会	1988/7/8	性役割意識に関連する韓国人の価値観	金炳端
	研究会	1988/9/7	こどもの虐待と放置—小児科の全国調査から—	内藤和美
	研究会	1988/11/25	フェミニスト研究の軌跡—Stanley & Wise の『フェミニズム社会科学に向かって』が提起するもの—	矢野和江
	研究会	1989/2/21	アジアにおける女性と仕事	Noeleen Heyzer
	研究会	1989/3/7	日本のフェミニストの意識と alternative な生活スタイル	ゴー・ベン＝ラン
1989	研究会	1989/4/5	男女平等教育の実践に向けて	Peggy McIntosh
(H1)	研究会	1989/4/14	Education of Scientist who Happen to Be Women	Emily L. Wic
	研究会	1989/6/1	鎌倉期の乳父について—その存在形態と乳母との関連	秋山貴代子
	研究会	1989/6/12	Modernisation en Iran et Le Changement Socio-cultural de Role de la Femme	Nasrin F. Hakami
	研究会	1989/7/17	Problems of Homeless Children in India	Rajani Paranjipe
	合評会	1989/9/11	原ひろ子著『ヘアー・インディアンとその世界』について	田中真砂子
	研究会	1989/10/4	スペイン内戦下の女性たち	秋山充子
	研究会	1989/11/17	Women and / in Media	Ann Simonton
	シンポジウム	1989/12/13	お茶の水女子大学留学生懇談会	

	シンポジウム	1989/11/29 ,12/20,199 0/3/19	特定研究「女性のライフコースの多様化と女子大学の役割」	Peggy McIntosh
1990 (H2)	シンポジウム	1990/4/23, 24	『母性』をめぐる日独シンポジウム	館かおるほか
	研究会	1990/5/18	Systematic Planning for Women's in Development and Activities	Barbara Knudson
	研究会	1990/6/14	マレー農村社会における性役割—東南アジアの伝統とイスラム規範のはざまにて	花見慎子
	研究会	1990/6/26	Women's Mothering and Working Roles in Japan and the United States	Brenda Bankart
	研究会	1990/9/25	中央ユーラシア遊牧民の歴史にみる女性像	宮脇淳子
	研究会	1990/10/23	福沢諭吉の女性論	杉原名穂子
	研究会	1990/11/22	日本近代女性の自伝を読む	Ronald P. Loftus
	研究会	1990/12/5	精神的母性	Elisabeth Gössmann
	研究会	1991/3/13	女性の自然科学研究者の進路決定要因の研究について	ビヴァリー・ゲッツイ
1991 (H3)	研究会	1991/5/29	大正時代の『令女会』の歌曲—女学生の歌唱と女学生向け創作歌曲の一考察	坂本麻実子
	研究会	1991/6/10	An Anthropological Study of Gender Science in Japan & U.S.	Sharon Traweck
	研究会	1991/6/18	To a Safer Place	Dane Raphael
	研究会	1991/10/4	Woman's Movement in Comparative Perspective	Ilse Lenz
	研究会	1991/10/9	Women of the Tlingit Society in Historical Perspective	Frederica de Laguna
	研究会	1991/10/31	Confusionism and Modern Chinese Women's Family Life	黄育馥
	研究会	1991/11/15	フェミニズムの方法としてのメモリーワーク	Frigga Haug ほか
	研究会	1991/11/19	クリスティヴァ『女の時間』を読む	棚沢直子
	研究会	1991/12/19	The Situation of the Swedish Women Today	Malin Ronnblom
	研究会	1992/1/30	自治体における女性学	栗国千恵子
	研究会	1992/2/12	中国の少数民族における女性	劉耀荃
	研究会	1992/2/20	アメリカ女性学の現段階: 女性学の理論家と県空者養成システム	三宅義子
	研究会	1992/3/13	『女性と労働』日独シンポジウム	
1992 (H4)	研究会	1992/4/15	Women's Studies in Canada	Naomi Black
	研究会	1992/4/20	Sexuality and Reproduction in Women's Utopian Dystopian Literature	Blaine Martin
	研究会	1992/6/19	湯浅年子博士資料的研究の歩み	松田久子
	研究会	1992/6/22	ジェーン・アダムスの思想と行動	米澤正雄
	研究会	1992/7/20	女性と開発をめぐる諸問題	村松安子
	研究会	1992/10/26	沖縄における女性の就労と性役割分業観	国吉和子
	講座	1992/11/21 ,28,12/5	次世代育成力を考える	原ひろ子ほか
研究会	1993/1/28	南インド・ナガラッターールにおける親族・婚姻及び女性	西村祐子	
1993 (H5)	研究会	1993/5/18	中国における職業分化に伴う女性の価値観と行為方式の変化について	沙蓮香
	研究会	1993/6/24	女性と表彰—"模範嫁"表彰の聞き取り調査をめぐって—	熊澤知子
	研究会	1993/7/16	ベルリンの老人ホームとケア付き集合住宅	大澤真理
	研究会	1993/9/22	女性の自己表現と文学—野上彌生子におけるフェミニズムと形式—	藤田和美
研究会	1993/10/15	—政治学者のみたジェンダー研究—オリエンタリズムとの関連—	石田雄	

	特定研究懇談会	1993/11/13	Women in Higher Education—A case of the University of California USA—	Dr.Maresi Nerad
	研究会	1993/11/14	変容する男性社会—労働、ジェンダーの日独比較	高島道枝ほか
	研究会	1993/12/3	Gender,Justice and Therapy: Can One Be a Feminist and Practise Family Therapy?	Jan McDowell
	シンポジウム	1993/12/14,15	女性とメディア	
	シンポジウム	1994/1/20	特定研究「ライフコースの多様化の時代における大学教育と女性」	
1994 (H6)	研究会/シンポ	1994/4/7	エコロジーとフェミニズムを考える	Maria Mies ほか
	研究会	1994/6/1	オーストラリア女性史研究—女性史からフェミニスト史へ	Vera Mackie
	研究会	1994/7/27	いけ花と日本女性: 知の発達・地から・ジェンダー	飛田尚弥
	研究会	1994/8/29	Feminist Studies and Qualitative Empirical Methods: the Case of Sex Tourism and Traffic in Women	Ilse Lenz
	研究会	1994/9/27	Internationalization and Gender Relations: Theoretical Approaches	Ilse Lenz
	研究会	1994/10/31	家族法改正をめぐる文献とその論点	海妻径子
	シンポジウム	1994/11/2	学内共同教育研究プロジェクト・大学における女性学及び女性学研究センターの役割について	
	研究会	1995/1/27	How to combine Parenthood and Work?—Policies on Gender in Sweden—	Rita Liljestrum
	研究会	1995/2/21	Current Trends in Women's Studies in India: Gender,Development and Empowerment/	Malavika Karlekar ほか
	研究会	1995/3/1	Women, Education, and Development in Bangladesh	Saleha Begum
1995 (H7)	研究会	1995/4/13	日本の女性国会議員—その形成と構造	大海篤子
	研究会	1995/5/12	姉さん女房の社会学	Ursula Richter
	研究会	1995/6/16	女性と政治	Elic Plutzer
	研究会	1995/7/3	遺伝子とジェンダー	Joan Hideko Fujimura
	研究会	1995/9/18	アメリカのフェミニスト法理論の現在	Frances Olsen
	研究会	1995/10/13	社会主義フェミニズムの観点から見る『雁』	玉枝 Prindle
	研究会	1995/11/24	エコロジーとフェミニズム	山本良一
	シンポジウム	1995/12/2	湯浅年子メモリアルカンファレンス—エレヌ・ランジュヴェアン・ジョリオをむかえて	Hélène Langevin-Joliot
	研究会	1995/12/19	The place of women in Egyptian Society	Samia Khedr Saleh
	研究会	1996/2/14	ネパールにおける Management と WID の視点	福土恵理香
研究会/シンポ	1996/3/19	日本の学問研究とジェンダー	館かおる	

## 【資料】⑦国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則

(平成 27 年 3 月 25 日制定)

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構規則第4条第2項の規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所(以下「研究所」という。)に関し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 研究所は、グローバル女性リーダー育成研究機構に附属する研究所として、ジェンダーに関する総合的、国際的な研究及び調査を行うとともに、ジェンダー研究者の育成に資することを目的とする。

(研究及び業務)

第3条 研究所は、前条の目的を達成するため、次に掲げる研究及び業務を行う。

- (1) ジェンダーに関する国際的研究及び調査
- (2) ジェンダー研究に関する教育研修
- (3) ジェンダー研究に関する文献・資料の収集および整理
- (4) ジェンダー研究に関する情報の提供
- (5) その他前条の目的を達成するために必要な業務

(組織)

第4条 研究所に、次に掲げる職員を置く。

- (1) 研究所長
- (2) 教員
- (3) 研究員
- (4) その他学長が必要と認めた職員

2 研究所に、次に掲げる職員を置くことができる。

- (1) 副研究所長
- (2) 特別招聘教授
- (3) 特任教員
- (4) 客員研究員
- (5) 研究協力員

(研究所長)

第5条 研究所長は、男女共同参画を担当する副学長並びに基幹研究院人文科学系、人間科学系及び自然科学系の系会議構成員(以下「系会議構成員」という。)である教授のうちから学長が任命する。

2 研究所長は、研究所の業務を掌理する。

3 研究所長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

4 研究所長が辞任を申し出たとき、又は欠員となったときの後任の者の任期は、前任者の残任期間とする。

(副研究所長)

第6条 副研究所長は、系会議構成員のうちから、研究所長が指名する。

2 副研究所長は、研究所長から指定された業務を掌理する。

3 副研究所長の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

4 副研究所長が辞任を申し出たとき、又は欠員となったときの後任の者の任期は、前任者の残任期間とする。

(研究員)

第7条 研究員は、第3条に掲げる研究及び業務に従事する。

2 研究員は、基幹研究院に所属する教員のうちから、学長が任命する。

3 研究員の任期は2年とし、その終期が研究員となる日の属する年度の翌年度の末日を超えることとなる場合は、翌年度の末日までとする。ただし、再任を妨げない。

(客員研究員)

第8条 客員研究員は、第3条に掲げる研究及び業務に参画する。

2 客員研究員は、本学専任の教員以外の者を、学長が委嘱する。

3 客員研究員の任期は1年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

(研究協力員)

第9条 研究協力員は、第3条に掲げる研究及び業務に協力する。

2 研究協力員は、本学専任の教員以外の者を、研究所長が委嘱する。

3 研究協力員の任期は1年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

(運営会議)

第10条 研究所に、研究所の運営並びに研究及び業務に関する事項を審議するため、ジェンダー研究所運営会議(以下「運営会議」という。)を置く。

2 運営会議は、次に掲げる者をもって組織する。

(1) 研究所長

(2) 副研究所長

(3) 第4条第1項第2号に掲げる教員

(4) 第4条第1項第3号に掲げる研究員のうちからグローバル女性リーダー育成研究機構長(以下「研究機構長」という。)が指名する者

(5) その他研究機構長が必要と認めた者

3 運営会議の議長は研究所長をもって充て、議長は運営会議を主宰する。

4 運営会議の構成員は、第2条の目的を達成する上で必要な事項について、運営会議での審議を求めることができる。

5 研究所長が必要と認めたときは、構成員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

6 本条に定めるほか、運営会議に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第11条 研究所の事務は、企画戦略課が行う。

(雑則)

第12条 この規則に定めるもののほか、研究所に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

1 この規則は、平成27年4月1日から施行する。

2 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究センター規則は、廃止する。

附 則

この規則は、令和2年4月1日から施行する。

## 【資料】⑧国立大学法人お茶の水女子大学特別招聘教授に関する規則

(平成 27 年 3 月 25 日制定)

(趣旨)

第 1 条 この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学職員就業規則(以下「職員就業規則」という。)第 4 条第 5 項の規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学(以下「本学」という。)のグローバル女性リーダー育成研究機構に置く研究所において雇用する特別招聘教授に関し必要な事項を定める。

(定義)

第 2 条 この規則において「特別招聘教授」とは、国際的に著名な研究者又は顕著な業績を有する研究者で、グローバルな視野から本学の教育研究活動の一層の推進及び活性化を図ることを目的として、本学が常勤の教員として採用する者をいう。

(選考)

第 3 条 特別招聘教授の選考は、教員人事会議の議を経て、学長が行う。ただし選考に係る審査は、基幹研究院長に付託するものとする。

2 前項の規定にかかわらず、学長の戦略的人事による選考は、役員会の議を経て、学長が行うものとする。

3 前 2 項の選考にあたっては、国立大学法人お茶の水女子大学教員選考基準第 1 条の規定を準用する。

(定年・雇用期間)

第 4 条 特別招聘教授の定年は 65 歳とし、当該定年に達した日以降における最初の 3 月 31 日(以下「定年退職日」という。)に退職するものとする。ただし、学長が特に必要があると認める職員については、この限りでない。

2 前項の規定にかかわらず、学長が必要と認める場合には、5 年以内の期間を定めて雇用することができる。

(給与及び退職手当)

第 5 条 特別招聘教授の給与は、国立大学法人お茶の水女子大学職員就業規則第 4 条第 4 項の規定に基づき年俸制を適用して雇用する教員の就業に関する規則(以下「年俸制適用教員の就業に関する規則」という。)

第 2 条第 1 号の規定に基づき採用された教員に関する同規則第 6 条から第 13 条の規定を適用する。

2 特別招聘教授の退職手当は支給しない。

(赴任及び帰国旅費)

第 6 条 特別招聘教授には、赴任及び帰国のための旅費を支給する。ただし、帰国のための旅費は退職後 3 か月以内に本邦を出発する場合に限り支給し、一時帰国のための旅費は学長が必要と認める場合に支給するものとする。

(就業等)

第 7 条 特別招聘教授の就業に関し、この規則に定めのない事項については、職員就業規則の定めるところによる。

2 特別招聘教授の給与に関し、この規則に定めのない事項については、国立大学法人お茶の水女子大学職員給与規程の定めるところによる。

(雑則)

第 8 条 この規則に定めるもののほか、特別招聘教授に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

1 この規則は、平成 27 年 4 月 1 日から施行する。

2 この規則の施行後最初に採用される特別招聘教授は、この規則に基づき選考されたものとみなす。

附 則(平成 27 年 10 月 23 日)

この規則は、平成 27 年 10 月 23 日から施行する。

附 則(平成 28 年 2 月 19 日)

この規則は、平成 28 年 2 月 19 日から施行する。

## 【資料】⑨『ジェンダー研究』編集方針・投稿規程

### 《編集方針》

1. 『ジェンダー研究』(以下、本誌)は、学際的・国際的なジェンダーに関する最新の研究成果を発信し、グローバルなジェンダー研究の発展に寄与する。
2. 本誌は、特集記事・投稿論文・書評からなる。
3. 本誌は特集記事を企画し、時宜にかなったもの、国際的な関心の高いもの、新領域を開拓するものなど、現在のジェンダー研究にとって重要であるテーマで、質の高い論文を掲載する。
4. 投稿論文は、国内外・学内外を問わず公募し、厳正な審査を経て掲載することで、質の高い学術論文の国内外への頒布を進める。
5. 書評は、国内外のジェンダーに関する書籍を厳選し、最先端の研究動向の紹介およびそれについての考察を加えた論評を行う。
6. 本誌の刊行により、国内外・学内外のジェンダーに関する研究の発展を促進し、グローバルかつ有機的な研究交流の構築を目指す。そして、国立大学法人として、男女共同参画社会の実現に貢献する等の、社会的要請にも応える。

### 《投稿規程》

- 1 投稿する論文は、女性学・ジェンダー研究に関する、学術的研究に寄与するものとする。
- 2 投稿者は、国内外を問わず、学際的に女性学・ジェンダーに関する研究に従事する、原則として修士号取得相当以上とする。
- 3 投稿する論文は、未発表の論文に限る。なお、この規程に違反した場合、新たな投稿を受け付けられないなど、しかるべき措置をとる。
- 4 論文執筆における使用言語は、原則として日本語または英語とする。日本語／英語以外の言語による投稿に関しては、編集委員会において検討する。
- 5 投稿論文は、
  - ・日本語の論文は、注・図表・参考文献を含めて 20000 字以内
  - ・英語の論文は、注・図表・参考文献を含めて 8500 ワード以内
  - ・なお、1 図表 500 字相当、1 ページを要する場合は 1000 字相当とする
  - ・挿図の場合は、1 ページあたり 1000 字、刷り上がり 20 頁内に入ることを原則に、およそ 20 点までとして全体を構成する
  - ・挿図に用いる図版の掲載許可については、投稿者が自らの責任において然るべき手続きをとる。なお許可に要する費用は、投稿者負担とする。

\* 定められた字数などの制限を超えた場合、形式において甚だしく不備がある場合には、受理できない。
- 6 論文の提出時には、本文・図表・参考文献のほかに、以下についても提出すること。
  - 6-1 表紙。論文タイトル(副題も含む)と投稿者氏名・所属を、日本語と英語とで記す。(タイトル等の英語表記は、確認のうえ編集事務局で変更する場合もある。)
  - 6-2 日本語要旨。400 字以内。
  - 6-3 英語要旨。200 ワード以内。ネイティブチェック済のもの。
  - 6-4 キーワード。日本語・英語ともに 5 語以内で、それぞれの要旨の後に記載する。なお、執筆者を特定するようないかなる情報(謝辞、科研番号)も記載してはいけない。

## 資料

7 投稿論文は、ジェンダー研究所ウェブサイト上の、以下のいずれかの投稿フォームより、必要事項を入力したうえで、メール添付にて送付すること。

日本語投稿フォーム

<https://form.jotform.me/72482244933459>

英語投稿フォーム

<https://form.jotform.me/72488720633461>

8 本文と要旨などのテキストのデータは Word と PDF のファイルにし、図、表のデータは Word または Excel と PDF にし、写真は JPEG と PDF のファイルにして提出すること。

9 他の文献等から図、表、写真などの転載を行う場合は、原則として投稿者が自らの責任において必要な手続きを行う。その際の費用に関しては投稿者が負担する。

10 本文、引用文、参考文献、注については、別に定める『ジェンダー研究』執筆要項に従う。英語の投稿論文は *Style Sheet for Journal of Gender Studies* とする。

11 投稿論文の掲載の可否は、査読者による審査のうえ、編集委員会が決定する。ただし、本投稿規定・執筆要項や本誌の趣旨に合致しない原稿、また学術的論文としての水準を著しく達していないと判断された場合、審査の対象外とする場合もある。

12 編集委員会は、査読者の審査にもとづき、投稿者に論文の修正を求めることがある。求められた投稿者は、速やかに論文を修正し、修正対応表をつけて、メールにて提出しなければならない。

13 投稿者による校正は原則 2 回までとする。

14 投稿後、投稿論文を取り下げる場合は、速やかに編集委員会に申し出ること。

15 原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。ただし、図・表・写真などが多い場合には、執筆者による自己負担となることがある。

16 掲載論文の著作権はお茶の水女子大学ジェンダー研究所に帰属するものとする。転載を希望する場合には、編集委員会の許可を必要とする。

## 改訂

1. 2017 年 10 月 27 日制定

2. 2021 年 5 月 14 日改訂

『ジェンダー研究』執筆要綱

<http://www2.igs.ocha.ac.jp/wp-content/uploads/2019/11/yoko2019.pdf>

【資料】⑩ジェンダー研究所ウェブサイト プライバシー・ポリシー

1. 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所(以下、本研究所)ウェブサイトでは本研究所のイベント開催に際して、イベント参加申込者の個人情報(氏名等により特定の個人を識別できるもの)を、本ウェブページ上にて収集することがあります。
2. 収集した個人情報はイベント開催における会場手配や安全確保、配布資料作成の参考として利用するものであり、本研究所のイベント開催通知以外では利用することはありません。
3. 収集した個人情報の管理は、ウェブ担当者が漏洩、紛失、改竄等に対する安全対策を行うことで保護し、その責任は本研究所所長が最終的に負います。
4. 本研究所では、プライバシー・ポリシーを改定することがあります。改定する場合は、当ウェブサイトでお知らせします。

附 則

このプライバシー・ポリシーは、2015 年 7 月 1 日から施行します。

国立大学法人お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構  
ジェンダー研究所（IGS）  
2021（令和3）年度事業報告書

編集担当：申琪榮・和田容子

発行：お茶の水女子大学ジェンダー研究所  
〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel: 03-5978-5846

[igsoffice@cc.ocha.ac.jp](mailto:igsoffice@cc.ocha.ac.jp)

<http://www2.igs.ocha.ac.jp>

2022年7月作成



〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1  
お茶の水女子大学 ジェンダー研究所

Institute for Gender Studies, Ochanomizu University  
2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610 Japan

TEL: 03-5978-5846 FAX: 03-5978-5845

[igsoffice@cc.ocha.ac.jp](mailto:igsoffice@cc.ocha.ac.jp)

<http://www2.igs.ocha.ac.jp>

